

本 城 町 遺 跡

— 福岡県柳川市本城町所在近世柳川城下町の調査 —

柳川市文化財調査報告書 第15集

2 0 1 9

柳川市教育委員会

本 城 町 遺 跡

— 福岡県柳川市本城町所在近世柳川城下町の調査 —

柳川市文化財調査報告書 第15集

序

筑後川と矢部川が有明海に注ぐ筑後平野南西部に位置する柳川市は、柳川藩十一万石の城下町であり、詩人北原白秋の詩歌の母胎となった水郷都市です。

このたび報告をいたします本城町遺跡は、近世柳川城の北三の丸に所在した常福寺の遺跡です。平成29年に学生寮の建設に伴い、柳川市教育委員会が発掘調査を実施いたしました。その結果、廃棄土坑、柱穴、溝、柵列など、寺院跡を現在に伝えと考えられる遺構が確認され、出土した陶磁器や木製品、金属器等と合わせて、近世柳川城の変遷を明らかにする手がかりとなりました。

本報告が今後の調査研究に寄与すると共に、埋蔵文化財に対する理解を深め、文化財保護に対する取り組みの一助となることを願います。

最後に、今回の調査にご理解を頂きご協力頂きました地元の皆様を始め、調査にあたりご助言ご指導を賜りました皆様、発掘調査に従事して頂きました皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成31年 3 月29日

柳川市教育委員会

教育長 沖 毅

例 言

- 1 本書は、学校法人柳商学園柳川高等学校の学生寮建設に伴い、学校法人柳商学園より柳川市教育委員会が委託を受けて発掘調査を実施した、柳川市本城町所在の本城町（ほんじょうまち）遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は柳川市教育委員会が事業主体となり、柳川市教育委員会生涯学習課の橋本清美が調査を担当した。
- 3 発掘調査における地形測量は埋蔵文化財サポートシステムが、遺構実測図の作成は橋本、大津諒太が行った。遺物実測図の作成は、西美智代、野口宏美、大津幸恵、大津諒太が行なった。
- 4 本書に掲載した空中写真撮影は空中写真企画が、遺構写真撮影、遺物写真撮影は調査担当が行った。
- 5 遺物の整理復元、遺物、遺構の製図は西、野口、大津幸恵、大津諒太が行った。
- 6 出土遺物、写真、実測図は全て柳川市教育委員会において保管している。
- 7 本書の執筆、編集は橋本、大津諒太が行った。
- 8 出土陶磁器の整理については、九州歴史資料館の遠藤啓介氏から協力を受けた。
- 9 出土獣骨の分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

※SK…土坑 SE…溝 SA…柵列 SP…小穴

本文目次

I	はじめに	1
1	調査に至る経過	1
2	調査組織	1
II	位置と環境	2
III	調査の内容	6
1	第1遺構面検出柵列・石列	6
2	第1遺構面検出土坑	8
3	第1遺構面その他の遺構出土遺物及び遺構面出土遺物	10
4	第2遺構面検出柵列	14
5	第2遺構面検出土坑	15
6	第2遺構面その他の遺構出土遺物及び遺構面出土遺物	21
7	第3遺構面検出土坑	28
8	第3遺構面その他の遺構出土遺物及び遺構面出土遺物、表採遺物	29
9	瓦	31
10	木製品・金属製品	33
11	石製品・土製品	35
12	石塔類	36
13	銭	37
IV	本城町遺跡の自然科学分析	39
V	総括	50

図版目次

- 図版1 1. 本城町遺跡調査区遠景（北から）
2. 本城町遺跡調査区遠景（西から）
3. 本城町遺跡調査区遠景（東から）
- 図版2 1. 本城町遺跡第1遺構面完掘状況（東から）
2. 西側壁面土層堆積状況（南から）
3. SK-1完掘状況（東から）

- 図版3 1. SK-13完掘状況（北から）
2. SK-76完掘状況（東から）
3. 石列密集状況4（北から）
- 図版4 1. 本城町遺跡第2遺構面完掘状況（真上から）
2. SK-105完掘状況（北から）
3. SK-112完掘状況（南から）
- 図版5 1. SK-116完掘状況（東から）
2. SK-117完掘状況（西から）
3. SK-118完掘状況（東から）
- 図版6 1. 第2遺構面溝完掘状況（西から）
2. 溝西側壁面土層堆積4状況（東から）
3. 溝堆積有機物出土状況（北から）
- 図版7 1. 本城町遺跡第3遺構面完掘状況（真上から）
2. SK-200完掘状況（東から）
3. SK-202完掘状況（北から）
- 図版8 出土遺物①
- 図版9 出土遺物②
- 図版10 出土遺物③
- 図版11 出土遺物④
- 図版12 出土遺物⑤
- 図版13 出土遺物⑥
- 図版14 出土遺物⑦

挿 図 目 次

第1図	柳川市位置図	1
第2図	周辺遺跡分布図（1/25,000）	2
第3図	調査区位置図（1/2,500）	3
第4図	御家中絵図『旧藩主立花家史料』	3
第5図	御家中絵図『蒲池（寿一）文書』	4
第6図	常福寺『旧藩主立花家史料』	4

第7図	本城町遺跡土層図 (1/40)	5
第8図	本城町第1遺構面遺構配置図 (1/200)	6
第9図	SA-1・2実測図 (1/40)	7
第10図	石列実測図 (1/30)	8
第11図	SK-1・13・36・68実測図 (1/40)	9
第12図	SK-1・13・36・68・石列 出土遺物実測図 (1/3)	10
第13図	SK-76実測図 (1/40)	11
第14図	K-76出土遺物実測図 (1/3)	12
第15図	第1遺構面その他の遺構出土遺物実測図 (38は1/6、他は1/3)	13
第16図	第1遺構面溝、第1遺構面出土遺物実測図 (1/3)	14
第17図	第2遺構面遺構配置図 (1/200)	15
第18図	溝西側壁面土層図 (1/40)	16
第19図	SA-3・4実測図 (1/40)	17
第20図	SK-105・107・112実測図 (1/40)	18
第21図	SK-115・116・117実測図 (SK-115は1/60、他は1/40)	19
第22図	SK-118・120実測図 (1/40)	20
第23図	SK-105・107・112・115・118・120・121出土遺物実測図 (1/3)	22
第24図	SK-121・122・123実測図 (1/40)	23
第25図	SK-122・123出土遺物実測図 (1/3)	24
第26図	第2遺構面溝・その他の遺構出土遺物実測図 (104は1/6、他は1/3)	25
第27図	第2遺構面出土遺物実測図① (1/3)	26
第28図	第2遺構面出土遺物実測図② (1/3)	27
第29図	本城町第3遺構面遺構配置図 (1/200)	28
第30図	SK-200・202・205実測図 (1/40)	29
第31図	SK-202・その他の遺構・第3遺構面出土遺物 (1/3)	30
第32図	表採遺物実測図 (1/3)	31
第33図	瓦実測図 (1/3)	32
第34図	木製品実測図① (1/3)	33
第35図	木製品②・金属製品実測図 (1/3)	34
第36図	石製品・土製品実測図 (233は1/4、他は1/3)	35
第37図	石塔類実測図 (1/4)	36
第38図	出土銭拓本 (1/1)	37

表 目 次

第1表	遺物観察表	52～58
-----	-------------	-------

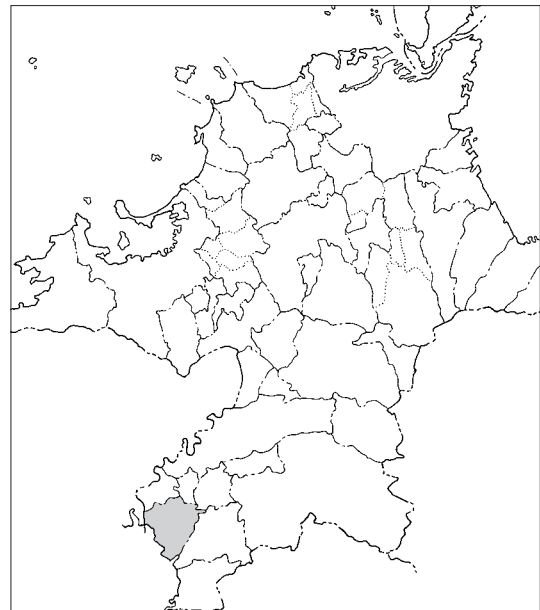
I はじめに

1 調査に至る経過

福岡県柳川市は筑後川と矢部川とに挟まれた筑後平野の南西に位置する、人口約69,000人、面積76.88平方キロメートルの地方都市である。市南部には近世以前から戦後まで造られた広大な干拓地が広がる他、本市を含む筑紫平野南部一帯には、水田の灌漑水用の水路が網のように巡り、独特の景観を形成している。

今回、学校法人柳商学園 柳川高等学校の学生寮建設が計画されたことに伴い、平成28年11月30日に文書により埋蔵文化財の有無について照会を受けた柳川市教育委員会が、平成28年12月9日に確認調査を実施した。その結果、近世の遺物を伴う遺構面を確認したため、当地が近世柳川城北三の丸に当たることから城内に関連する遺構であると判断し、その後の協議を始めた。

数次の協議を経て、開発予定地において学生寮建設工事により遺構が破壊される範囲で発掘調査を行うこと、調査費は事業者である学校法人柳商学園から支出することを合意し、文化財保護法による諸手続きを経て平成29年7月7日学校法人柳商学園と柳川市との間で本城町遺跡埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結した。



第1図 柳川市位置図

2 調査組織

発掘調査及び報告書作成の関係者は次のとおりである。

		平成29年度	平成30年度
総括 柳川市教育委員会	教育長	日高 良	沖 毅
	教育部長	田尻 主範	田尻 主範
	生涯学習課長	袖崎 朋洋	袖崎 朋洋
	生涯学習課長補佐	堤 英幸	本吉 尊
	文化財保護係長	堤 英幸 (兼)	本吉 尊 (兼)
	文化財保護係	堤 伴治	堤 伴治
		橋本 清美 (整理・経理担当)	橋本 清美 (整理・経理担当)
嘱託職員			大津 諒太
学校法人柳商学園	理事長	古賀 賢	古賀 賢

なお、発掘調査及び報告書作成の期間中、大変多くの方々のご指導ご協力をいただきました。
(順不同、敬称略) 福岡県教育庁教育総務部文化財保護課、九州歴史資料館

Ⅱ 位置と環境

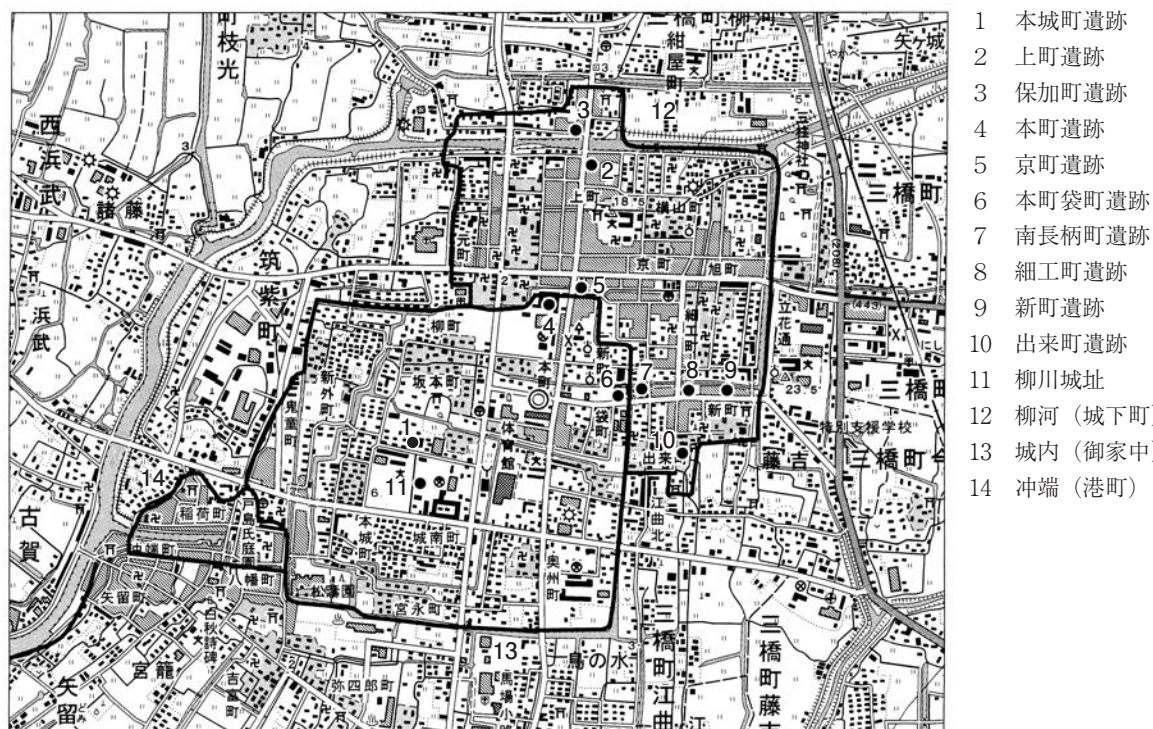
本城町遺跡は、柳川市の中央部やや西寄り、柳川の中心市街地に所在する、近世柳川城北三の丸の遺跡である。旧城下町の全域が周知の埋蔵文化財包蔵地「柳川城郭跡」にあたり、確認調査により遺構を確認した拠点から随時、近世の旧地名に由来する現在の町名を与えた遺跡を登録している。

本遺跡が所在する柳川市は筑後平野南西部の有明海北縁にあたり、西を筑後川、東を矢部川に挟まれた三角州に立地し、標高0～5m程度の平坦な低平地である。柳川市に面する有明海は干満差の激しい国内有数の干潟を有し、沿岸部には干拓地が広がる。柳川城の城郭を形成する城堀は、城下町の東辺にある3ヶ所の水門から二ツ川の水を取水して水路で繋ぎ、さらに城堀の南岸に複数の取水口を備え、二ツ河から市南部の宮永地区及び両開地区に再分配するための中盤施設の役割を果たす。

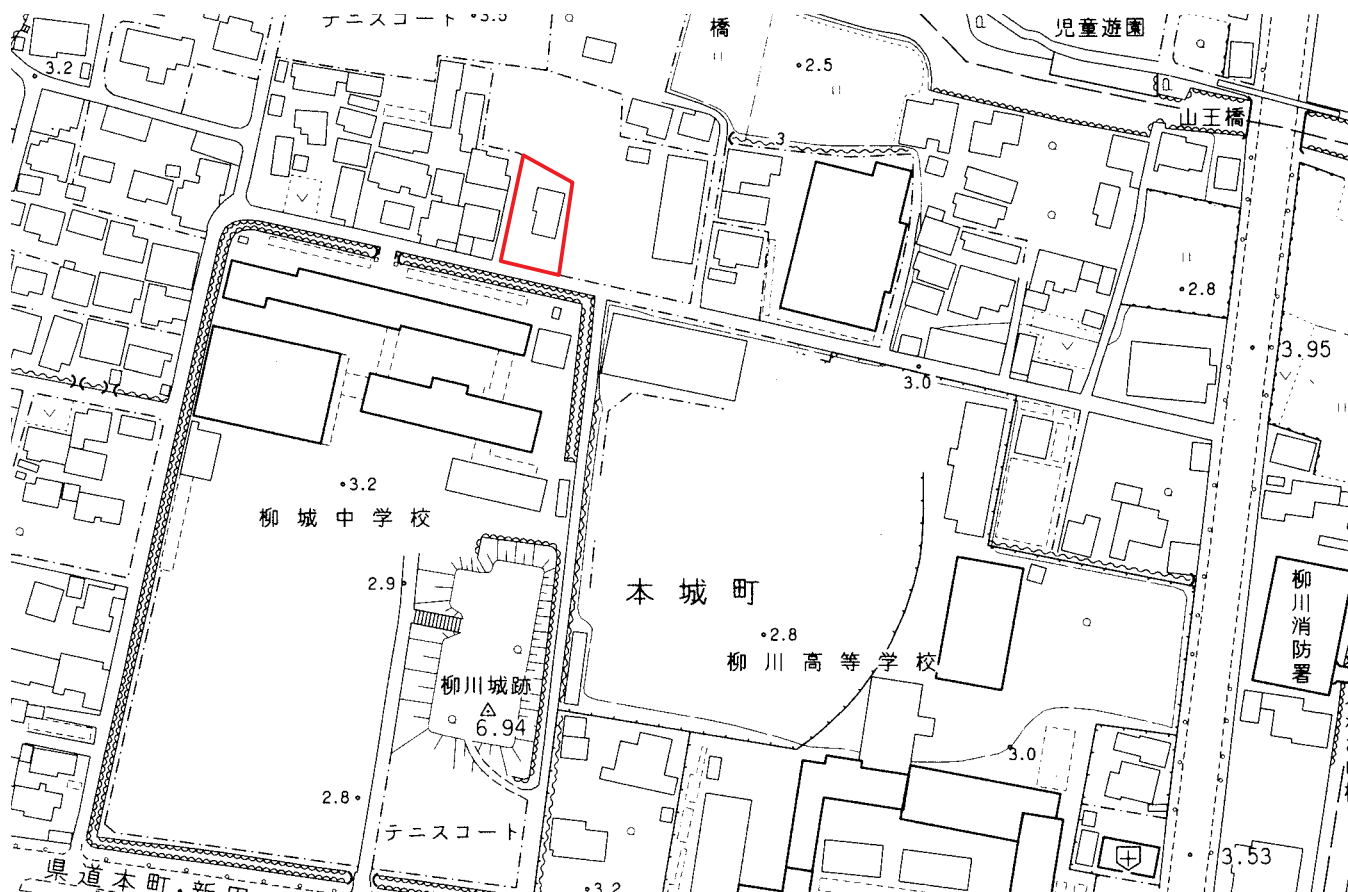
天正15（1587）年、立花宗茂が柳川城に入り、三潞・下妻・山門の三郡を支配した。慶長5（1600）年に関ヶ原の戦いで西軍に与した宗茂が改易されると、田中吉政が筑後国の領主として柳川城に入る。しかし2代忠政に後嗣が無く、断絶改易となった。そして元和6（1620）年、立花宗茂が再封され、以後幕末まで立花氏の支配が続いた。

近世柳川城下の構造は地理的な関係から、柳川城を中核に武家が集中する「城内」と通称される地区と、町人が主に居住した「沖端町」と「柳河町」の三地区に大別することができる。

本城町遺跡は柳川城の北三の丸にあたり、今回の調査地は近世の柳川城の様子を描いた「御家中絵図」から常福寺が所在した場所であると考えられている。常福寺は、真言宗御室仁和寺の末寺で、奥州棚倉馬場天満宮別当浄津寺宍法印の草創である。立花宗茂が棚倉を治めていた時に茶話の伽となり、元和7（1621）年に立花宗茂の柳川再封に伴い、柳川に移った。当初は、同じく本城町に所在した長久寺の場所にあったが、寛永9（1632）年に当地に移った。同寺内には柳川城本丸より移された、天満宮もあった。常福寺は、藩主の病気祈願等を行なう祈願所として古文書等に記載されているが、明治2年に廃寺となった。廃寺となった後は、常福寺の住職の子孫が本地に住んでいたことが柳河藩立花家文限帳などからわかる。そのため、本調査地は寺院として利用された後、宅地として利用された土地に所在する。



第2図 周辺遺跡分布図（1/25,000）



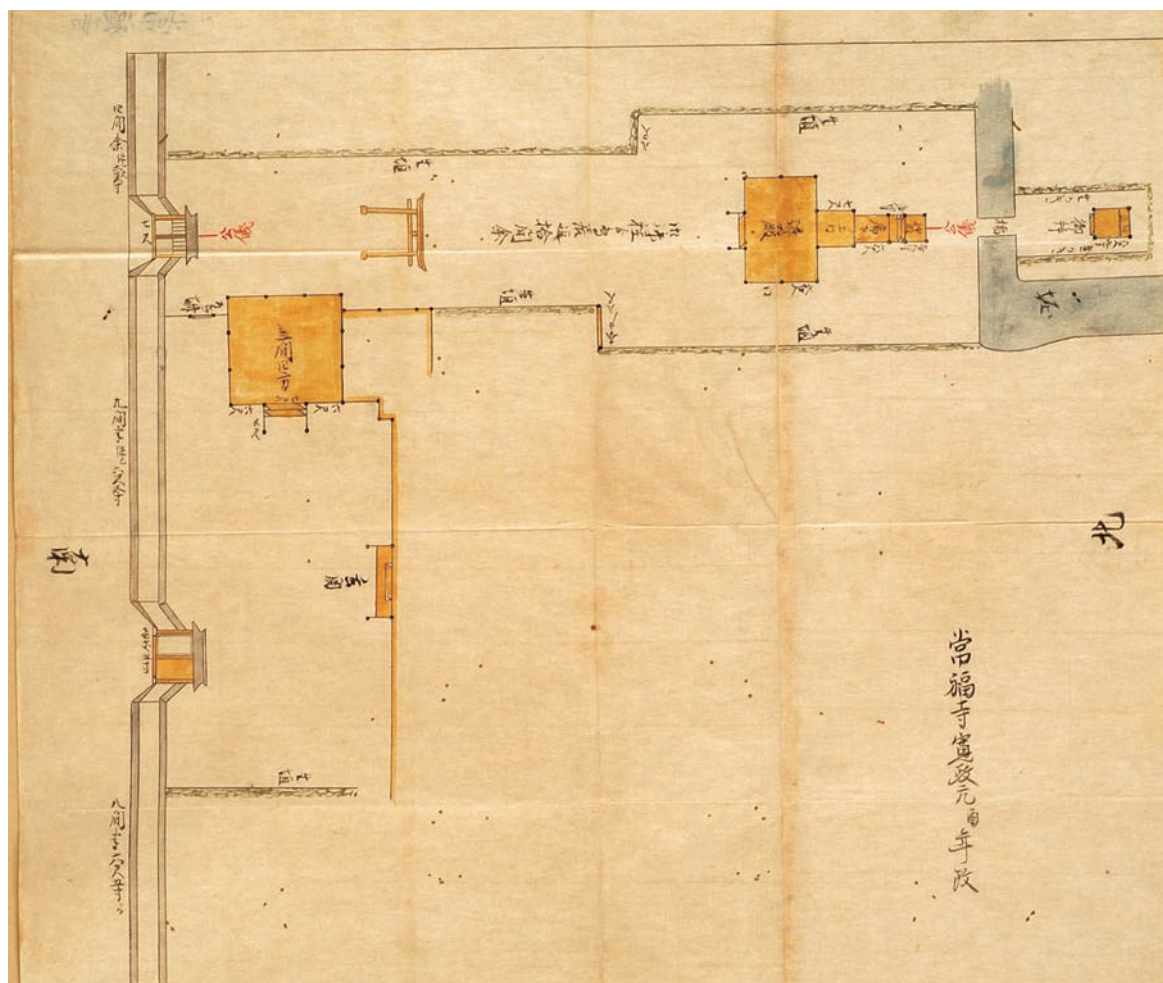
第3図 調査区位置図 (1/2,500)



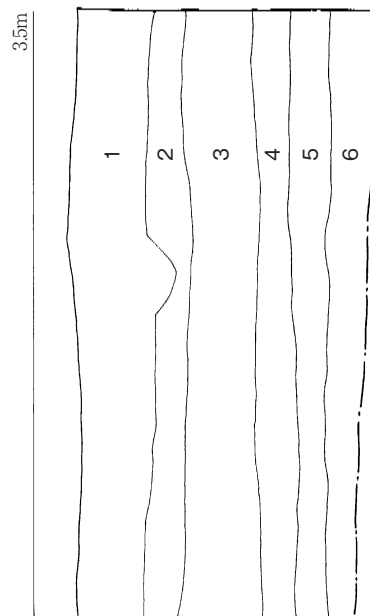
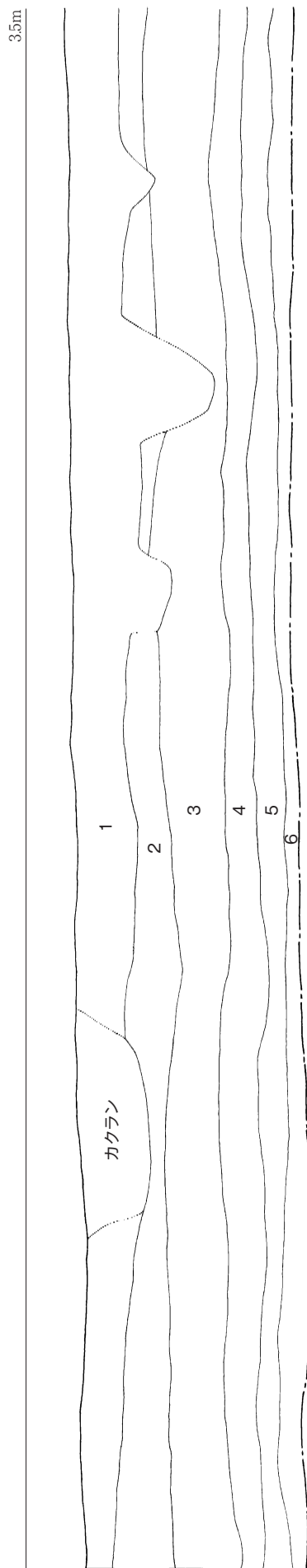
第4図 御家中絵図 (『旧藩主立花家史料』より一部抜粋)



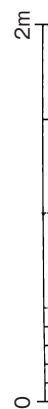
第5図 御家中絵図（『蒲池（寿一）文書』より一部抜粋）



第6図 常福寺（『旧藩主立花家史料』）



1. 茶色土(表土) 粘質弱い石・砂を多く含む
2. 明茶色土 粘質普通軟質土器片・炭化物・茶色粒状の金属分を含む
3. 暗茶色粘土 粘質普通軟質土器片・炭化物・茶色粒上の金属分を含む
4. 暗黄灰色粘土 粘質強い陶磁器片・土鍾・炭化物・茶色粒上の金属分を含む
5. 淡黄灰色粘土 粘質強い陶磁器片 炭化物 茶色粒上の金属分を含む
6. 青灰色粘土 粘質非常に強い茶色粒上の金属分を多く含む



第7図 本城町遺跡土層図 (1/40)



第8図 本城町第1遺構面遺構配置図 (1/200)

Ⅲ 調査の内容

本城町遺跡の発掘調査は、平成29年7月31日から重機による表土掘削を開始した。調査にあたっては、安全に考慮し調査を行った。遺構密度はそれほど高くないが、調査区全面にわたっており、全体を1/20縮尺で実測し、各遺構のレベルを入れる作業を行った。また主要遺構については個別に実測図作成を行い、写真撮影も行った。調査が終了したのは平成29年11月23日である。

調査範囲は東西18.5m、南北35m、各面の別紙調査面積は650㎡で、3面の調査を行い総調査面積1,950㎡である。検出した主な遺構は、土坑、溝、柵列、小穴である。出土遺物は、近世陶磁器、青磁、白磁、染付け、土師器、瓦質土器、瓦、木製品、石製品、石造物、銅銭、金属器である。

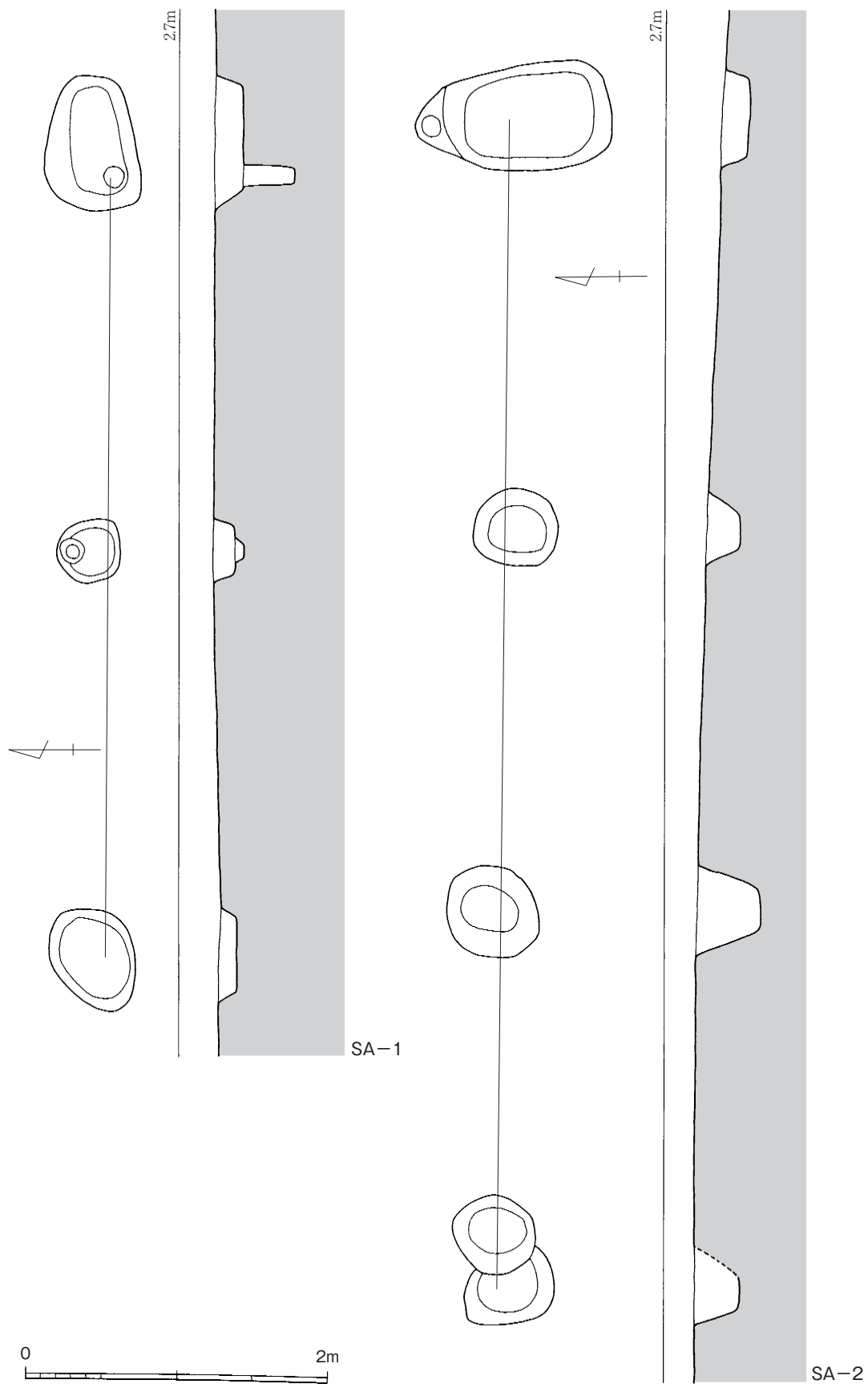
1 第1遺構面検出柵列・石列

SA-1 (第9図)

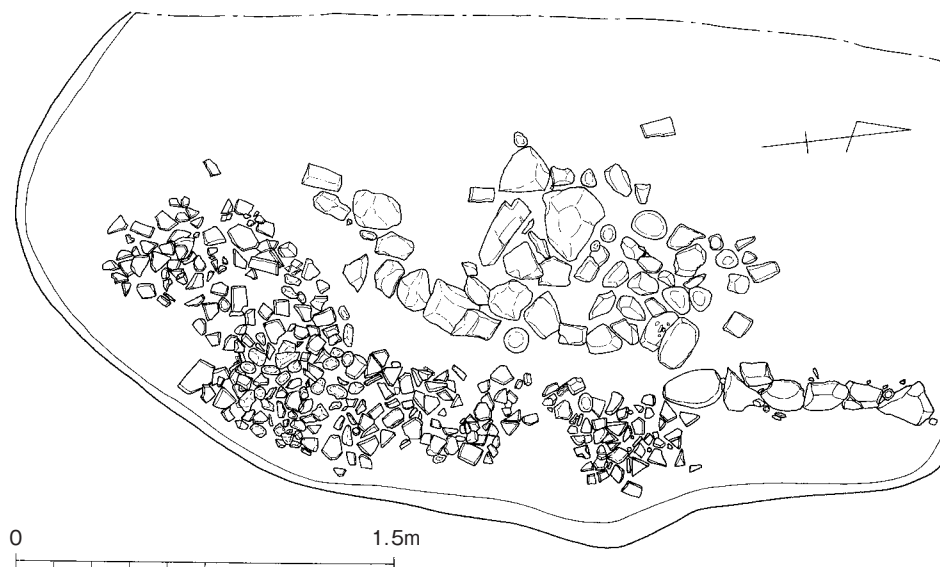
調査区北寄りで検出した遺構で、東西方向にピットが一行に並ぶ。柱間は2.5mで、2間分検出する。ピットは不整円形で、掘り方は0.4～0.9m、深さ0.14～0.5mを測る。木杭等は検出されなかったが、中央と東端のピットは底面に掘り込みが確認できた。

SA-2 (第9図)

調査区南寄りで検出した遺構で、東西方向にピットが一行に並ぶ。柱間は2.5mで、3間分検出する。ピットの掘り方は0.5～1.3m、深さ0.18～0.4mを測る。



第9図 SA-1・2実測図 (1/40)



第10図 石列実測図 (1/30)

石列 (図版3、第10図)

調査区北西隅に位置する遺構である。北端は調査区外であり全容は不明。全体的には南北方向に緩い弧を描きながら10cm～30cm程度の石が並ぶが、弧の内側にも石が密集する箇所がある。弧の外側には瓦溜まりが石列に沿って40cm～60cm程度の幅で広がり、土器や川原石も多く混ざる。

出土遺物 (第12図)

6は陶器の壺で、胎土は暗褐色を呈する。

2 第1遺構面検出土坑

SK-1 (図版2、第11図)

石列遺構の南側に隣接する不整形の土坑で、長軸1.36m・短軸1.12m、深さは最深部で0.36mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは比較的急な傾斜を呈する。

出土遺物 (図版8、第11図)

1は高取系と考えられる陶器の水差しで、口縁部上面は露胎である。

SK-13 (図版3、第11図)

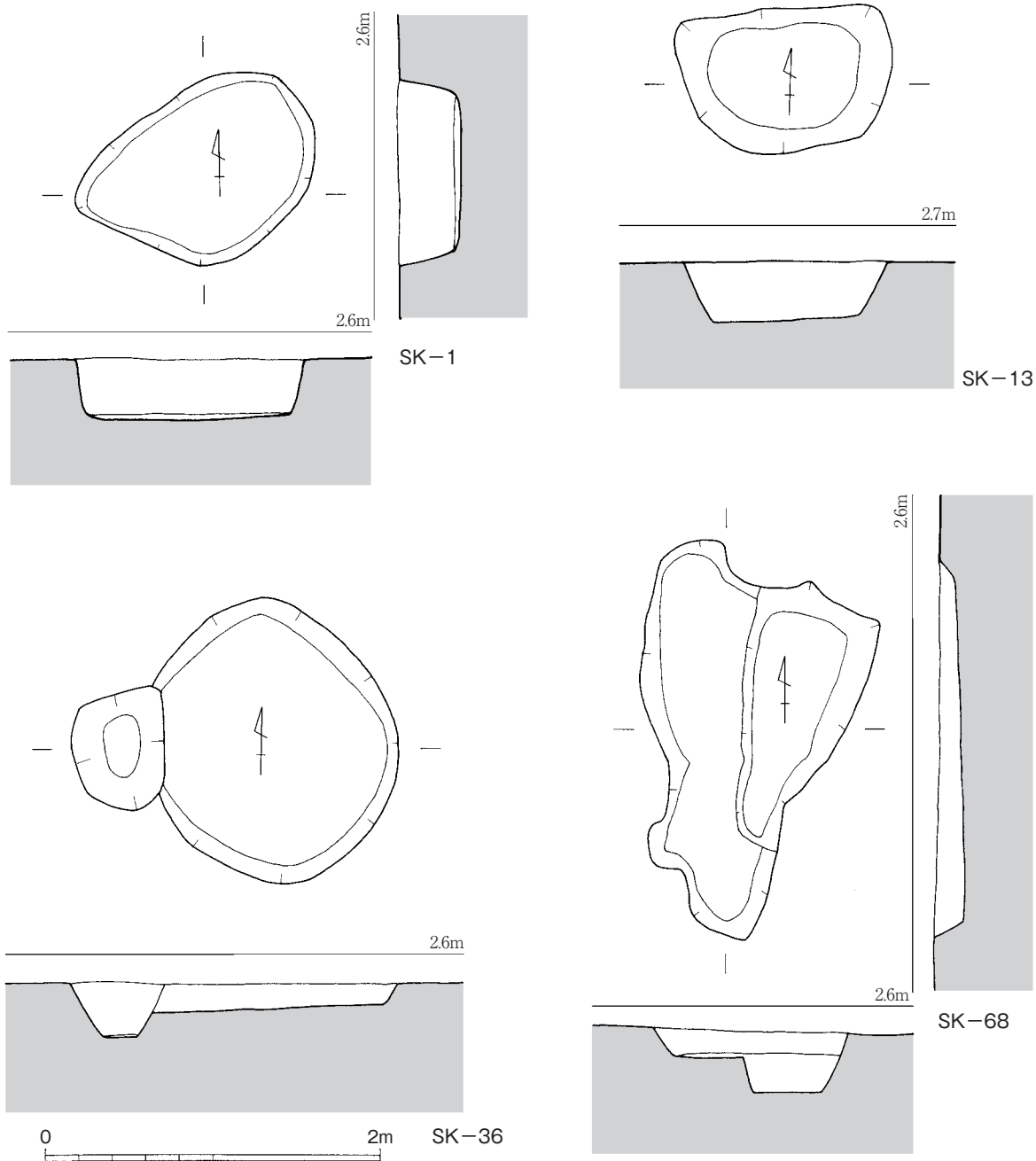
柵列の軸上に位置する、やや形の崩れた隅丸長形状の土坑で、長軸1.2m・短軸0.88m、深さは最深部で0.36mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは比較的緩やかに傾斜する。

出土遺物 (第12図)

2は陶器の播鉢で、胎土は褐色を呈する。口縁部内外面に鉄釉を施し、播目の単位は不明である。

SK-36 (第11図)

中央部、溝中に位置し、2つの不整円形土坑が切り合った状態で検出した。土層観察の結果、西側が東側を切る形で状況であった。長軸1.96m・短軸1.7m、深さは西側土坑最深部で0.34m、東側



第11図 SK-1・13・36・68実測図 (1/40)

土坑最深部で0.18mを測る。共に底面は平坦で、立ち上がりは緩やかに傾斜する。

出土遺物 (第12図)

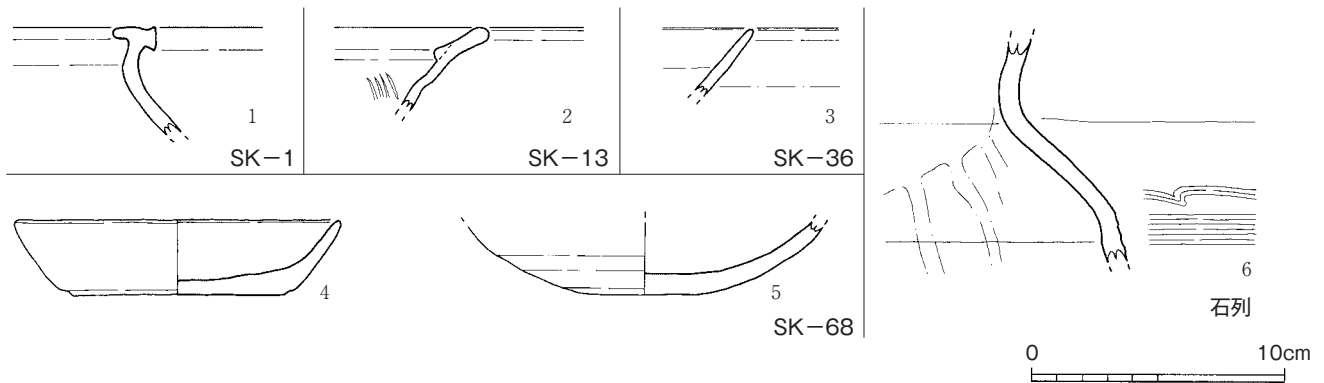
3は中国系白磁の碗で、内面に一条の沈線を施す。

SK-68 (第11図)

SA-2の南側に位置する不整形の土坑で、長軸2.36m・短軸1.16m、深さは最深部で0.36mを測る。底面は全体的に平坦だが、西側がテラス状に立ち上がり、緩やかに傾斜する。

出土遺物 (第12図)

4は土師器の皿である。5は瓦器の皿である。



第12図 SK-1・13・36・68・石列 出土遺物実測図 (1/3)

SK-76 (図版3、第13図)

SA-2の北側に位置する不整形の土坑で、長軸2.36m・短軸1.16m、深さは最深部で0.36mを測る。底面は全体的に平坦だが、西側がテラス状に立ち上がり、緩やかに傾斜する。

出土遺物 (図版8、第14図)

7と8は土師器である。7は皿で、胎土は淡黄灰色を呈する。8は坏で、胎土は淡黄灰色を呈する。9は中国系白磁の碗で、胎土は淡橙白色を呈する。10は中国系青磁、龍泉窯の碗である。見込みに、蓮花文の印文を施す。11は肥前系磁器の染付碗で、外面に丸菊文を描く。12は肥前系磁器の碗で、外面に草文を描く。13から17は肥前系磁器の染付碗である。13は外面に草文を描く。14は外面に草花文を描く。15は外面に草花文、笹文を描く。16は外面に草花文を描く。17は高台と高台内に圈線、外面全体に放射状に菊弁文を描く。

18は肥前系磁器の蓋物鉢で、外面に六条一単位の横線文を描く。19は肥前系磁器染付の皿で、口縁は輪花状を呈す。内外面に花唐草文、高台内面に圈線と渦福を描く。20は肥前系磁器色絵の碗で、内面口縁部に梅文と菊文、見込みに菊唐草文、外面に菊文と草花文、高台内面に菊花文を描く。

21は陶器の土瓶で、外面に銅緑釉、鉄釉、白化粧土で松文を描く。22は唐津の陶器で皿である。23は肥前系の京焼風陶器の皿。24は陶器の灯明皿で、ナデ後、内面のみに鉄釉を施す。底部糸切り痕を残す。25から27は肥前系の京焼風陶器である。25は火入れで、高台及び内面は露胎である。26と27は碗である。26は内面に菊花文を描く。27は見込みに鉄釉で山水文を描く。28は中国系の福建の可能性のある磁器の皿で、見込みは蛇の目釉剥ぎをする。29は在地系陶器の播鉢で、内外面口縁部に鉄釉を施す。播目の単位は不明である。

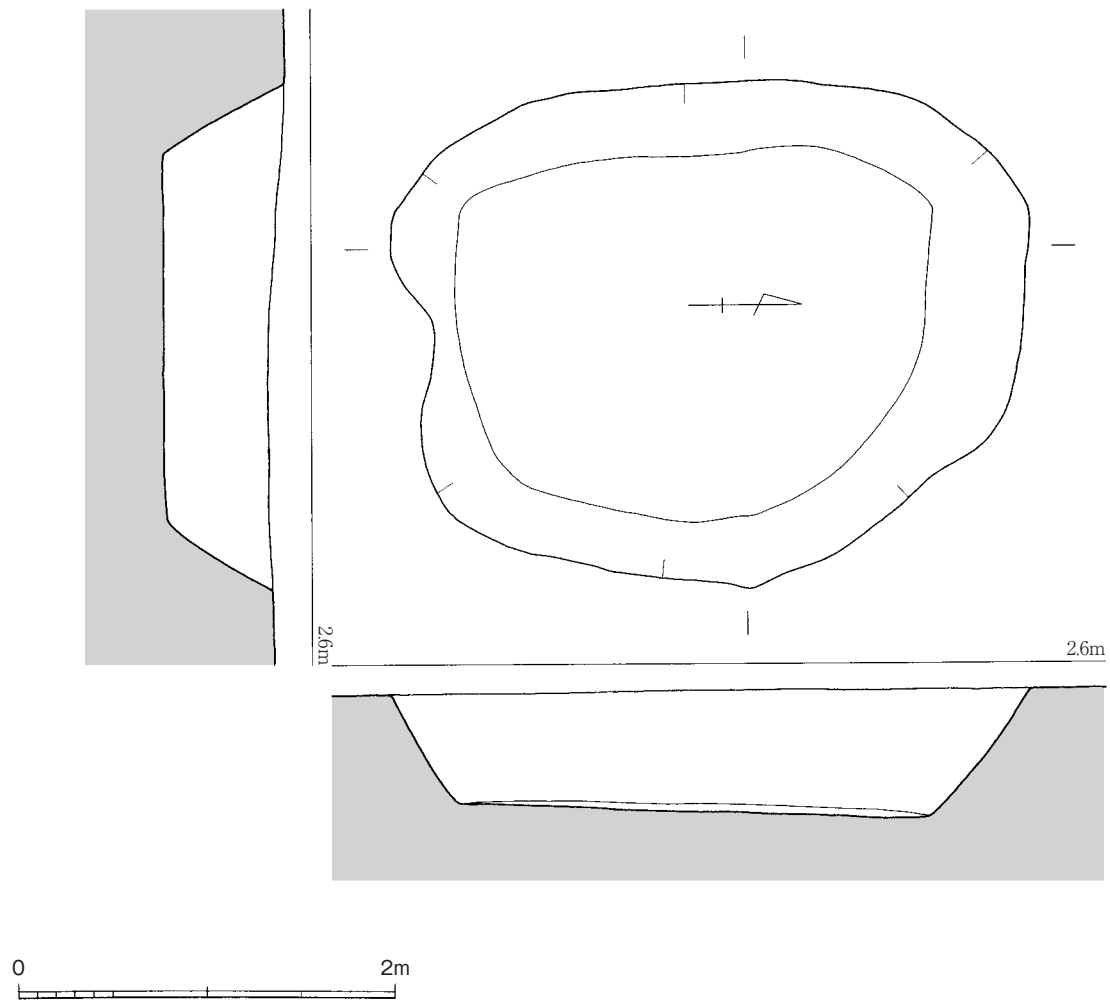
3 第1遺構面その他の遺構出土遺物及び遺構面出土遺物

出土遺物 (図版8、第15・16図)

30、31はSK-8出土の遺物である。30は陶器の植木鉢である。内面口縁部から外面高台付近まで鉄釉を施す。高台には波状の抉りを入れ、底部中央は穿孔する。31は肥前系磁器の染付碗である。口縁部に圈線、内外面に唐草文を描く。

32はSK-17出土の唐津系と考えられる陶器の碗で、見込みは鉄釉の上から黒色釉を流し掛ける。

33、34は土師質土器である。33はSK-22出土の甕である。34はSK-33出土の播鉢で、外面は指



第13図 SK-76実測図 (1/40)

オサエ痕が残る。播目の単位は7条である。

35から37は、土師器である。35はSK-38出土の小坏で、内外面ナデによる調整痕残り、底部は板状圧痕が残る。36はSK-44出土の土師器の小皿で、内外面ナデによる調整痕残り、底部は糸切り痕が残る。37はSK-45出土の皿である。38はSK-45出土の甕で、口縁部内外面ナデ、内面全体的にハケメ、外面上半部にハケメによる調整痕を残す。

39はSK-41出土の肥前系染付碗である。内面に四方襷文、外面に網目文を描く。

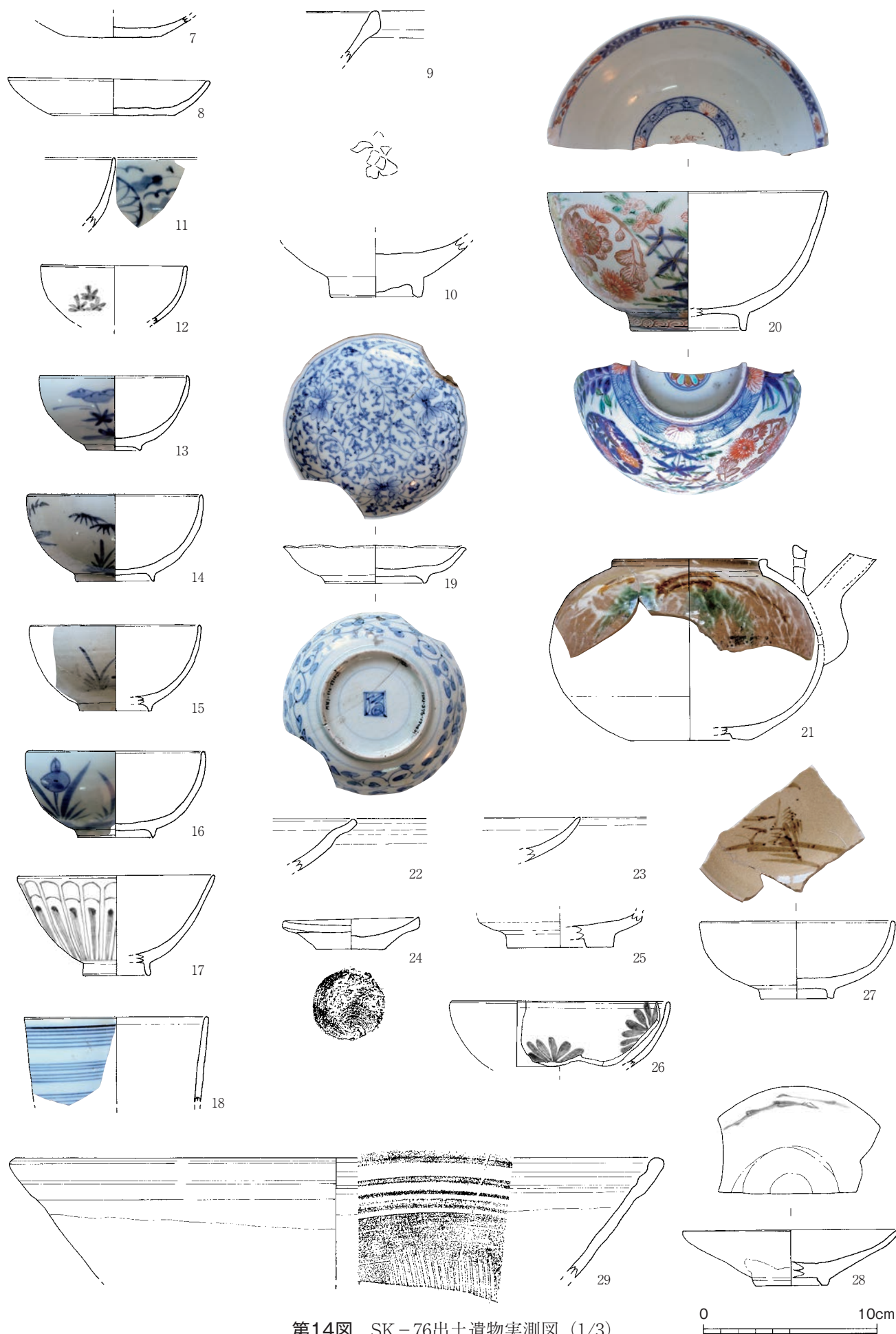
40から42はSK-57出土の遺物である。40は瓦質土器の碗で、内面はミガキ、外面はミガキと指オサエによる調整痕を残す。41は瓦器碗で、外面はミガキによる調整痕を残す。42は中国系白磁の鉢で、口縁は玉縁を呈する。

43はSK-60出土の中国系青磁、龍泉窯の鉢である。44から46はSK-67出土の肥前系染付である。

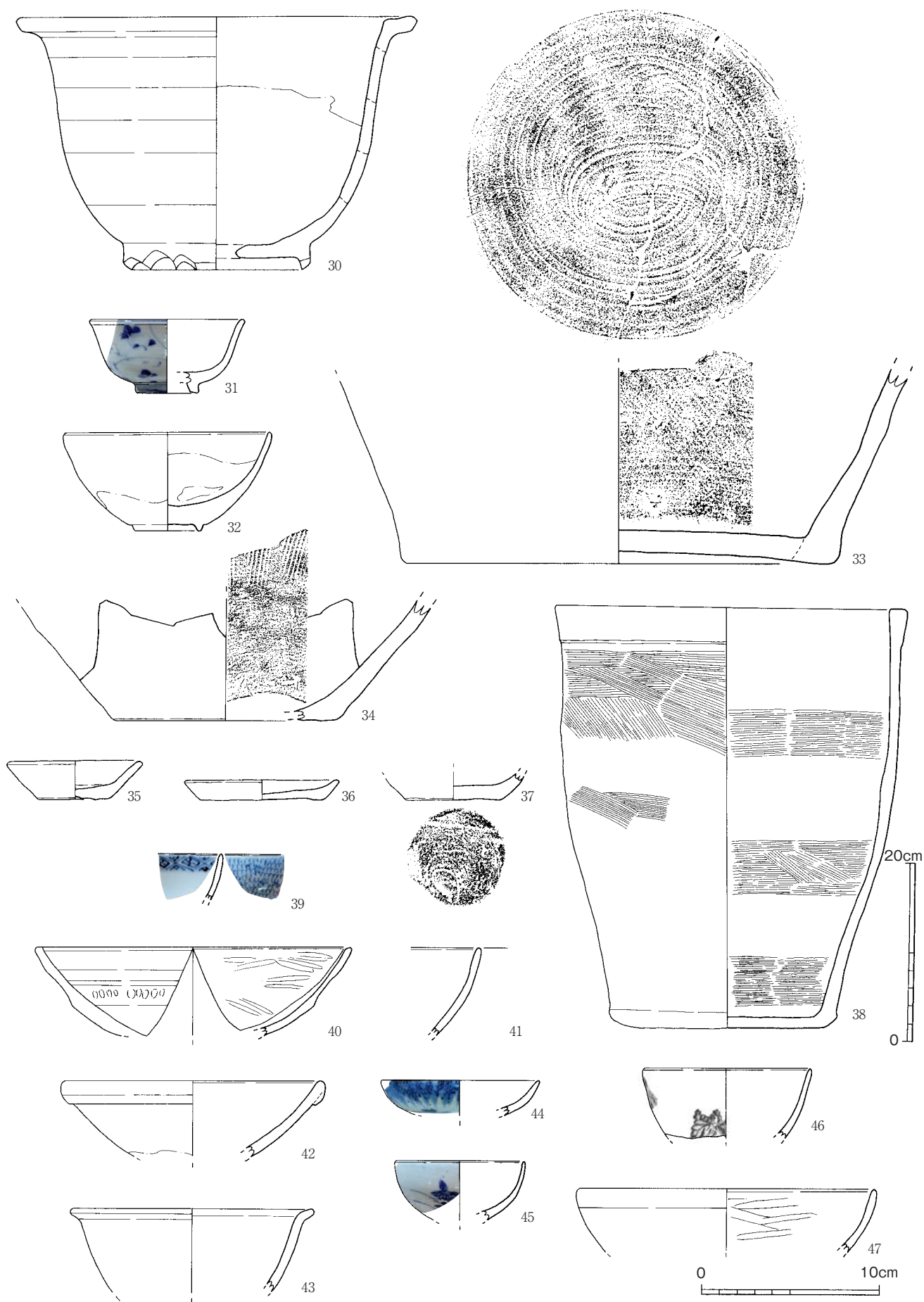
44は皿で、外面に雨降り文を描く。口縁部は口鋳を施す。45は碗で、外面に草花文を描く。46は碗で、外面に桐文を描く。

47はSK-70出土の瓦器皿である。

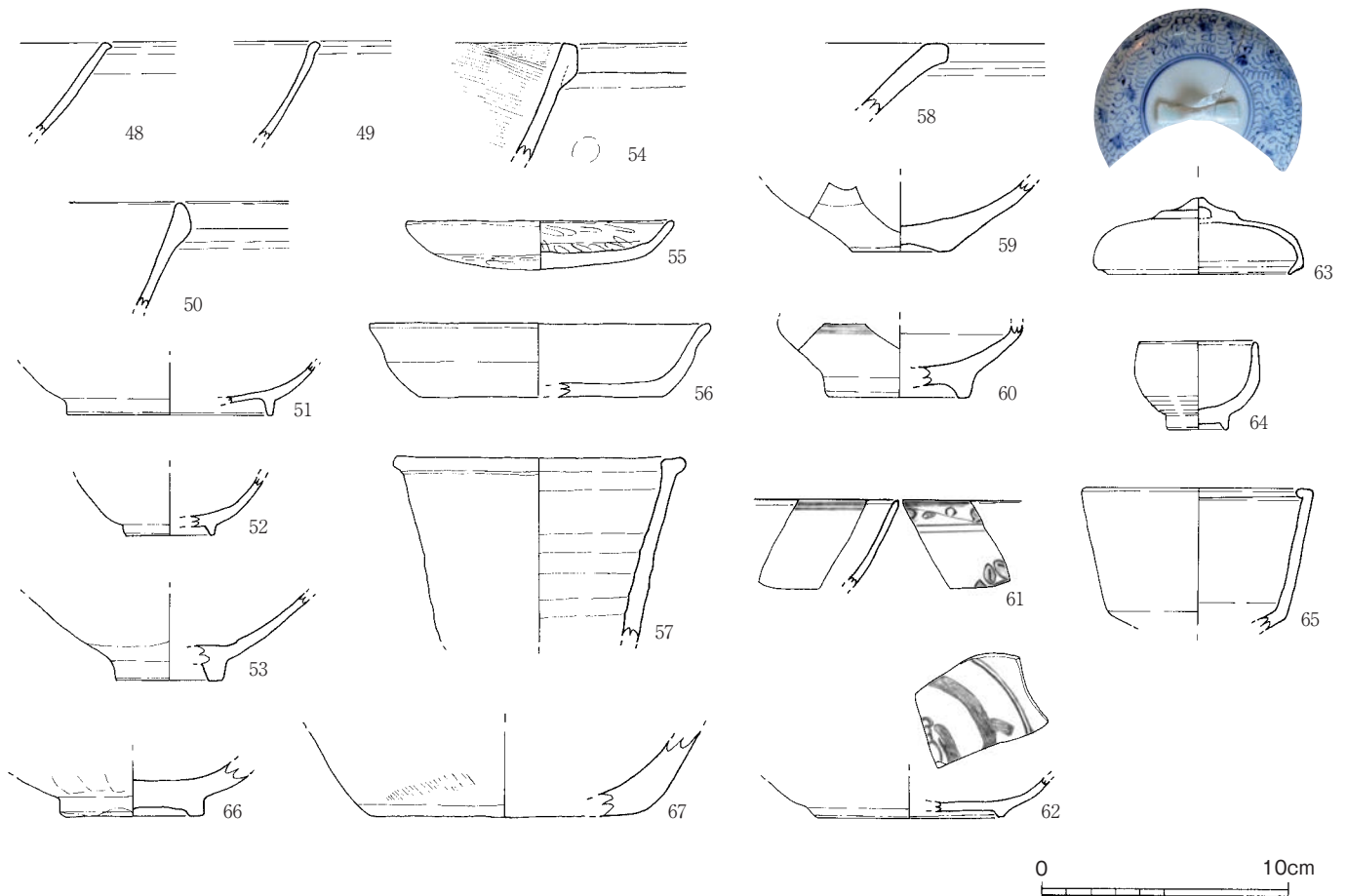
48から65は第1遺構面遺構検出時出土の遺物である。48から51は中国系白磁で、48から50は碗である。48と49の口縁端部は嘴状を呈す。50の口縁は玉縁を呈す。51は皿である。52は肥前系磁器の小碗である。53は中国系白磁の碗である。見込みは蛇の目釉剥ぎである。



第14図 SK-76出土遺物実測図 (1/3)



第15図 第1遺構面その他の遺構出土遺物実測図（38は1/6、他は1/3）



第16図 第1遺構面溝、第1遺構面出土遺物実測図（1/3）

54は土師質土器の鍋で、内面はヨコハケによる調整を施し、外面は指オサエ痕を残す。55は瓦器皿で、内外面はナデ後ミガキ、底部は丁寧なナデによる調整を施す。56は土師器の在来系の皿で、内外面はナデにより調整し、底部は糸切り痕が残る。57は土師質の壺で、内外面はヨコナデにより調整する。58から60は陶器である。58は鉢である。59は唐津系と考えられる皿で、三日月高台である。60は火入れで、外面に白化粧土でハケメ様の調整を施す。

61から63は磁器である。61と62は中国系磁器の青花である。61は景德鎮の碗で、口縁部内面に2条の圈線、口縁部外面に圈線と草文を描く。62は景德鎮系の皿で、見込みに2条の圈線を描く。63は肥前系染付の蓋で、外面に草花文を描く。

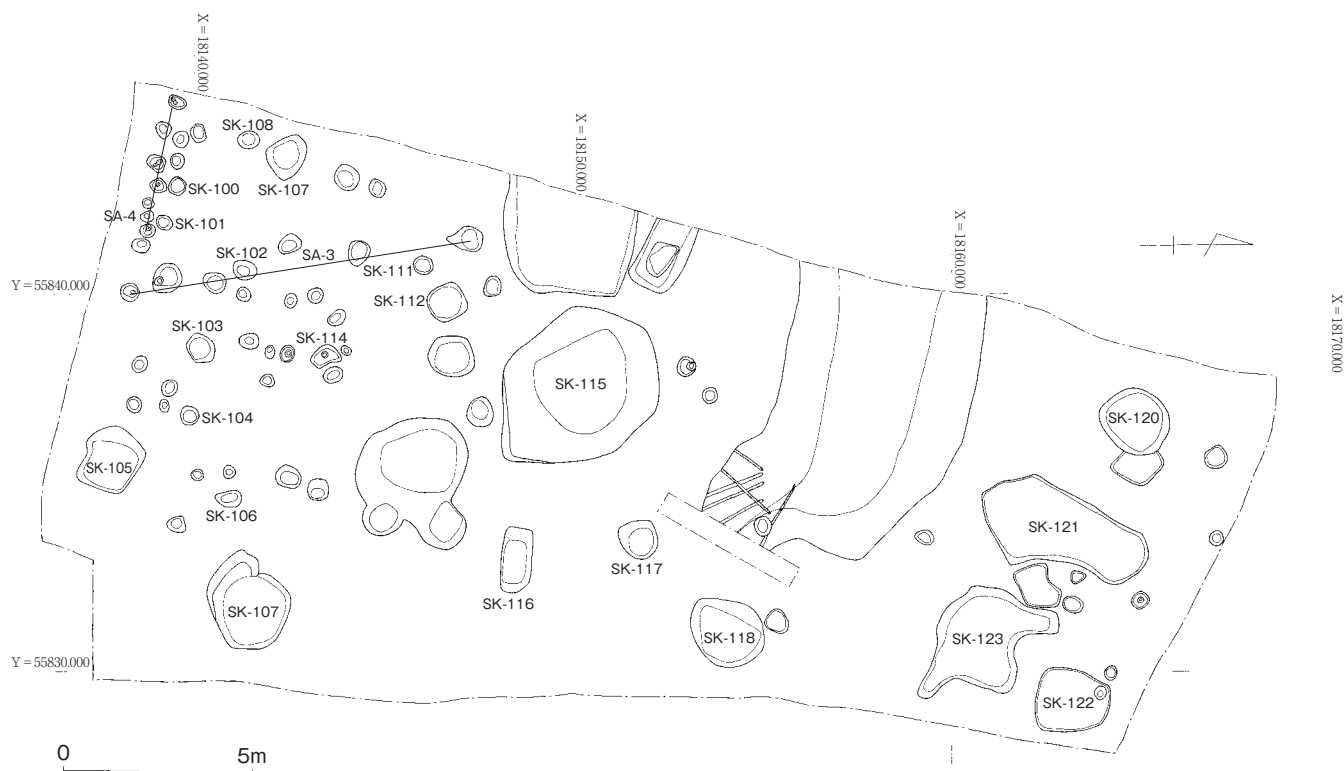
64は陶器の猪口である。65は肥前系の京焼風陶器で、火入れである。内面に薄く煤が付着する。

66・67は第1遺構面検出の溝から出土した遺物である。66は中国系磁器で、龍泉窯の皿である。67は土師質土器の鍋で、外面はハケ目とナデにより調整する。

4 第2遺構面検出柵列

SA-3（第19図）

調査区南西寄りで検出した遺構で、軸はやや東西にぶれるが、ほぼ南北方向にピットが一行に並ぶ。柱間は3.0mで、3間分検出する。ピットは不整形から円形で、掘り方は0.5～0.94m、深さ0.3～0.4mを測る。南端のピットからは木杭を検出した。



第17図 第2遺構面遺構配置図 (1/200)

SA-4 (第19図)

調査区南西隅、SA-3に隣接して検出した遺構で、軸はやや南北にぶれるが、ほぼ東西方向にピットが一行に並ぶ。柱間は1.8mで、2間分検出する。ピットは不整形円形から楕円形で、掘り方は0.34～0.5m、深さ0.1～0.22mを測る。両端のピットからは木杭を検出した。

5 第2遺構面検出土坑

SK-105 (図版4、第20図)

SA-3東寄りに位置する不整形円形の土坑で、長軸1.74m・短軸1.42m、深さは最深部で0.3mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは急な傾斜を呈するが、西側は緩やかに傾斜する。

出土遺物 (第23図)

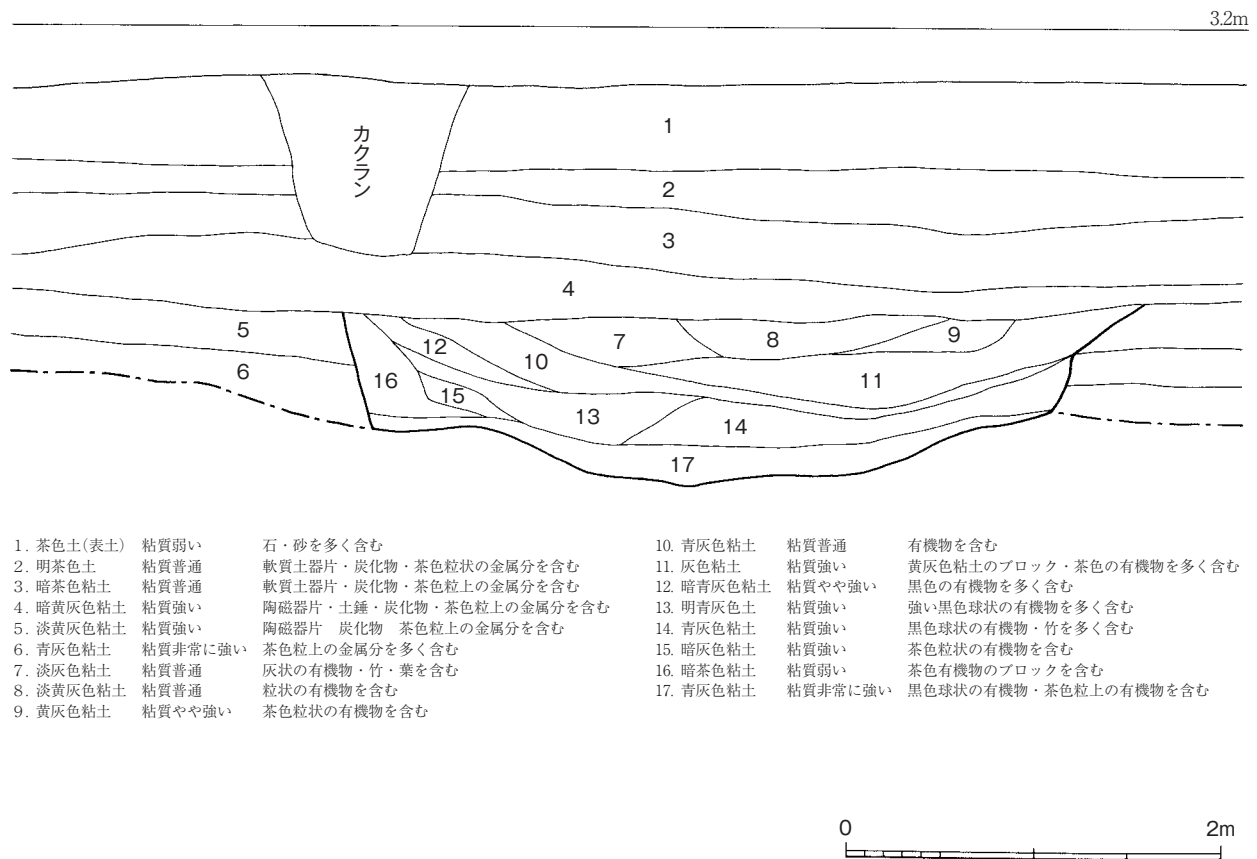
68・69は瓦器埴である。

SK-107 (第20図)

南東隅付近に位置し、2つの不整形土坑が切り合った状態で検出した。土層観察の結果、東側が西側を切る状況であった。長軸2.64m・短軸2.22m、深さは東側土坑最深部で1.28m、西側土坑最深部で0.5mを測る。底面は全体的に平面で、立ち上がりは東側土坑はほぼ垂直で、西側土坑は緩やかに傾斜する。

出土遺物 (第23図)

70・71は瓦器埴で、70の内外面はミガキによる調整を施す。72は中国系白磁の皿で、見込みに一条の沈線を施す。



第18図 溝西側壁面土層図 (1/40)

SK-112 (図版4、第20図)

SA-3の東側に位置する隅丸方形の土坑で、長軸1.0m・短軸0.92m、深さは最深部で1.12mを測る。底面は全体的に平面で、ほぼ垂直に立ち上がる。

出土遺物 (第23図)

73は土師質土器の甕である。74は陶器の甕である。

SK-115 (第21図)

調査区ほぼ中央に位置する大型の不整形土坑で、長軸3.34m・短軸2.46m、深さは最深部で0.96mを測る。底面は全体的に平坦で、南東側の立ち上がりは特に緩やかに傾斜する。

出土遺物 (図版10、第23図)

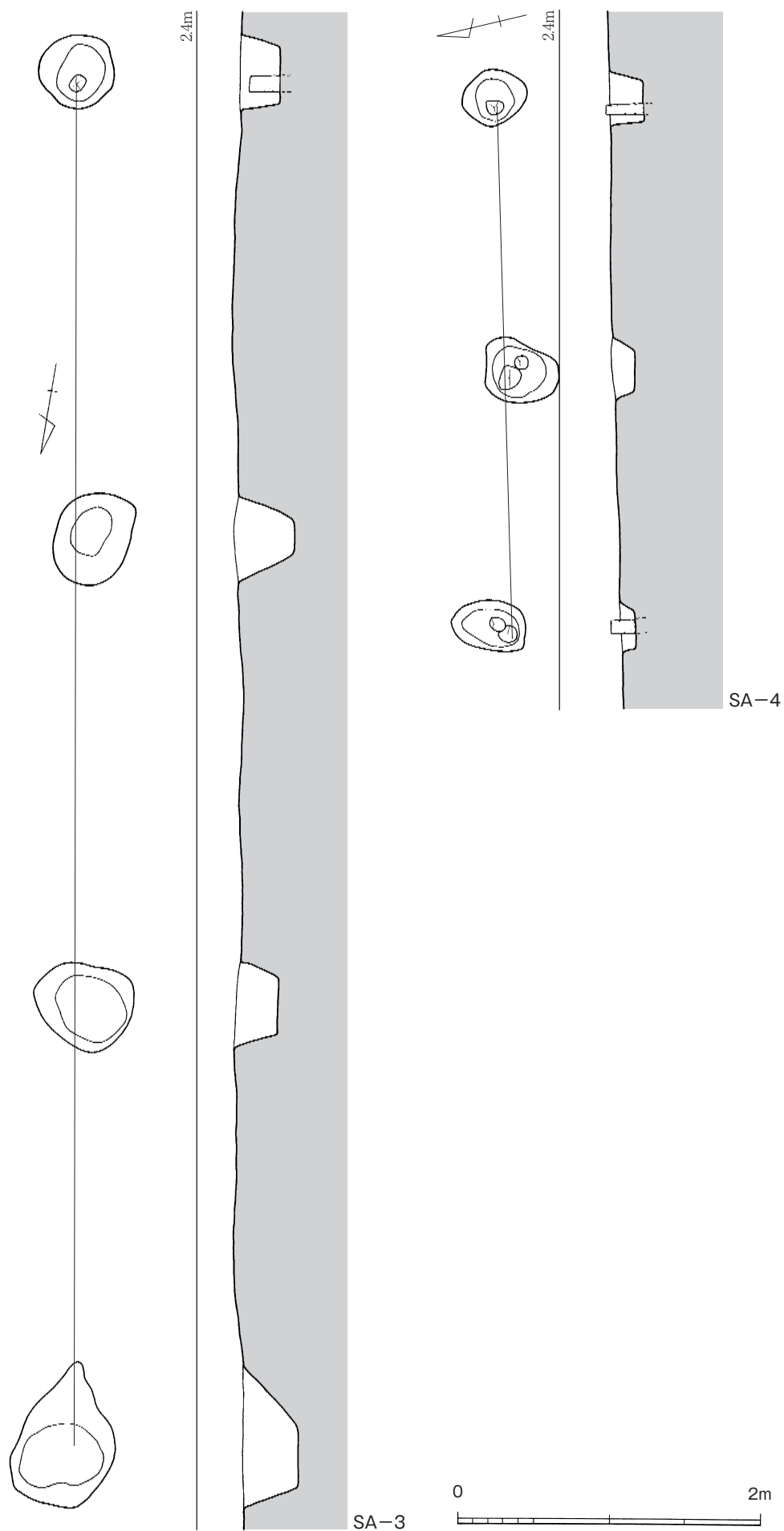
75は土師質土器の鍋で、内面にミガキによる調整を施す。

SK-116 (図版5、第21図)

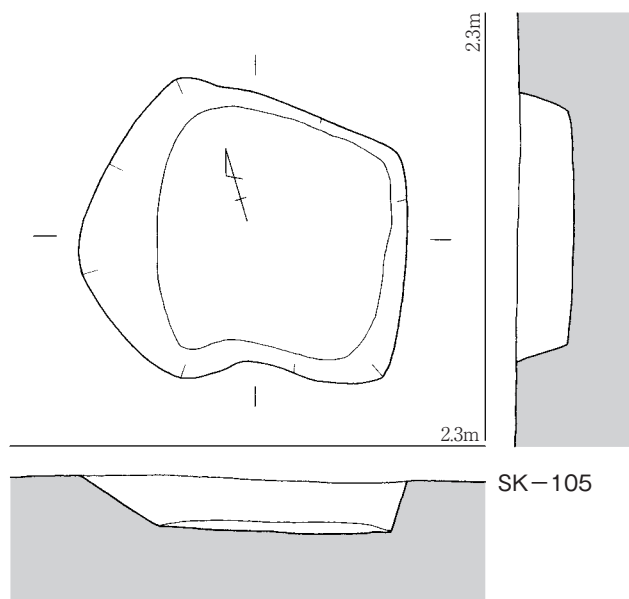
SK-115の東側に位置する隅丸長形状の土坑で、長軸1.72m・短軸0.8m、深さは最深部で1.28mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは比較的急な傾斜を呈する。

SK-117 (図版5、第21図)

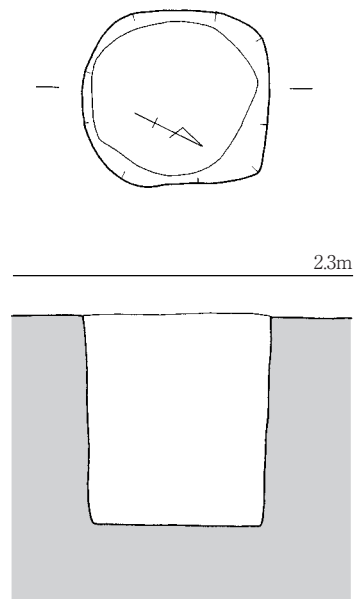
溝の南東付近に位置する不整円形の土坑で、長軸1.0m・短軸0.98m、深さは最深部で1.42mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりはかなり急な傾斜を呈する。



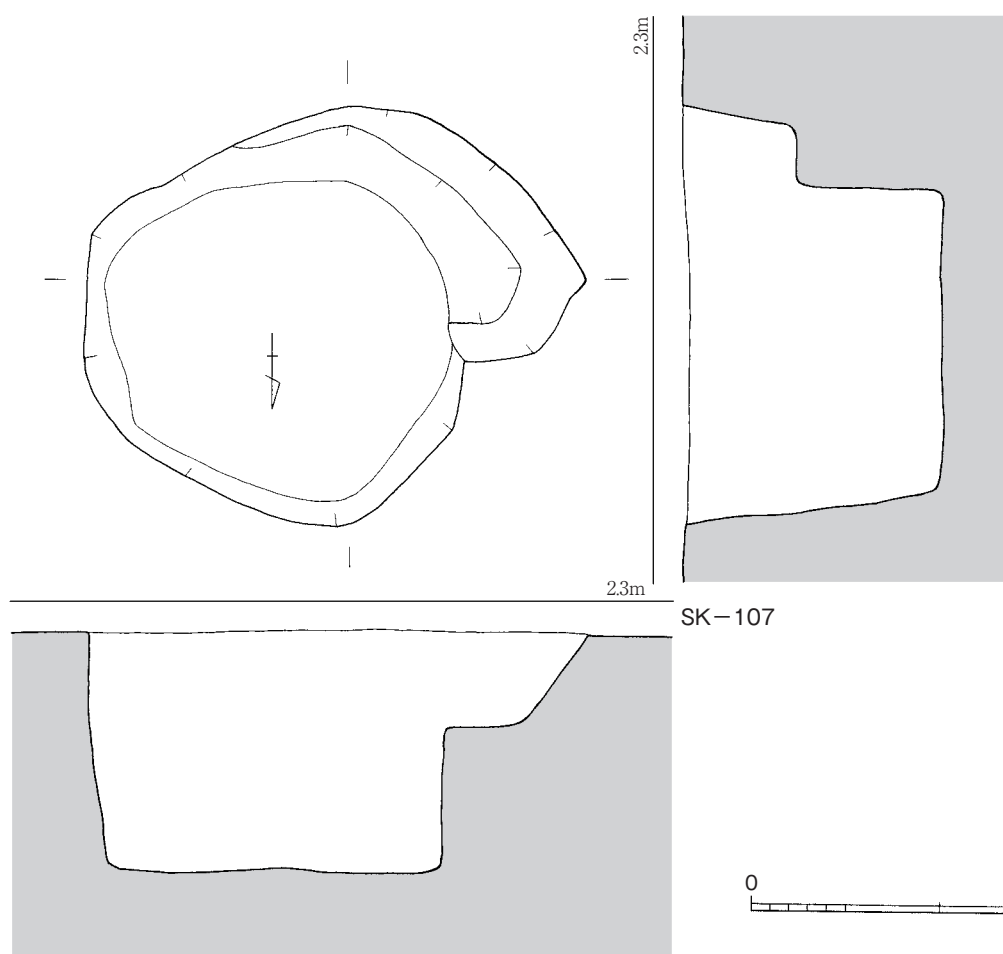
第19図 SA-3・4実測図 (1/40)



SK-105



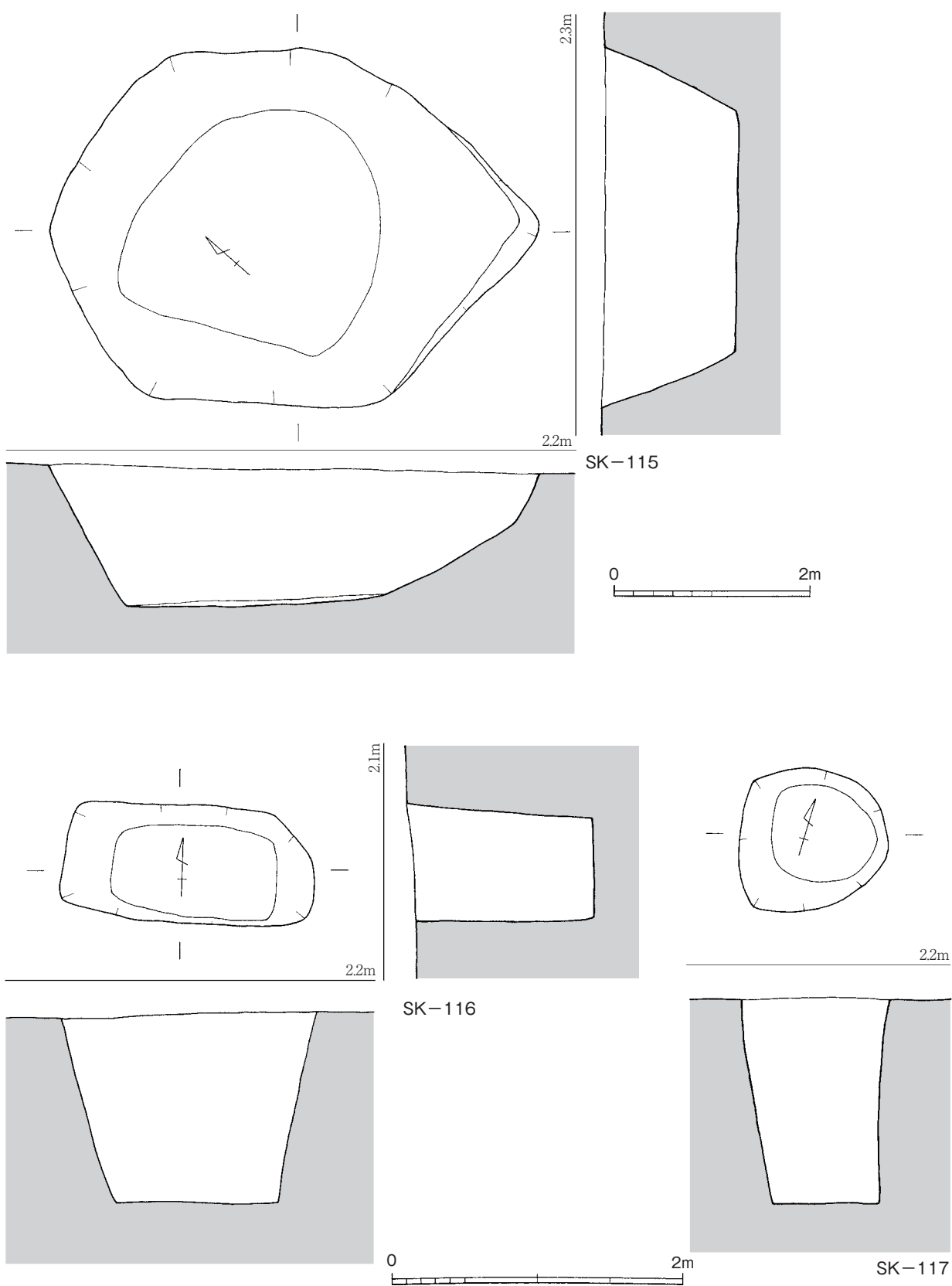
SK-112



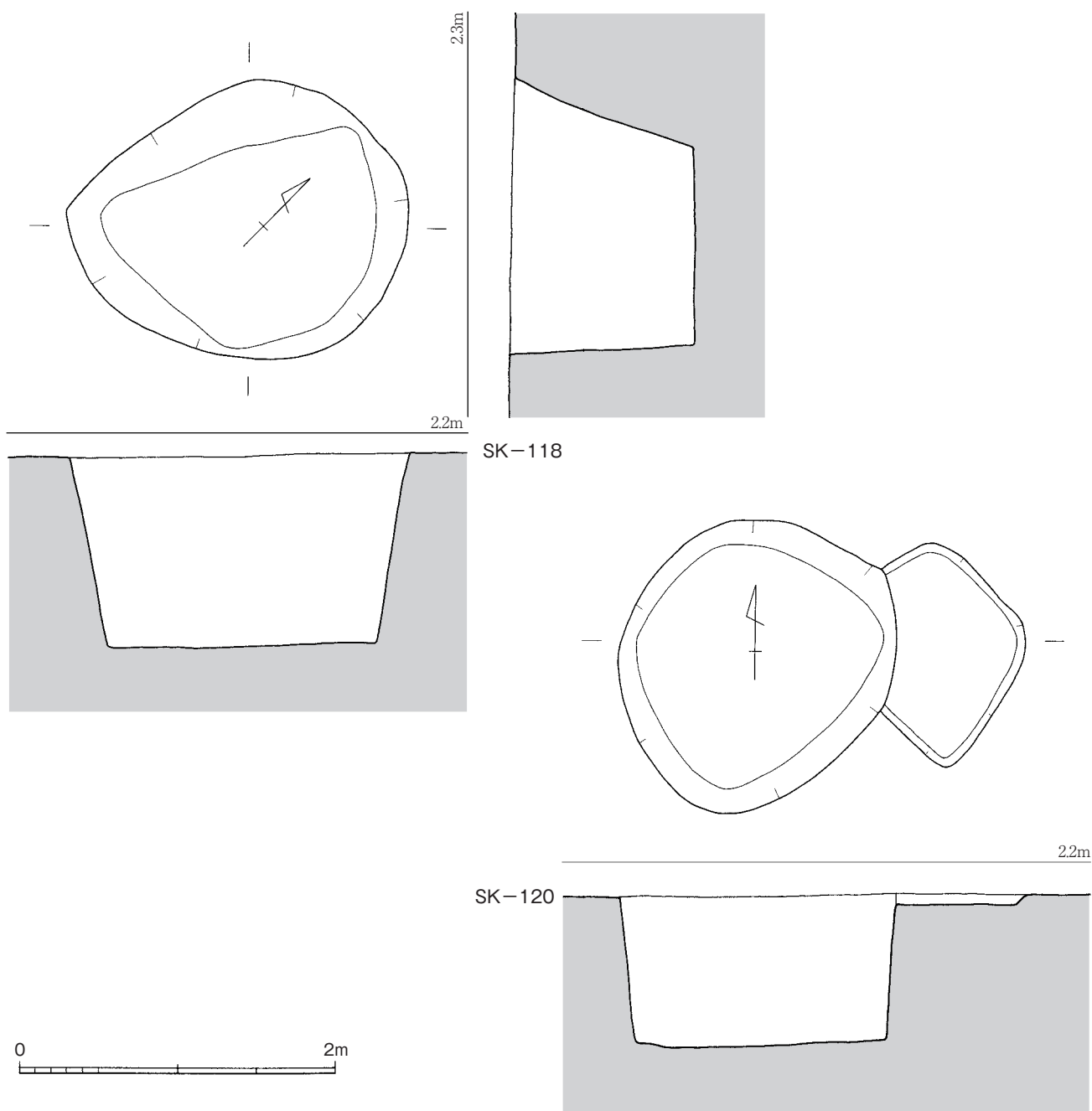
SK-107



第20図 SK-105・107・112実測図 (1/40)



第21図 SK-115・116・117実測図 (SK-115は1/60、他は1/40)



第22図 SK-118・120実測図 (1/40)

SK-118 (図版5、第21図)

溝の東に位置する不整円形の土坑で、長軸2.14m・短軸1.74m、深さは最深部で1.2mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは急な傾斜を呈する。

出土遺物 (図版10、第23図)

76・77は土師器である。76は小坏で、底部は糸切り痕を残す。77は皿で、内外面はナデにより調整し、底部は糸切り痕を残す。78は中国系白磁の皿で、見込みに一条の沈線を施す。79は唐津の皿である。見込みに草花文を描く。80は肥前系磁器の染付皿で、口縁部内外面に圈線を描く。81は肥前系磁器の徳利で、外面体部に墨書が残る。82は唐津の皮鯨手の筒型碗である。83は陶器の小壺である。

SK-120 (第21図)

調査区北西隅に位置し、2つの土坑が切り合った状態で検出した。土層観察の結果、西側が東側を切る状況であった。長軸2.54m短軸2.8m程度、深さは西側土坑最深部で0.94m、東側土坑最深部で0.08mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは西側、東側土坑ともに急である。

出土遺物 (第23図)

84は土師器の皿で、内外面はナデにより調整し、底部は糸切り痕が残る。85は中国系白磁の皿で、見込みに一条の沈線を施す。

SK-121 (第24図)

調査区北側SK-123の西に位置する不整形の大型土坑で、長軸5.1m・短軸2.44m、深さは最深部で0.3mを測る。底面は全体的に平坦だが、南寄りがわずかに深くなる。立ち上がりは比較的緩やかに傾斜する。

出土遺物 (図版10、第23図)

86土師器の皿で、内外面はミガキによる調整を施す。87から91は瓦器碗である。88の内外面はミガキにより調整し、高台部ナデ調整を施す。89の内外面はミガキにより調整する。90、91の内外面はミガキにより調整し、高台部ナデ調整を施す。92から96は中国系白磁の碗である。92から94の口縁は、玉縁を呈す。95は内面に櫛目で花文を描き、口縁部は嘴状を呈す。96は見込みに一条の圈線と、櫛目で花文を描く。

SK-122 (第24図)

調査区北東隅に位置する不整形の土坑で、長軸2.0m・短軸1.64m、深さは最深部で0.18mを測る。底面は全体的に平坦だが、北隅に不整形の小型ピットを伴う。立ち上がりは比較的緩やかに傾斜する。

出土遺物 (第25図)

97は土師質土器の鍋である。98は白磁の碗である。99は唐津で器種は不明、外面に草文を描く。

SK-123 (第24図)

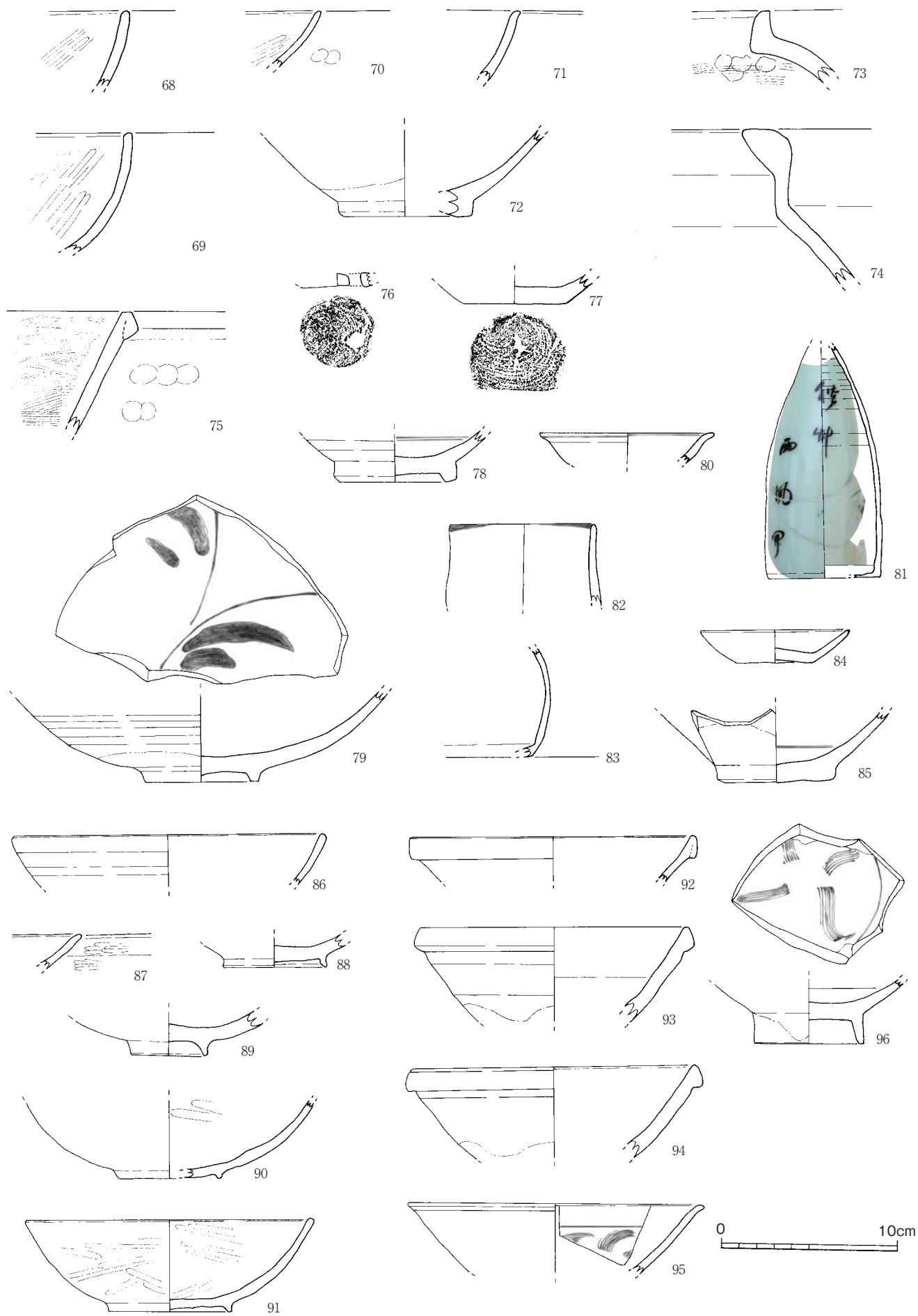
SK-122の南に位置する不整形の大型土坑で、長軸3.62m・短軸2.66m、深さは最深部で0.36mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは緩やかに傾斜する。

出土遺物 (図版10、第25図)

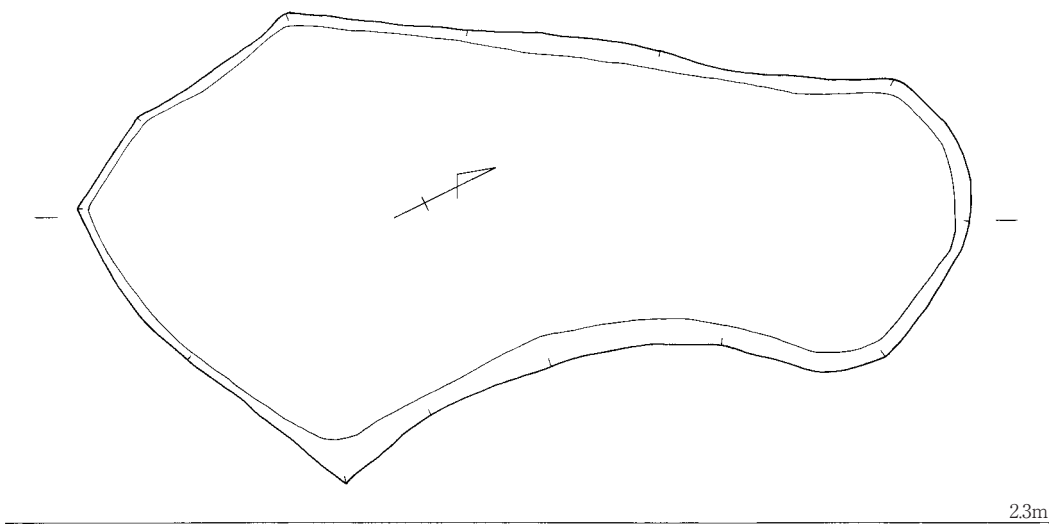
100は土師質土器の鍋である。101は瓦器碗である。102は中国系白磁の猪口である。

6 第2遺構面その他の遺構出土遺物及び遺構面出土遺物 (図版10・11、第26～28図)

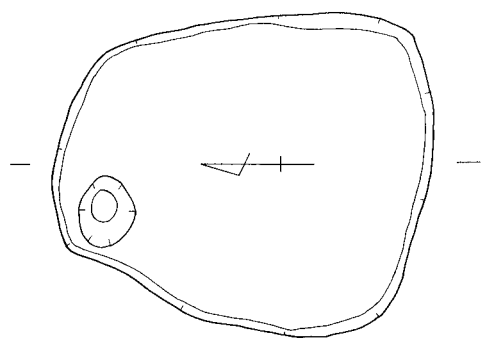
103、104はSK-103出土の瓦質土器である。103は播鉢で、内面はヨコハケの後八条の播目を施す。外面は指オサエを施す。104は火鉢で、内面はナデ、外面はミガキを施す。外面は上半に2条の突帯を作り、上端に印刻をめぐらす。105はSK-106出土の陶器の皿である。106はSK-111出土の中



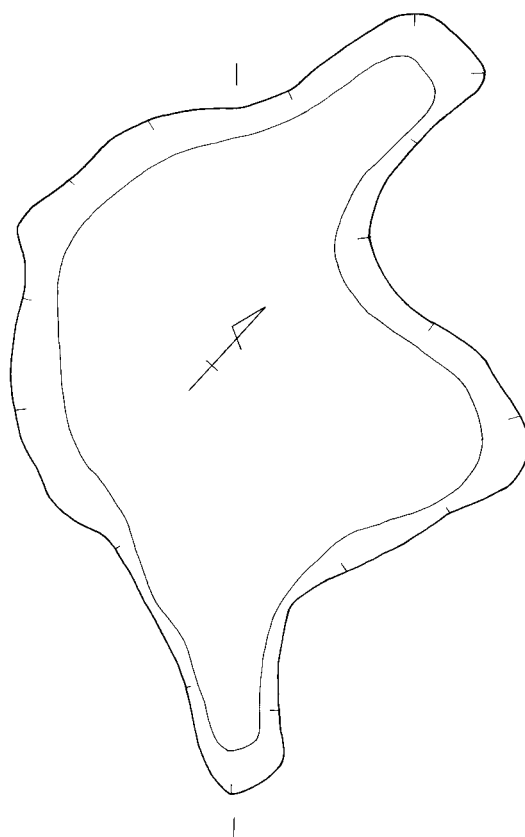
第23図 SK-105・107・112・115・118・120・121出土遺物実測図 (1/3)



SK-121



SK-122

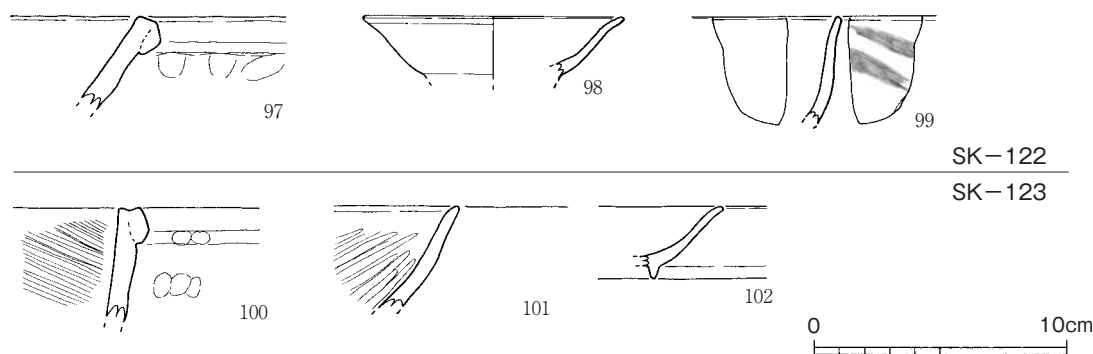


2.3m



SK-124

第24図 SK-121・122・123実測図 (1/40)



第25図 SK-122・123出土遺物実測図 (1/3)

国系白磁の碗で、口縁端部は嘴状を呈す。107はSK-114出土の土師質土器の鍋で、内面はヨコハケを施す。

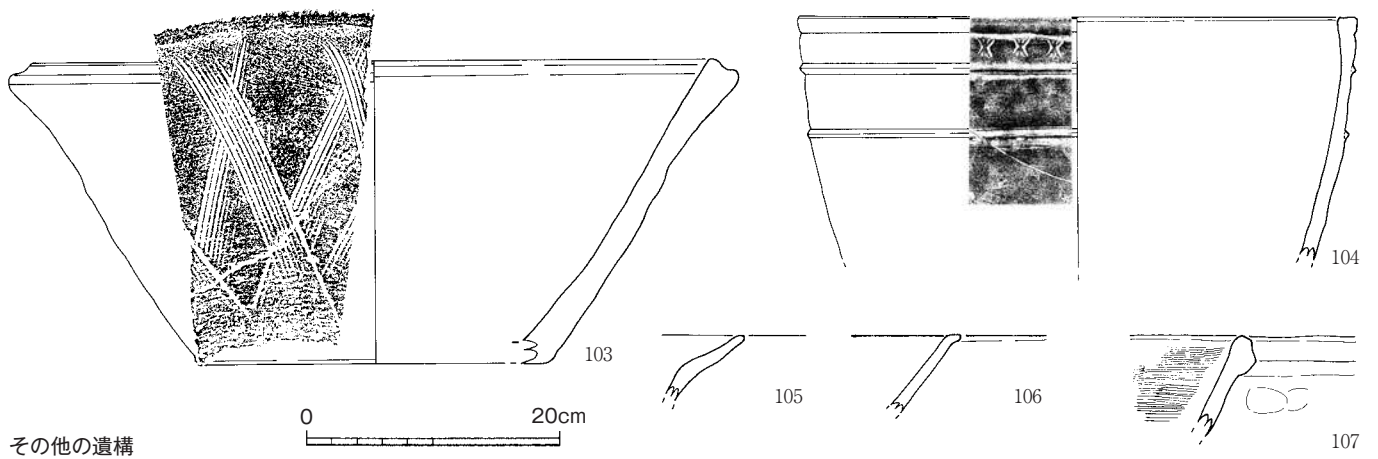
108から125は第2遺構面検出の溝から出土した遺物である。108から112は土師器で、108は皿である。内外面はナデにより調整し、底部は糸切り痕を残す。109は坏で、外面底部は糸切り後、板状圧痕が残る。内外面はナデにより調整し、内面のナデは渦巻状である。110から112は皿である。110の内外面はナデにより調整し内面のナデは渦巻状である。底部は糸切り痕が残る。111の内外面はナデにより調整し、内面のナデは渦巻状である。底部は糸切り後の板状圧痕が残る。112の内外面はナデにより調整し、底部は糸切り後の板状圧痕が残る。

113は瓦質土器の皿で、内外面はナデにより調整し、底部は丁寧なナデ調整を施す。114は土師器の皿で、内外面及び、底部はナデにより調整する。115は瓦器碗で、内外面にミガキを施す。116は土師質土器の鍋で、在地系である。117、118は中国系白磁の碗で、口縁は玉縁を呈す。119、120は瓦質土器である。119は湯釜で内面はヨコハケ、外面はミガキを施す。全体的に煤が付着する。120は火鉢で、底部に脚を作る。内面はヨコハケ、外面は指オサエとミガキ、底部はハケ目を施す。

121、122は中国系磁器青花の皿である。121は口縁部内外面と高台に圈線、見込みに人物、流水文を描く。122は景德鎮の可能性のある遺物である。内外面口縁部及び見込み、高台に2条の圈線を引く。見込みには文人、草虫文を描く。高台内銘に「大明年製」を記す。123は肥前系磁器染付の小坏で、外面に二重圈線を引く。高台は碁笥底を呈す。124は中国系白磁の碗である。125は瓦質土器に播鉢で、内面はヨコハケ、外面はタテハケ後指オサエにより調整する。播目の単位は不明である。

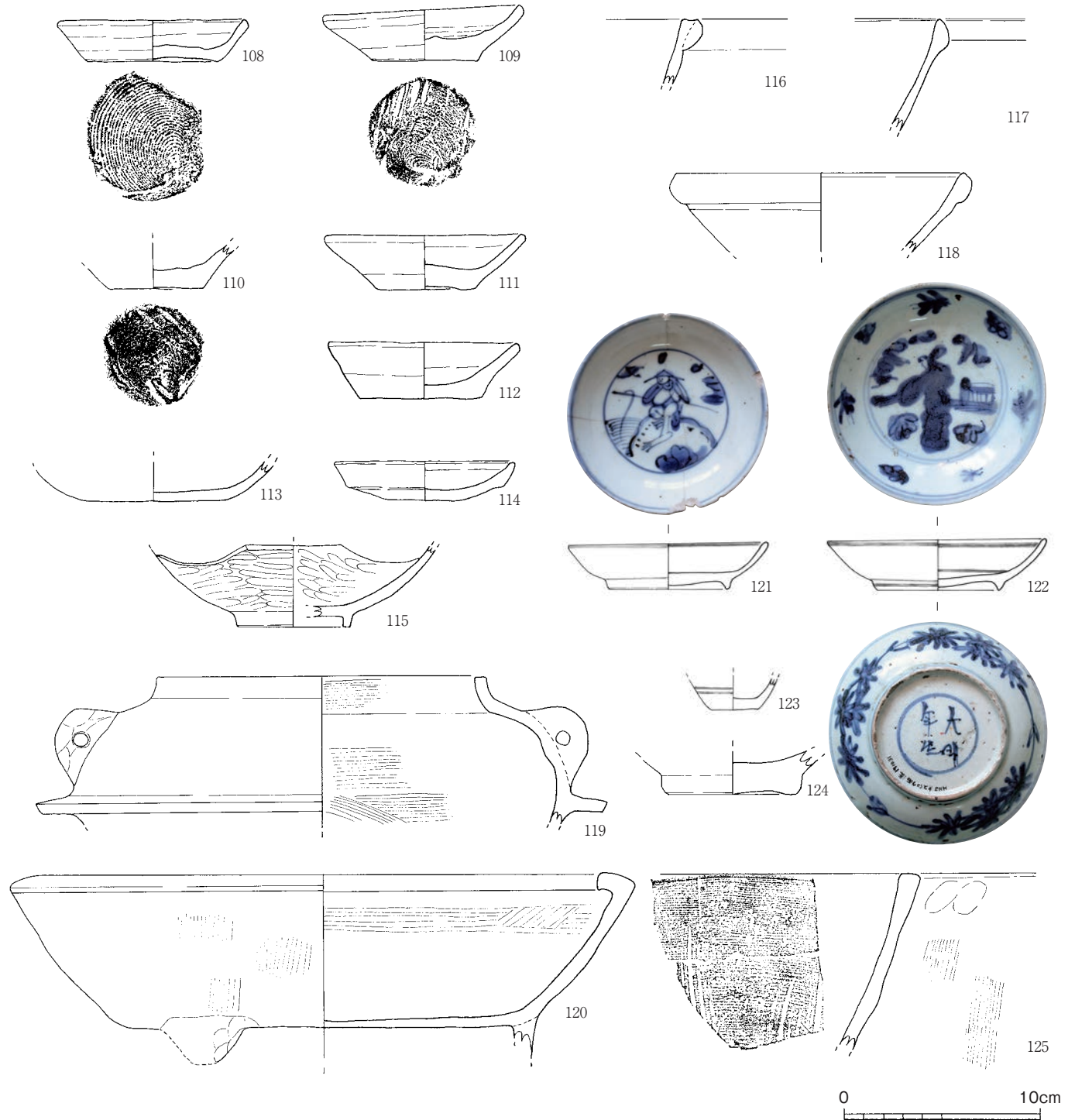
126から165は第2遺構面出土の遺物である。126から142は磁器である。126は中国系青磁龍泉窯の碗で、内面と見込みに片彫蓮花文を描く。127は中国系白磁の碗で、口縁は玉縁を呈す。128は陶器で、唐津の碗である。高台内は露胎で、三日月高台を呈す。

129と130は中国系白磁の碗である。129の口縁は玉縁を呈す。130は、見込みに一条の沈線を施す。131、132は中国系青磁、龍泉窯の碗である。131は内面と見込みに片彫り花文を描く。133、134は中国系青磁、同安窯の可能性のある皿である。133は見込みにヘラ描きと、櫛点描文を施す。134は見込みにヘラ描きと、櫛点描文を施す。底部に「五」の墨書を記す。135から138は、青花である。135は皿で、景德鎮の可能性のある。口縁部内外面と見込みに圈線を引く。136、137は景德鎮の碗

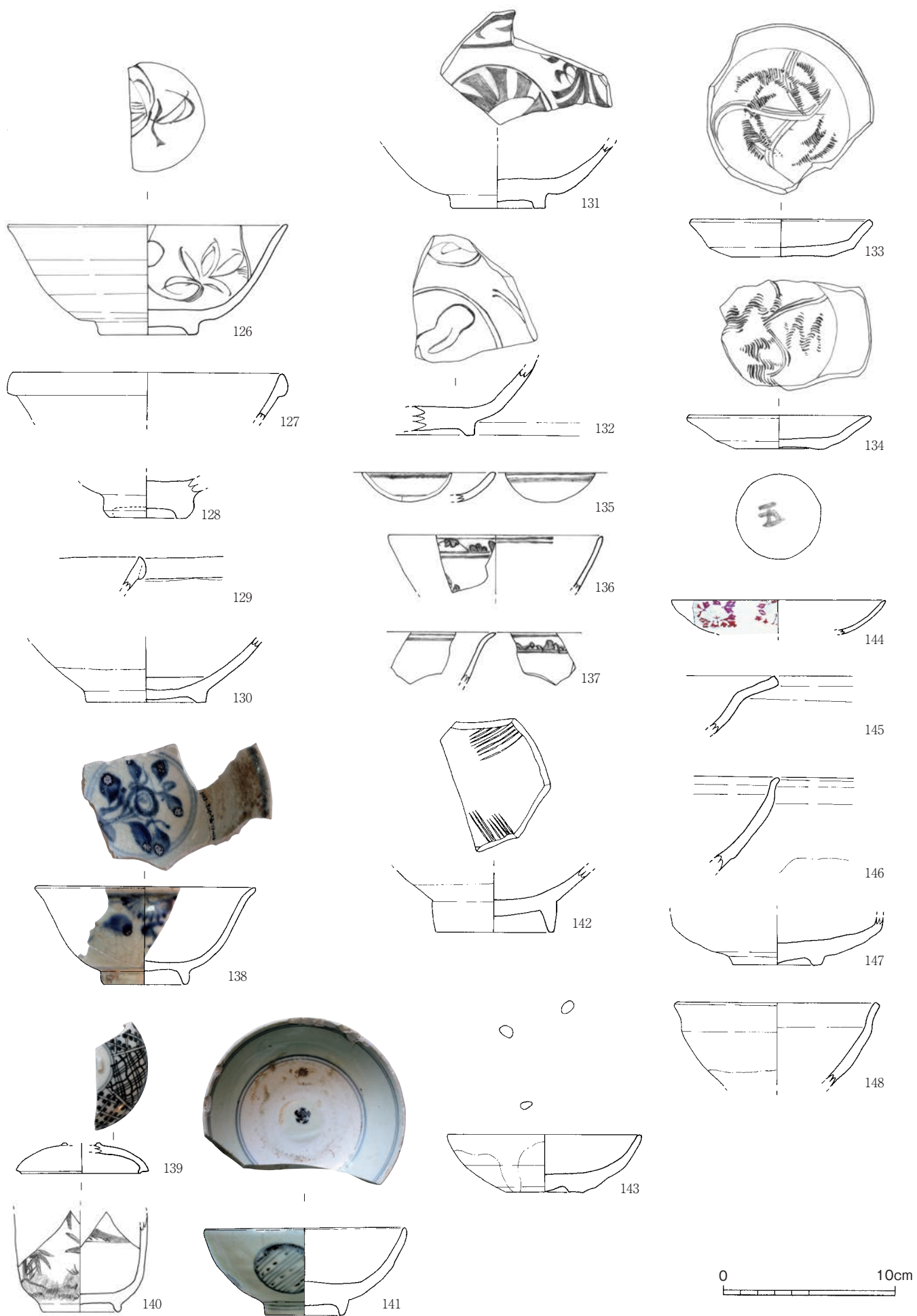


その他の遺構

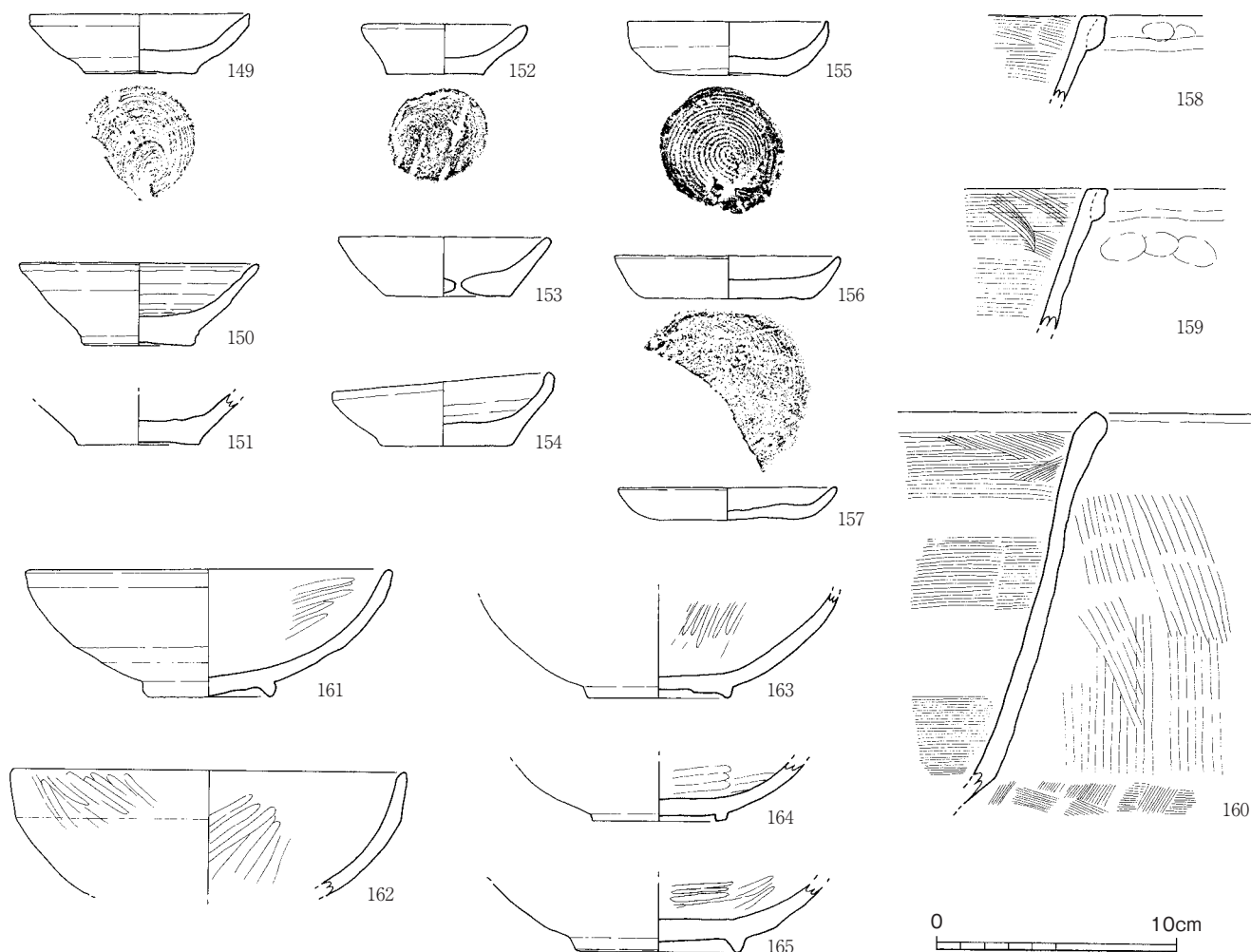
第2遺構面溝



第26図 第2遺構面溝・その他の遺構出土遺物実測図（104は1/6、他は1/3）



第27図 第2遺構面出土遺物実測図① (1/3)



第28図 第2遺構面出土遺物実測図② (1/3)

である。口縁部内面に2条、口縁外面に1条の圈線を引く。口縁部外面に草文を描く。138は漳州窯の碗で、口縁部内外面及び見込みに圈線を引く。外面及び見込みに草花文を描く。

139から141は肥前系磁器の染付である。139は蓋で、外面に区画して四方樺文を描く。140は小碗で、外面に竹文を描く。141は碗で、見込みに五弁花文を描き、外面は丸文を描く。内外面・見込み・高台外面に圈線を引く。142は中国系白磁の碗で、見込みに櫛目で花文を描く。143は唐津系陶器の皿である。見込み3カ所に胎土目痕が残り、底部は碁笥底を呈す。144は肥前系磁器の色絵皿で、内面に葉文を描く。145は肥前系陶器、武雄の皿である。内面は白化粧土を薄く塗布し、外面は白化粧土の上からハケ目を施す。146は瀬戸美濃系陶器の天目碗で、胴部下半は露胎、胎土は粉っぽい。147は唐津系陶器の皿である。148は瀬戸美濃系陶器の天目碗で、胴部下半は露胎、胎土は粉っぽい。

149から157は土師器である。149は皿で内外面はナデにより調整し、底部は糸切り痕を残す。150は坏で、内外面はナデにより調整し、内面のナデは渦巻状。底部は糸切り後に、板状圧痕が残る。151は皿で、内外面はナデにより調整し、内面のナデは渦巻状。底部は糸切り痕が残る。152は小皿で、内面はナデにより調整し、底部は糸切り痕が残る。153は皿で、内外面及び底部はナデにより調整する。154は皿で、内外面はナデにより調整し、内面のナデは渦巻状。底部は糸切り痕が残る。155、156は皿で、内外面はナデにより調整する。底部は糸切り痕が残る。157は皿で、内外面はナデにより調整する。底部は糸切り後の、板状圧痕が残る。

158、159は土師質土器の鍋で、内面はヨコハケにより調整する。



第29図 本城町第3遺構面遺構配置図 (1/200)

160は瓦質土器の鍋である。内面はヨコハケ、外面上部は指オサエ、外面下部はタテハケを施す。内外面に煤が付着する。161から165は瓦器埴である。161から163、165の内外面はミガキを施す。

7 第3遺構面検出土坑

SK-200 (図版7、第30図)

調査区北西部に位置する不整形の土坑で、長軸2.0m・短軸1.36m、深さは最深部で0.44mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは比較的緩やかに傾斜する。

SK-202 (図版7、第30図)

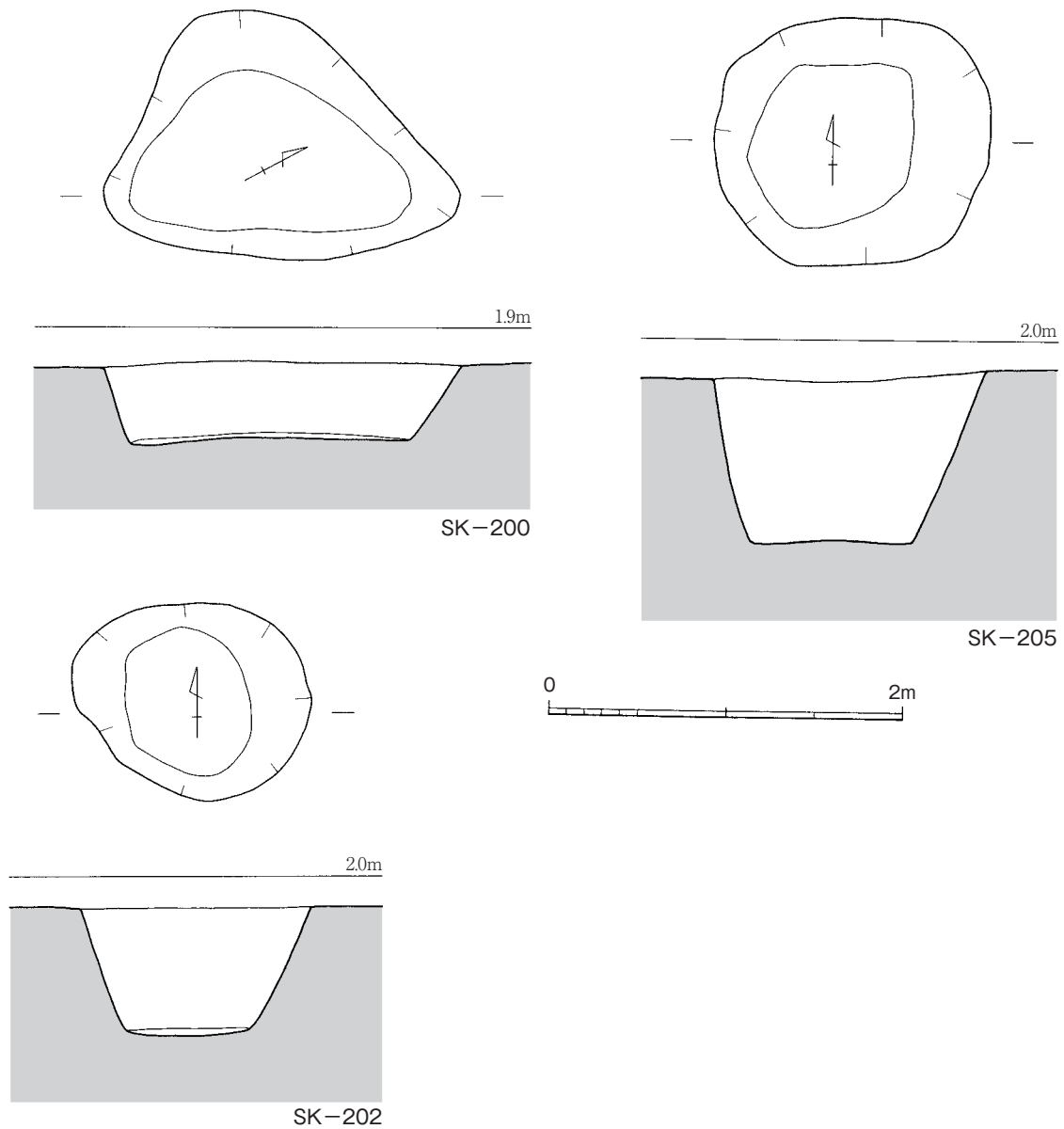
調査区南寄りに位置する不整円形の土坑で、長軸1.3m・短軸1.1m、深さは最深部で7.2mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは比較的緩やかに傾斜する。

SK-205 (第30図)

調査区南東隅寄りに位置する不整円形の土坑で、長軸1.56m・短軸1.38m、深さは最深部で0.94mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは比較的緩やかに傾斜する。

出土遺物 (図版11、第31図)

166、167は瓦質土器である。166は播鉢で、内外面ナデと指オサエを施す。播目の単位は6条である。167は鍋で、内面はタテハケ、外面は指オサエとタテハケを施す。内外面に煤が付着する。



第30図 SK-200・202・205実測図 (1/40)

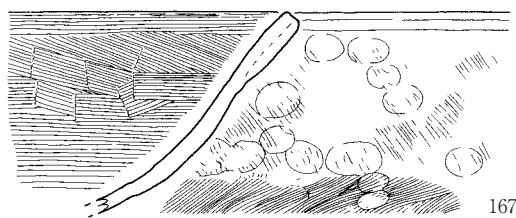
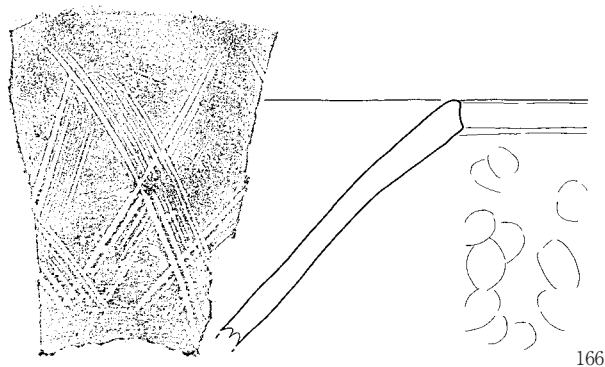
8 第3遺構面その他の遺構出土遺物及び遺構面出土遺物、表採遺物 (図版11・12、第31・32図)

168はSK-201出土の中国系磁器龍泉窯の碗である。169は瀬戸美濃産系の陶器の皿で、見込みは円形に釉剥ぎする。

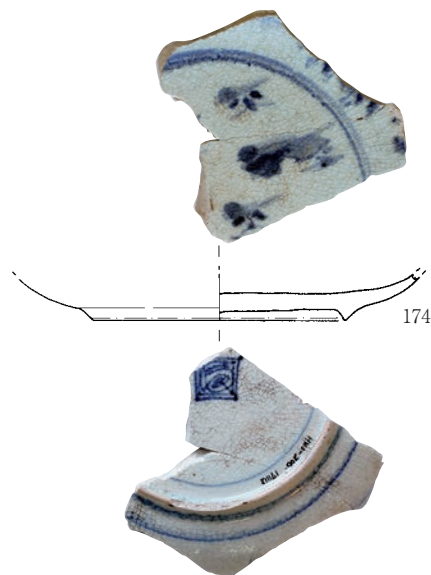
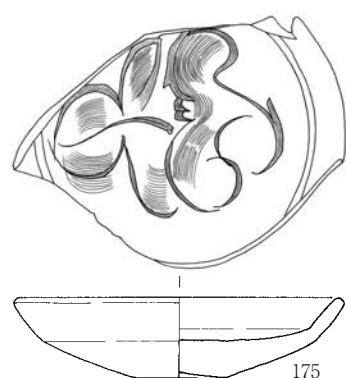
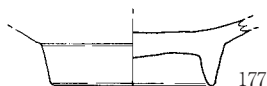
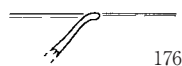
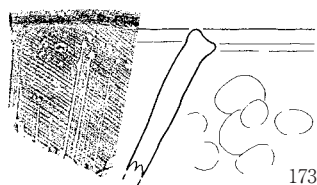
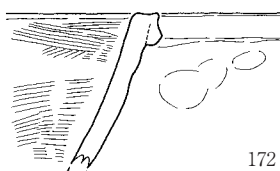
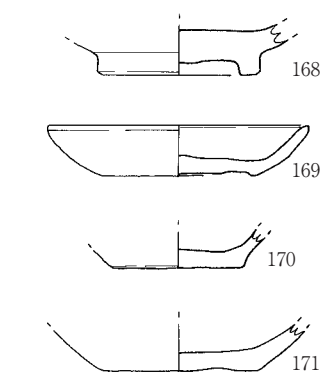
170から177はSK-206出土の遺物である。170と171は土師器で、170は小皿で、内外面はナデにより成形する。底部は糸切り後の、板状圧痕が残る。171は坏で、内外面はナデにより調整する。底部は糸切り痕が残る。172は土師質土器の鍋である。173は瓦質土器の播鉢で、内面はヨコハケを施す。播目の単位は8条である。

174は肥前系磁器、染付の皿で見込み、外面下部、高台内に圈線を引く。見込みに山水文、・高台内に渦福を描く。175は中国系青磁龍泉窯の皿で、片彫で花文を描く。176と177は白磁である。176は皿である。177は中国系白磁の碗である。

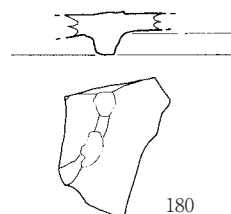
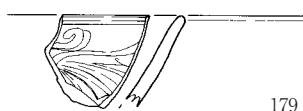
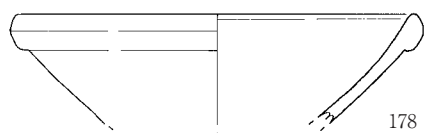
178から180は第3遺構面出土の遺物である。178は中国系白磁の皿である。179は中国系青磁龍泉窯の碗で、内面にヘラ描き文を描く。180は朝鮮系白磁の皿で、見込みと畳付けに胎土目痕が残る。



SK-202



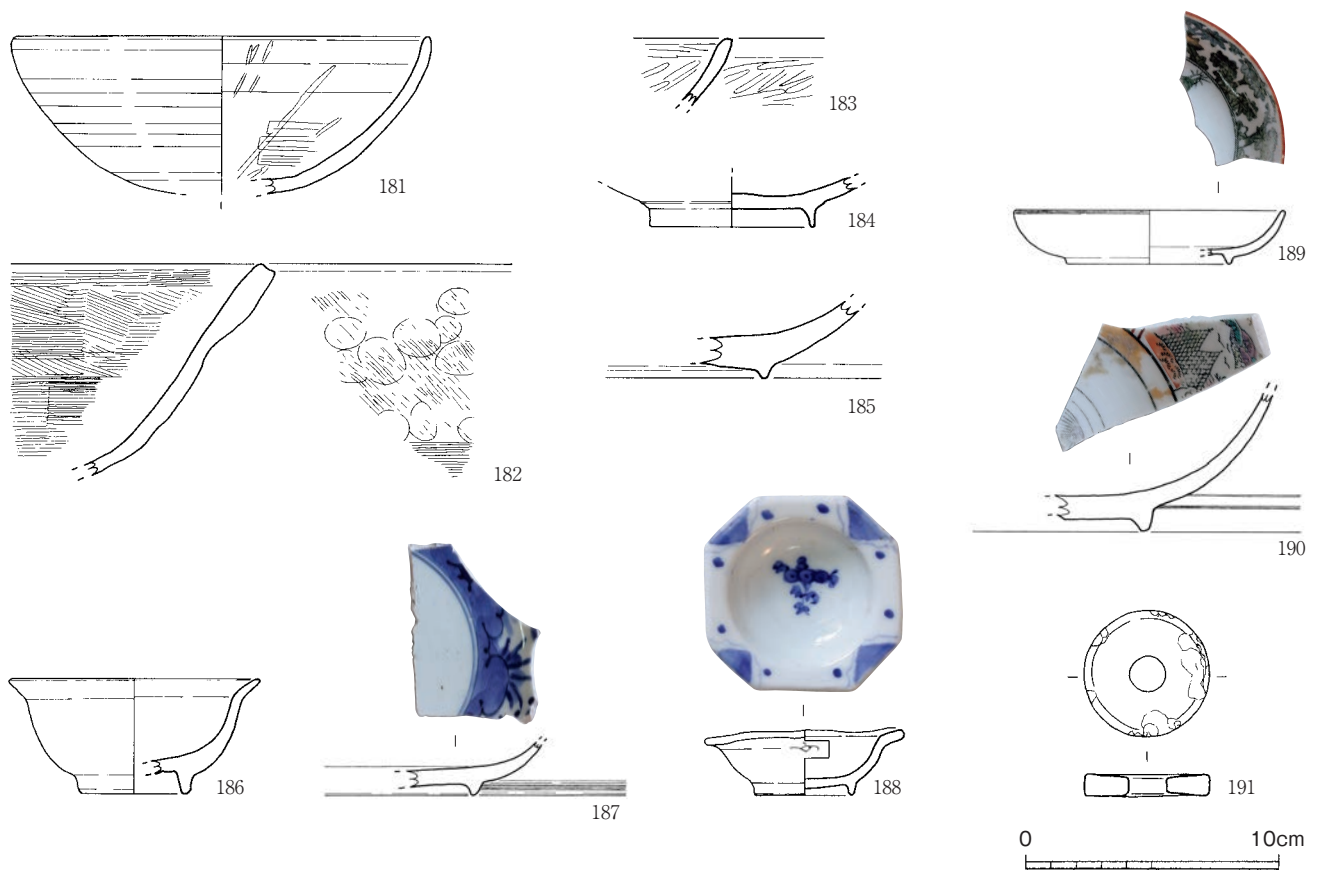
その他の遺構



第3遺構面

第31図 SK-202・その他の遺構・第3遺構面出土遺物 (1/3)

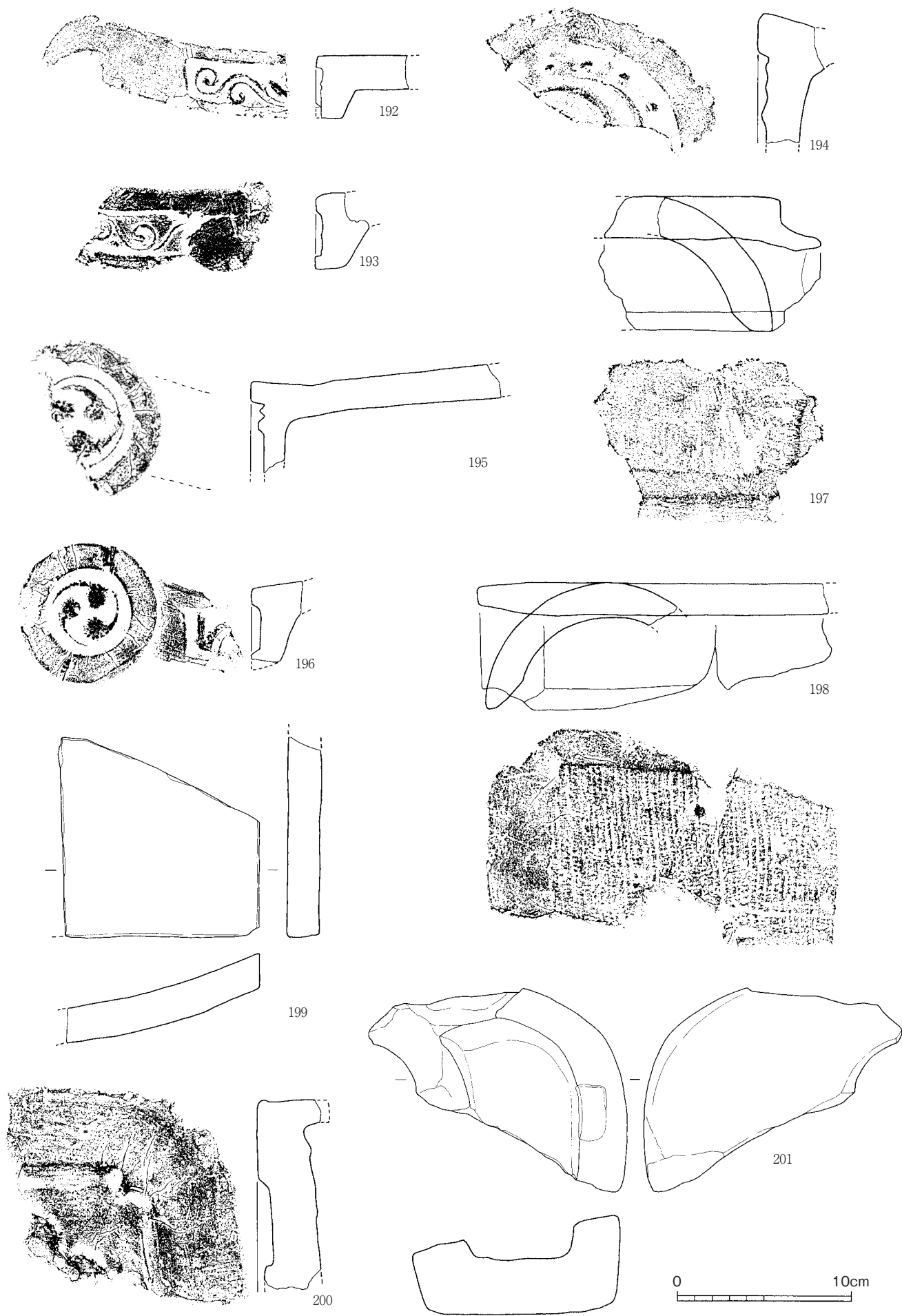
181から191は、表採遺物である。181は土師器の坏で、外面ナデ、内面はナデ後ミガキを施す。182は瓦質土器の鍋で、内面ヨコハケ、外面タテハケと指オサエを施す。183と184は瓦器碗で、内面はミガキを施す。185は中国系青磁、龍泉窯の皿である。高台内は蛇の目釉剥ぎし、鉄漿を施す。186から189は肥前系磁器である。186は碗で、内面口縁部に金で圈線を引く。187は染付皿で、内面と高台、高台内に圈線を引く。内面に草花文を描く。188は染付の小鉢で、見込みに草花文を描く。189は皿で、内面に紅葉文を描く。口縁部に鉄漿を施す。190は色絵鉢で、内面に橙、朱、青色を用いて松・鳥・網文を描く。外面高台付近に圈線を引く。191は磁器の戸車である。



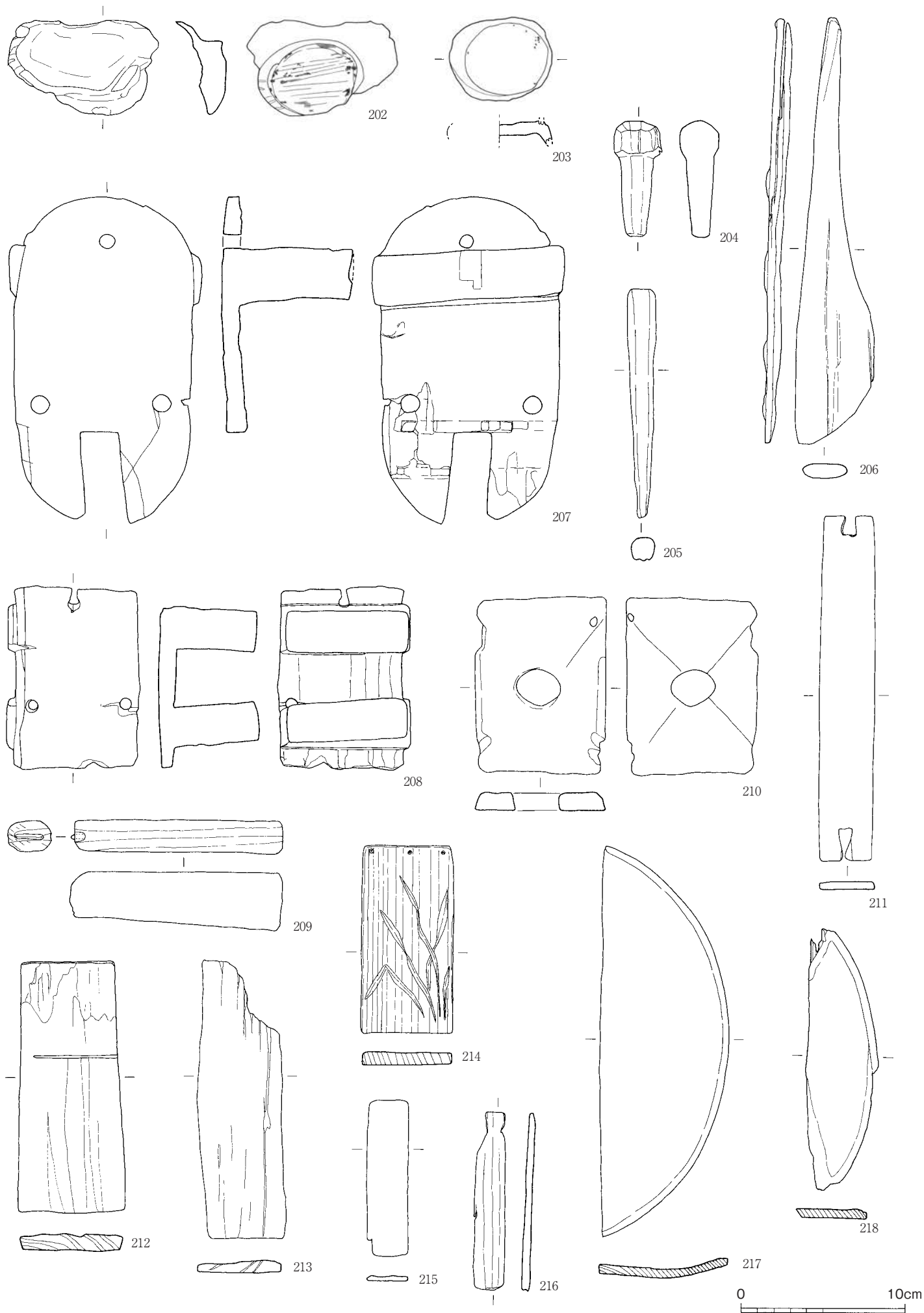
第32図 表採遺物実測図 (1/3)

9 瓦 (図版12、第33図)

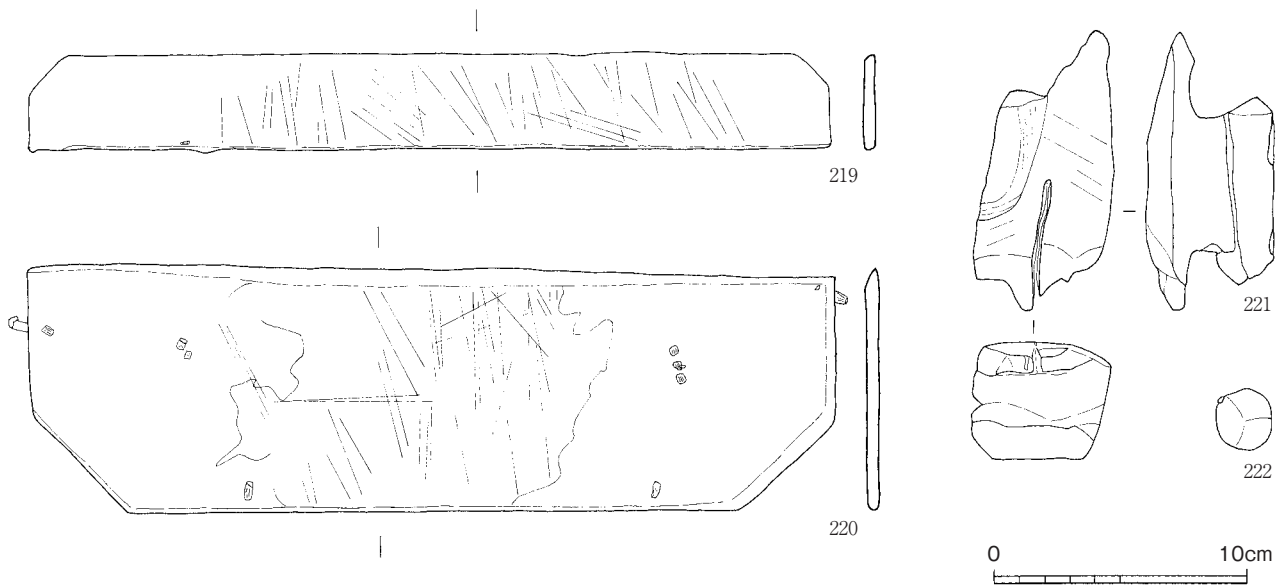
192は第3遺構面SK-206出土の右鎌軒棧瓦である。調整は凹凸面ともにナデである。瓦当部は主文三葉文と唐草文か。193は第2遺構面SK-106出土の軒平瓦である。調整は凹凸面ともにナデである。唐草文が確認できる。194は第1遺構面SK-45出土の軒丸瓦である。左巻きの三巴文である。調整は全体的にナデである。195は第2遺構面溝出土の右軒棧瓦である。調整は凹凸面ともにナデである。瓦当部は主文不明の唐草文である。196は第2遺構面出土の右軒棧瓦である。調整は凹凸面ともにナデである。197及び198は第1遺構面SK-76出土の丸瓦である。共に凹面は布目、凸面はナデ、側端部はケズリで、凹面には鉄線の痕跡が残る。199は第1遺構面SK-76出土の平瓦である。200及び201は鬼瓦である。200は第2遺構面SK-116出土である。調整は凹凸面ともにナデである。文様は不明。201は第2遺構面SK-112出土である。調整は凹凸面ともにナデである。文様は不明。全体に被熱跡が残る。



第33图 瓦実測図 (1/3)



第34図 木製品実測図① (1/3)

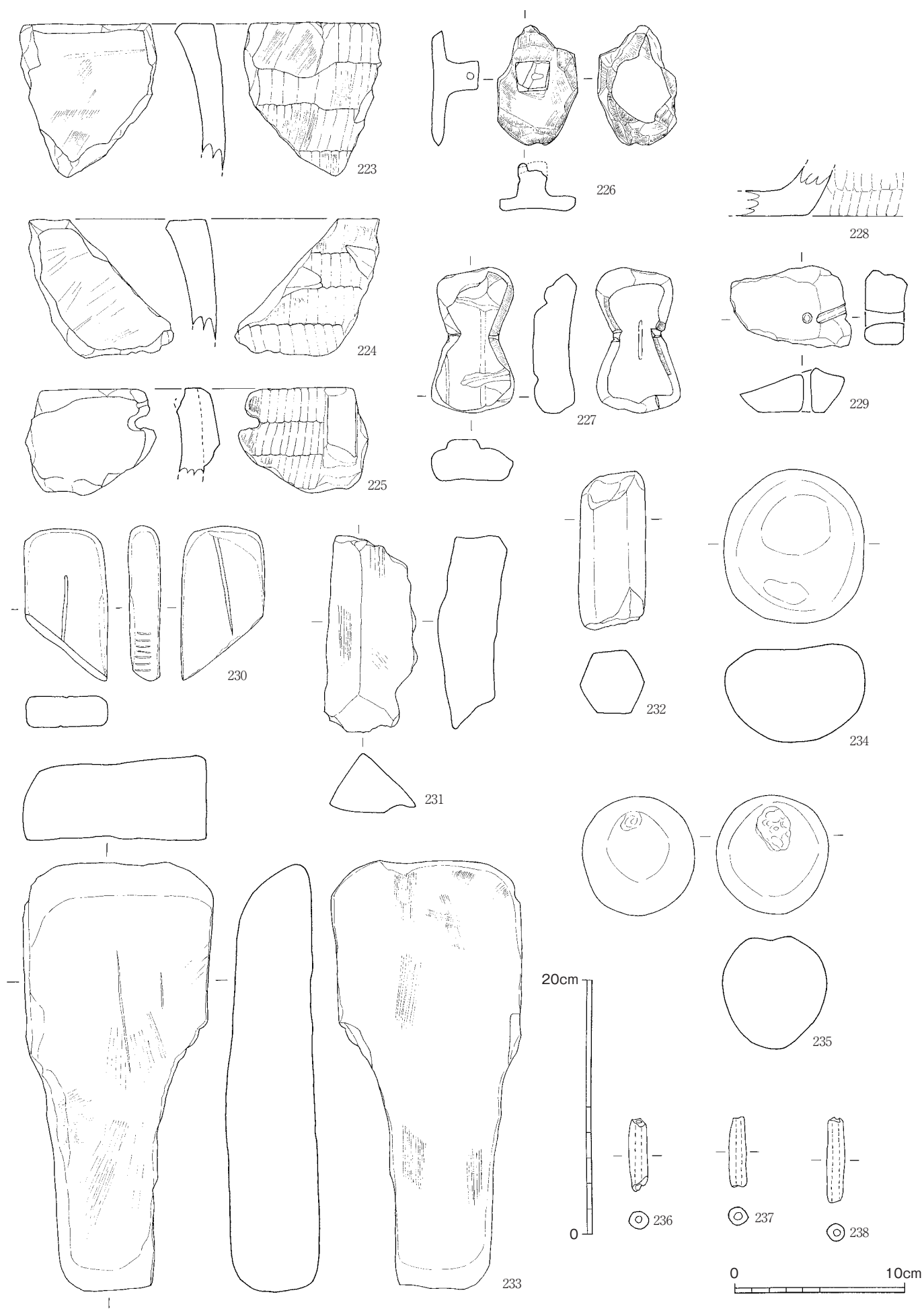


第35図 木製品②・金属製品実測図 (1/3)

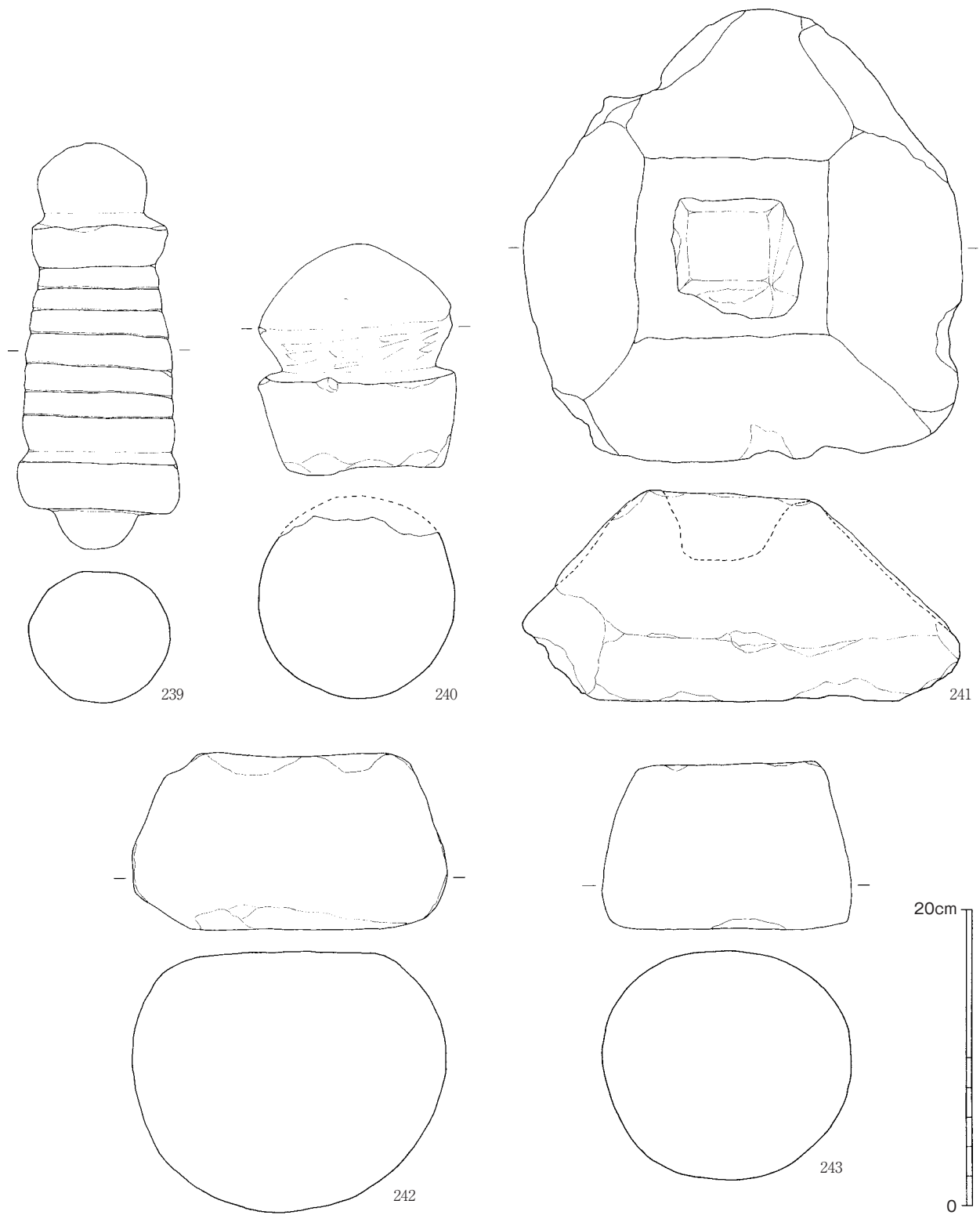
10 木製品・金属製品 (図版13、第34・35図)

202と203は第2遺構面出土である。いずれも遺存状態は悪いが、漆碗の蓋か。202、203はつまみ部しか残らず、漆はわずかに付着する。204、205は栓か。204は第1遺構面SK-76出土である。全体的には茸状を呈し、面取りが施され、六角柱に近い。205は第2遺構面SK-107出土である。四角錘状に近い。206は第1遺構面SK-76出土のヘラである。復元するとしゃもじ状か。207と208は第2遺構面溝出土の下駄である。207は連歯下駄で、後歯は根元から折れている。208は削り下駄で、サイズから子供用と考えられる。209は第2遺構面出土の包丁である。刃部は欠失しており、柄の部分のみ残存するが、柄の内部に金属部が残る。210は第2遺構面SK-115出土である。薄い板状で中央に大きく穿孔し、孔から四隅にかけて紐擦れ痕が確認できる。隅部には1か所釘孔がある。木札のような物か。211は第2遺構面出土の板材か。細長く、両端に削り込みがある。212と213は第3遺構面SK-205出土の板材か。共に薄い長方形状である。214は表採の短冊状の木板である。短辺の片方に3つ小さな穿孔がある。片面に刃物で細い削りを入れるが、装飾目的か。用途不明である。215は第2遺構面SK-115出土の短冊状の木板である。用途不明である。216は第2遺構面出土の木簡である。墨書等は確認できない。217と218は第2遺構面出土の底板か。共に両面に漆を施す。219と220は第2遺構面SK-202出土である。219は全面に刃傷が無数に残る。220は中央に漆がかかり、無数に刃傷が残る。まな板として転用した物か。219と220は同一個体の可能性もある。221は第2遺構面出土である。上下は連結用の削り込みのような形状をしているが、遺存状態が悪く用途不明である。

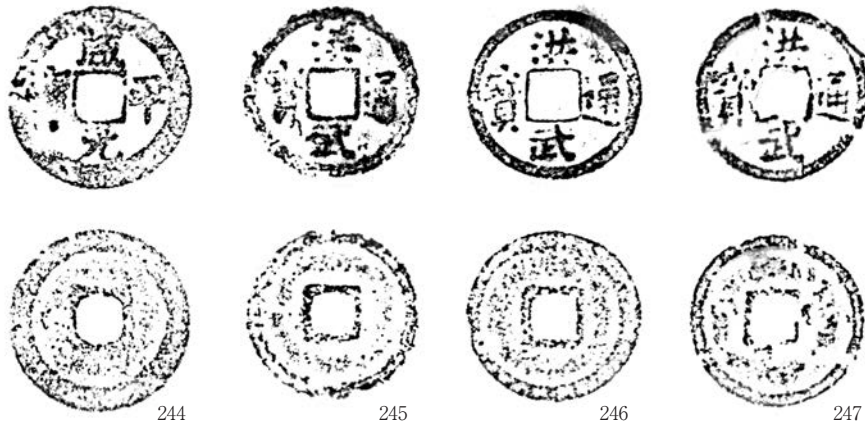
222は第1遺構面出土の鉛玉である。直径1.5cmの球形で重さは22gである。火縄銃の銃弾の可能性はある。



第36図 石製品・土製品実測図 (233は1/4、他は1/3)



第37図 石塔類実測図 (1/4)



第38図 出土銭拓本 (1/1)

11 石製品・土製品 (図版13・14、第36図)

223から229は滑石製品である。223は第2遺構面SK-105出土の石鍋口縁部片である。縦耳型か。外面には明瞭なノミ痕が確認でき、全体的にススが付着する。224は第1遺構面SK-60出土の石鍋口縁部片である。縦耳型か。外面には明瞭なノミ痕が確認でき、ススが付着する。225は第2遺構面SK-121出土の縦耳型の石鍋口縁部片である。外面には明瞭なノミ痕が確認でき、全体的にススが付着する。穿孔が確認できることから、転用したとみられる。226は第2遺構面出土で、縦耳型石鍋を再加工して製作されたいわゆるバレン状石製品である。中央部に穿孔を施した方形の突起を持ち、その突起と周縁部にススの付着が見られる。実際に石鍋の補修に使用されたものと考えられる。227は表採の石鍋転用品である。縦耳型石鍋を転用したとみられ、全体的に研磨される。中央部がくびれ、くびれ部には切込みがある。石錘として使用されたと考えられる。228は第2遺構面出土の石鍋底部片である。外面には明瞭なノミ痕が確認でき、ススが付着する。229は第2遺構面出土の石鍋底部片か。内外面にススが付着し、2つの穿孔が確認でき、転用したと考えられるが用途は不明である。

230から232は砥石である。230は第2遺構面SK-115出土である。扁平で、断面は整った隅丸長方形形状となる。斜めに割れるが、割れ面も含めて全面が丁寧に研磨される。裏表両面の中央には細く浅い1条の彫り込みがみられる。砥石として使用か。231は第2遺構面出土の砂岩製砥石である。現状は三角柱状だが、1面は割れ面で、残り2面が砥ぎ面として使用され、明瞭な擦痕が残る。232は第1遺構面SK-13出土の砂岩製砥石である。整った六角柱状で6面全てが砥ぎ面である。233は第2遺構面SK-115出土の大型の石製品である。全体的には楔形に近い扁平な形状である。上下面及び両側面は平滑だが、両側面共に大きく欠けが見られる。上下の広い面には明瞭な擦痕が多く残り、砥石として使用した可能性もある。234、235は原礫を用いた石器類の可能性はある。234は第2遺構面SK-206出土である。全体的に丸みを帯びた形状で、比較的平坦な面に2カ所わずかなくぼみが確認できる。凹石として使用したものか、原礫本来の形状か判断が難しい。235は第2遺構面SK-115出土である。球形に近い石で、2カ所に打ち欠けたような痕跡が確認できる。叩石として使用したものか。

236から238は管状土錘である。236は表採である。胎土は明橙色を呈する。手捏ね成形で、両端を欠損する。237は表採である。胎土は赤橙色を呈する。手捏ね成形で、ほぼ完形である。238は第1遺構面SK-46出土である。胎土は橙灰色を呈する。手捏ね成形で、ほぼ完形である。

12 石塔類（図版14、第37図）

239は第2遺構面SK-116出土の宝篋印塔相輪で、ほぼ完存する。線刻は摩耗のため全体的に不明瞭だが、宝珠下の請花部には線刻花卉表現があったと見られる。最大高27.4cm、最大幅10.8cmを測り、断面は円形である。中央の九輪部は7本を線刻によって造りだす。石材は安山岩。240は第2遺構面出土の五輪塔空風輪で、柄を欠損する。空輪部は中心やや下寄りに明確な稜を持ち稜から下の部分にノミ跡を残す。風輪部側面は比較的直線的である。石材は安山岩。241は第1遺構面SK-1出土の五輪塔火輪で、風化・欠損が見られる。最大高14.2cm、最大幅29.6cmを測る。軒はあまり反らず、軒幅も狭い。底面は平坦である。上面の柄穴は平面方形で、1辺約7cmである。石材は凝灰岩。242は第2遺構面溝出土の五輪塔水輪で、ほぼ完存するが、表面は摩耗・風化が進む。最大高12.0cm、最大幅21.4cmを測る。最大径は下寄りで壺形を呈する。石材は凝灰岩。243は第2遺構面溝出土の五輪塔水輪で、ほぼ完存する。最大高11.4cm、最大幅16.9cmを測る。最大径は下寄りで壺形を呈する。下端部の一部に縦方向にノミ痕とみられる痕跡が確認できる。石材は安山岩。

13 銭（第38図）

244から247は銅銭で、全部で4枚出土した。洪武通宝が3枚、咸平元宝が1枚で、全て第1遺構面出土である。244は咸平元宝で、初鑄は北宋998年である。245から247は洪武通宝で、初鑄は明1368年である。全て無背である。

Ⅳ 本城町遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本城町遺跡（福岡県柳川市本城町に所在）は、筑後川等によって形成された沖積低地上に位置し、柳川城の一角にあたる。柳川城は、蒲池治久により築城された城郭とされる平城で、本丸、二の丸、三の丸が存在し、その外側に武家集住とされている。

今回、柳川高校学生寮建設工事に伴う発掘調査において獣骨・種子・植物等が出土したため、その種類を明らかにして動植物利用に関する情報を得ることとした。

I. 骨同定

1. 試料

試料はSK-121・SK-107・SK-201・SK-206・第2遺構面溝から出土した骨11試料（No. 1～11）である。既にクリーニングされた状態で乾燥状態にある。これらの試料の中には、複数点の破片が含まれるものがある。

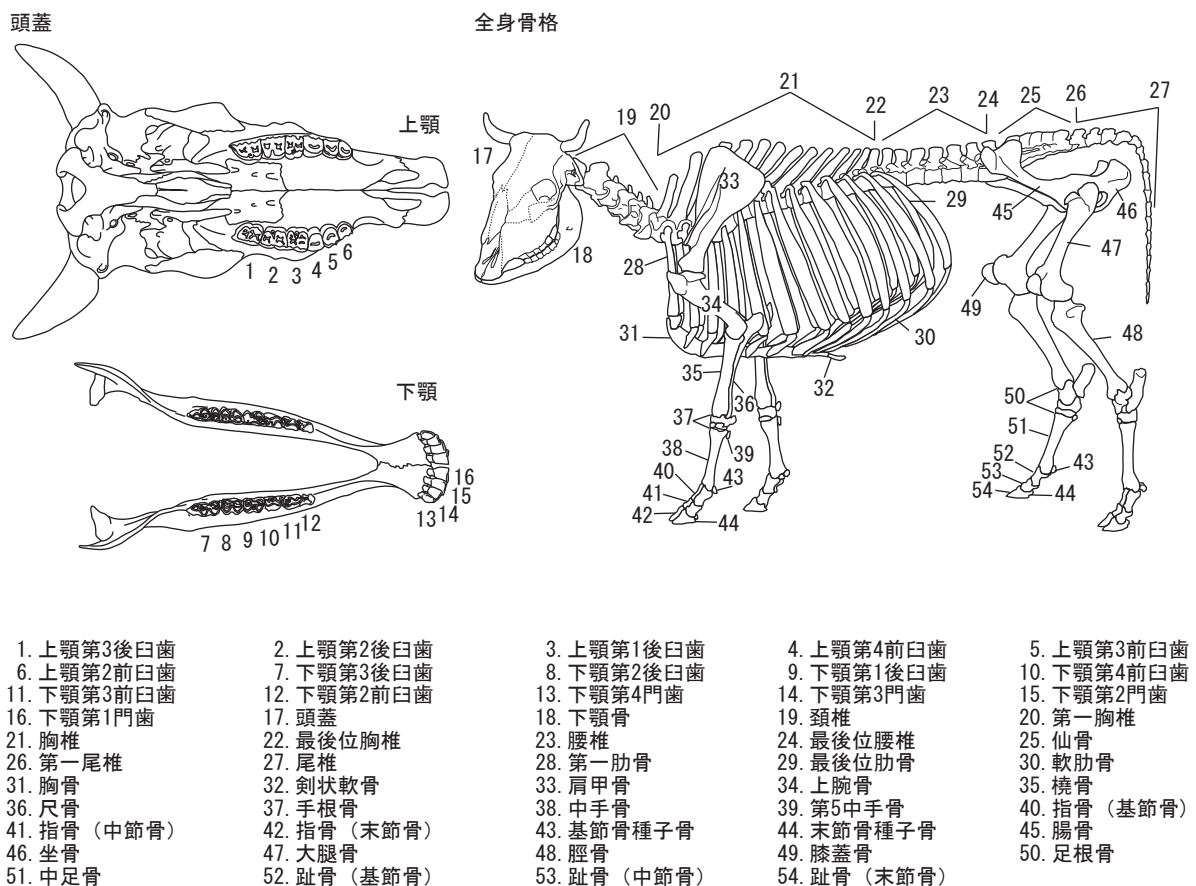
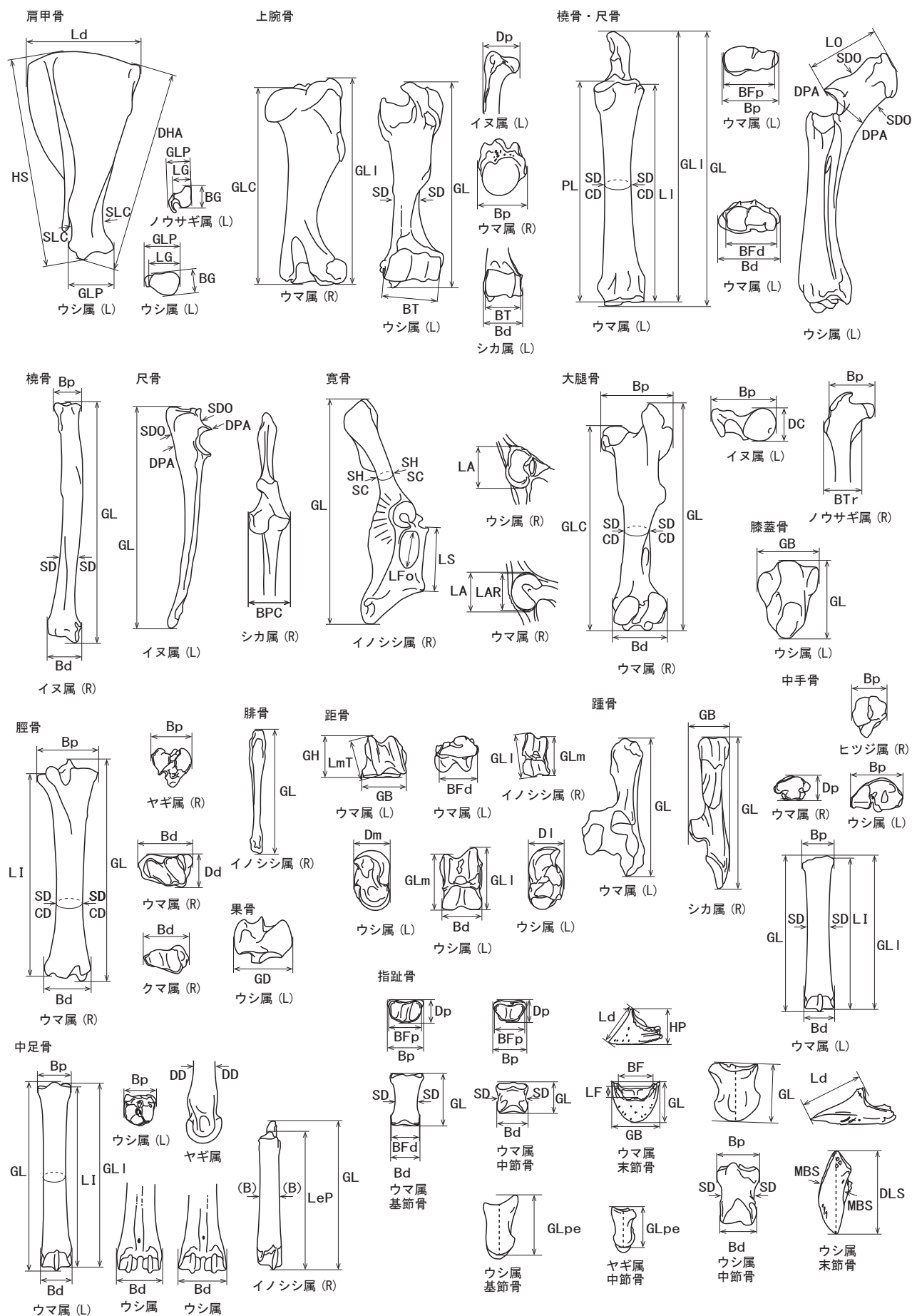


図1 ウシ骨格各部の名称

（原図は、全身骨格・脳頭蓋が加藤・山内，2003、下顎骨が久保・松井，1999に加筆）



2. 分析方法

一部の試料については接合を応じて一般工作用接着剤で接合・復元する。試料を肉眼で観察し、形態の特徴から種・部位を特定する。なお、骨格各部位の名称については、ウシを例として図1に示す。また、Drieach (1976) にしたがって (図2)、デジタルノギス等を用いて必要に応じて部位の計測を行う。

3. 結果および考察

検出された種類は、イヌ、ウマ、ウシの3種類である (表1)。同定結果を表2に、計測結果を表3に示す。以下、試料ごとに結果を記す。

・No. 1 (SK-121)

ウマの頭蓋骨・下顎骨・歯牙・左距骨、部位不明破片である。頭蓋骨は、岩様部付近の可能性はある。下顎骨は、左右第1～第3門歯と右下顎犬歯が植立する。歯牙では、左下顎第3・4前臼歯と左下顎第3後臼歯が各1点、右下顎第2～4前臼歯と右下顎第1～3後臼歯が各2点検出される。

右下顎歯牙がそれぞれ2点みられることから、頭蓋は少なくとも2個体分が存在する。内、1個体は、下顎骨とそれに伴う歯牙 (左第3・4前臼歯、下顎第3後臼歯、右第2前臼歯～第3後臼歯) が確認できる。下顎骨に犬歯が植立することから雄個体のウマであったことが判断できる。また、西中川ほか (1991) を参考に歯牙の臼歯高からみると10歳前後であったと考えられる。

残り1個体 (右歯牙のみ残存) のウマは、右下顎歯牙のみであり、部分的な検出しかない。臼歯高から推定される年齢は13～15歳程度となり、高齢馬であったと考えられる。

下顎骨の他、左距骨もみられ、頭蓋以外の部位もみられた。しかし、ウマ2体が埋葬されていたとするには破片数が少ない。他の部位は、別の場所に埋められている可能性もある。

・No. 2 (SK-107)

イヌ科の右脛骨、ウマの右橈尺骨、ウシの右中手骨である。複数の種類がわずかに検出されることを考えると、埋葬と考えるよりも、廃棄されたものであろう。イヌ科の右脛骨は、両端が未化骨で外れていることから、1.5ヶ月齢以下と考えられる。

ウマの右橈骨は、遠位端が残る。化骨化状況から3.5ヶ月齢以上とみられる。西中川ほか (1991) の骨長計算式、および林田・山内 (1957) の体高計算式から推定される体高は108cmで、トカラ馬程度の小型馬となる。

ウシの右中手骨は、ほぼ完存するが、遠位端が未化骨で外れる。遠位端が未化骨で外れることから、2.5ヶ月齢以下とみられる。西中川ほか (1991) にしたがうと、計測値から推定される体高は118cmとなる。

・No. 3 (SK-206)

ウマの左橈尺骨、種類・部位不明破片である。埋葬ではなく、廃棄されたものであろう。ウマの左橈尺骨は、両端が欠損し、骨体しか残存していない。ただし、かなり華奢であることから幼獣であった可能性もある。

表1 検出分類群一覧

脊椎動物門	Phylum	Vertebrata
哺乳綱	Class	Mammalia
ネコ目 (食肉目)	Order	Carnivora
ネコ亜目	Suborder	Fissipedia
イヌ科	Family	Canidae
イヌ		<i>Canis familiaris</i>
ウマ目 (奇蹄目)	Order	Perissodactyla
ウマ科	Family	Equidae
ウマ		<i>Equus caballus</i>
ウシ目 (偶蹄目)	Order	Artiodactyla
ウシ科	Family	Bovidae
ウシ		<i>Bos taurus</i>

・No. 4（第2遺構面溝）

ウマの右橈尺骨・右脛骨、ウマの右肩甲骨の可能性のある破片、大型獣類の胸椎・部位不明破片である。ウマは、右橈尺骨は両端が欠損、右脛骨は近位端が欠損する。右脛骨は遠位端が化石化していることから2ヶ月齢以上とみられ、体高が118cmと推定され、トカラ馬程度の小型馬となる。なお、ウマの可能性のある右肩甲骨は、ウマの体高推定式に当てはめると体高105cm程度となる。

表2 骨同定結果

No.	遺構名	種類	部 位	左	右	状態等	数量	備考
1	SK-121	ウマ	頭蓋			破片	1	
			下顎骨	左	右	破片	1+	左I1-3, 右I1-C植立
			下顎骨			破片	10	
			下顎第3前臼歯	左		破片	1	
			下顎第4前臼歯	左		破片	1	
			下顎第3後臼歯	左		破片	1	
			下顎第2前臼歯		右	略完	1	h27.34
			下顎第3前臼歯		右	略完	1	h36.71
			下顎第4前臼歯		右	略完	1	h37.33
			下顎第1後臼歯		右	略完	1	h33.56
			下顎第2後臼歯		右	略完	1	h35.58
			下顎第3後臼歯		右	略完	1	h36.62
			下顎第2前臼歯		右	略完	1	別個体, h29.52
			下顎第3前臼歯		右	略完	1	別個体, h31.70
			下顎第4前臼歯		右	略完	1	別個体, h28.77
			下顎第1後臼歯		右	略完	1	別個体, h26.05
			下顎第2後臼歯		右	略完	1	別個体, h28.43
			下顎第3後臼歯		右	略完	1	別個体, h27.63
			距骨	左		破片	1	
		ウマ?	不明			破片	40+	
2	SK-107	イヌ科	脛骨		右	両端欠	1	両端未化石外れ
		ウマ	橈骨		右	遠位端	1	
		ウシ	中手骨		右	略完	1	遠位端未化石外れ
3	SK-206	ウマ	橈尺骨	左		両端欠	1	
		獣類	不明			破片	2+	
4	第2遺構面溝	ウマ	橈尺骨		右	両端欠	1	
			脛骨		右	近位端欠	1	
		ウマ?	肩甲骨		右	破片	1	
		大型獣類	胸椎			略完	1	
			不明			破片	6+	
5	第2遺構面溝	ウマ	第3・4手根骨	左		略完	1	癒合
			中手骨	左		略完	1	近位端骨増殖
		ウシ	脛骨		右	近位端欠	1	
6	SK-201	ウマ/ウシ	脛骨	左?		破片	1	
7	第2遺構面溝	イヌ科	大腿骨		右	両端欠	1	両端未化石外れ
		ウマ	肩甲骨	左		破片	1	
		ウシ	上腕骨	左		略完	1	
			橈尺骨	左		略完	1	
			中手骨	左		略完	1	
8	第2遺構面溝	ウマ	大腿骨	左		破片	1	両端未化石外れ
9	第2遺構面溝	ウシ	上顎第2後臼歯	左		破片	1	未出歯牙
10	第2遺構面溝	ウシ	橈側手根骨	左		略完	1	
		ウマ/ウシ	寛骨		右	破片	1	
11	第2遺構面溝	イヌ	下顎骨		右	破片	1	dm2植立, M1未出

注) dm: 乳臼歯 I: 門歯 C: 犬歯 P: 前臼歯 M: 後臼歯

・No. 5（第2遺構面溝）

ウマの左第3・4手根骨と左中手骨、ウシの右脛骨である。ウマの左第3・4手根骨は第3手根骨と第4手根骨が癒合した状態である。ウマの左中手骨は、ほぼ完存する。第3・4手根骨と左中手骨は関節することから同一個体とみられる。左中手骨の遠位端が化石化することから1.5ヶ月齢以上であり、さらに中手骨の近位端部に骨増殖がみられ、第3手根骨と第4手根骨が癒合することから高齢馬であったと考えられる。計測値から推定される体高は141cmとなり、中型馬となる。

ウシの右脛骨は、近位端が欠損する。計測値から推定される体高は、102cm程度となる。

・No. 6（SK-201）

ウマ/ウシの左脛骨の可能性のある破片である。埋葬ではなく、廃棄されたものであろう。

・No. 7（第2遺構面溝）

イヌ科の右大腿骨、ウマの左肩甲骨、ウシの左上腕骨・左橈尺骨・左中手骨である。

イヌ科の右大腿骨は、両端が未化石で外れることから、少なくとも1.5歳以下と判断できる。

ウマの左肩甲骨は、計測値から推定される体高が103cmとなる。

ウシの左上腕骨・橈尺骨・中手骨はほぼ完存する。ウシの左上腕骨と橈尺骨は、関節することから同一個体と判断できる。中手骨も同一個体に由来する可能性がある。他の部位がみられないことから、別の場所で解体されて左前肢が埋められた可能性もある。計測値から推定される体高は120cm程度となる。

・No. 8（第2遺構面溝）

ウマの左大腿骨である。両端が未化石で外れることから、3.5ヶ月齢以下と考えられる。

・No. 9（第2遺構面溝）

ウシの左上顎第2後臼歯である。未出歯牙である。1歳以下とみられる。

表3 骨計測結果

	番号	No. 2	No. 4	No. 5	No. 7
部位	計測箇所		ウマ? 右		ウマ 左
肩甲骨	SLC		42.53		
	LG				49.11
	GLP				78.78
	BG				42.08
部位	計測箇所				ウシ 左
上腕骨	GL				295
	Bp				95.74
	SD				33.61
	BT				76.53
	Bd				79.45
部位	計測箇所				ウシ 左
橈尺骨	GL				355
	GLI				351
	PL				264
	LI				249
	SD				40.24
部位	計測箇所	ウマ 右			ウシ 左
橈骨	GL				270.44
	Bp				81.35
	Dp				76.19
	BFd	50±			
	Bd	57.49			73.81
	Dd	34.27			43.91
部位	計測箇所				ウシ 左
尺骨	LO				94.89
	SDO				51.91
	DPA				63.34
部位	計測箇所	ウシ 右		ウマ 左	ウシ 左
中手骨	GL			235.77	184.19
	Bp	58.06		47.97	59.56
	Dp	37.76		39.25	35.18
	SD			26.81	32.79
	Bd			43.17	60.18
	Dd			32.81	33.23
部位	計測箇所		ウマ 右	ウシ 右	
脛骨	Bd		63.12	53.68	
	Dd		38.66	41.20	

・No.10（第2遺構面溝）

ウシの左橈側手根骨、ウマ/ウシの右寛骨である。

・No.11（第2遺構面溝）

イヌの右下顎骨である。右下顎第2乳臼歯が植立し、第1後臼歯が未出である。これらの歯牙萌出状況からみると0.5歳以下と判断される。

Ⅱ．種実同定

1．試料

試料は、第2遺構面溝から出土した種実1点（No. 1）である。既に乾燥状態にある。

2．分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察する。同定は、現生標本や石川（1994）、中山ほか（2010）、鈴木ほか（2012）を参考に実施する。結果は、部位・状態別の個数を一覧表で示す。また、種実遺体の写真を添付し、大きさをデジタルノギスで計測した結果を一覧表に併記して同定根拠とする。分析後は、種実遺体を分類群別に容器に入れて保管する。

3．結果および考察

試料は、針葉樹マツ科のマツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon*）の球果に同定された。以下、形態的特徴を述べる。球果は灰褐色、長さ61.5mm、径56.4mmの円錐状広卵体を呈す。球果は木質で、覆瓦状、螺旋状に配列する長楕円状矩形の種鱗が開き、一部の内面に種子翼の残存が確認される。種鱗外面は不規則な四～五角形で肥厚し、横の稜線とその中央部に短く突起する臍点がある。

第2遺構面溝より出土した種実遺体1点は、マツ属複維管束亜属の球果に同定された。種鱗が開いていることから、成熟果と考えられる。マツ属複維管束亜属は、高木になる常緑針葉樹で、本地域には日当たりのよい海岸の砂浜や岩上などに生育するクロマツと、尾根筋や岩山などの乾燥した痩せ地に生育するアカマツの2種と、両種の自然雑種が分布する。その他、庭木や防風林としての植栽の用途もある。出土球果は、両種の区別には至らなかったが、周辺域に生育していたと考えられる。

Ⅲ．樹種同定

1．試料

樹種同定用試料は、第2遺構面溝から検出された試料で土壌ごと採取された植物片（No.1）である。試料中には細長い植物片が乾燥した状態で入っている。

肉眼観察では植物片は2種類あり、節があるタケと思われるものが10片程度と、針葉樹と思われる破片が1つ存在する。そこで便宜的に、タケと思われるものをNo.1-①、針葉樹をNo.1-②として同定を実施する。

2. 分析方法

剃刀を用いて木口（横断面）・柃目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の切片を作成する。光学顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

3. 結果および考察

顕微鏡観察の結果、1-①はタケ亜科、1-②はサワラである。検出された試料は、サワラとタケ亜科である。どちらも何らかの用途で使われていたものが、溝中に投棄あるいは流れ込んだものとみられる。サワラ、タケ亜科共に、立てに割れやすいので加工性に富み、比較的耐水性もあることから様々な用途で多用される。なお、以下に木材組織の特徴を述べる。

・No. 1-① イネ科タケ亜科（Gramineae subfam. Bambusoideae）

原生木部の小径の道管の左右に1対の大型の道管があり、その外側に師部細胞がある。これらを厚壁の繊維細胞（維管束鞘）が囲んで維管束を形成する。繊維細胞は放射方向に広く、接線方向に狭いため、全体として放射方向に長い菱形となる。維管束は柔組織中に散在し、不斉中心柱をなす。維管束鞘の厚さや節まわりの径の太さから、草本質のイネ科ではなく、タケ類である。

・No. 1-② サワラ（*Chamaecyparis pisifera* (Sieb. et Zucc.) Endlicher）ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～スギ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～15細胞高。

引用文献

- Angela von den Drieach, 1976, A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites. Peabody Museum Bulletins 1.i-ix, 1-137.
- 林 昭三, 1991, 日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 加藤 嘉太郎・山内 昭二, 2003, 新編 家畜比較解剖図説 上巻. 養賢堂, 315p.
- 久保和士・松井 章, 1999, 家畜その2-ウマ・ウシ. 西本 豊弘・松井 章編, 考古学と自然科学② 考古学と動物学, 同成社, 169-208.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2010, 日本植物種子図鑑（2010年改訂版）. 東北大学出版会, 678p.
- 西中川 駿・本田 道輝・松元 光春, 1991, 古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究. 平成2年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告書, 197p.
- Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴

リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘（日本語版監修），海青社，70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification] .

島地 謙・伊東隆夫，1982，図説木材組織.地球社，176p.

鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文，2012，ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実－形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種－.誠文堂新光社，272p.

Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.（編），1998，広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩（日本語版監修），海青社，122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

図版1 出土骨(1)



- | | |
|---------------------------------|---------------------------------|
| 1. イヌ右下顎骨 (No. 11 ; 第2遺構面溝) | 2. イヌ科右大腿骨 (No. 7 ; 第2遺構面溝) |
| 3. イヌ科右脛骨 (No. 2 ; SK-107) | 4. ウマ頭蓋骨 (No. 1 ; SK-121) |
| 5. ウマ右下顎第3後臼歯 (No. 1 ; SK-121) | 6. ウマ右下顎第2後臼歯 (No. 1 ; SK-121) |
| 7. ウマ右下顎第1後臼歯 (No. 1 ; SK-121) | 8. ウマ右下顎第4前臼歯 (No. 1 ; SK-121) |
| 9. ウマ右下顎第3前臼歯 (No. 1 ; SK-121) | 10. ウマ右下顎第2前臼歯 (No. 1 ; SK-121) |
| 11. ウマ左下顎第3前臼歯 (No. 1 ; SK-121) | 12. ウマ左下顎第4前臼歯 (No. 1 ; SK-121) |
| 13. ウマ左下顎第3後臼歯 (No. 1 ; SK-121) | 14. ウマ右下顎第3後臼歯 (No. 1 ; SK-121) |
| 15. ウマ右下顎第2後臼歯 (No. 1 ; SK-121) | 16. ウマ右下顎第1後臼歯 (No. 1 ; SK-121) |
| 17. ウマ右下顎第4前臼歯 (No. 1 ; SK-121) | 18. ウマ右下顎第3前臼歯 (No. 1 ; SK-121) |
| 19. ウマ右下顎第2前臼歯 (No. 1 ; SK-121) | 20. ウマ左右下顎骨 (No. 1 ; SK-121) |
| 21. ウマ左橈尺骨 (No. 3 ; SK-206) | 22. ウマ右橈骨 (No. 2 ; SK-107) |
| 23. ウマ右橈尺骨 (No. 4 ; 第2遺構面溝) | 24. ウマ左中手骨 (No. 5 ; 第2遺構面溝) |
| 25. ウマ左大腿骨 (No. 6 ; 第2遺構面溝) | 26. ウマ右脛骨 (No. 4 ; 第2遺構面溝) |
| 27. ウマ左距骨 (No. 1 ; SK-121) | 28. ウマ左第3・第4手根骨 (No. 5第2遺構面溝) |
| 29. ウマ左肩甲骨 (No. 7 ; 第2遺構面溝) | 30. ウマ?右肩甲骨 (No. 4 ; 第2遺構面溝) |

図版2 出土骨(2)



31. ウシ右上顎第2後臼歯 (No. 9 ; 第2遺構面溝)

33. ウシ左橈尺骨 (No. 7 ; 第2遺構面溝)

35. ウシ右中手骨 (No. 2 ; SK-107)

37. ウシ右脛骨 (No. 5 ; 第2遺構面溝)

39. ウマ/ウシ左?脛骨 (No. 6 ; SK-201)

32. ウシ左上腕骨 (No. 7 ; 第2遺構面溝)

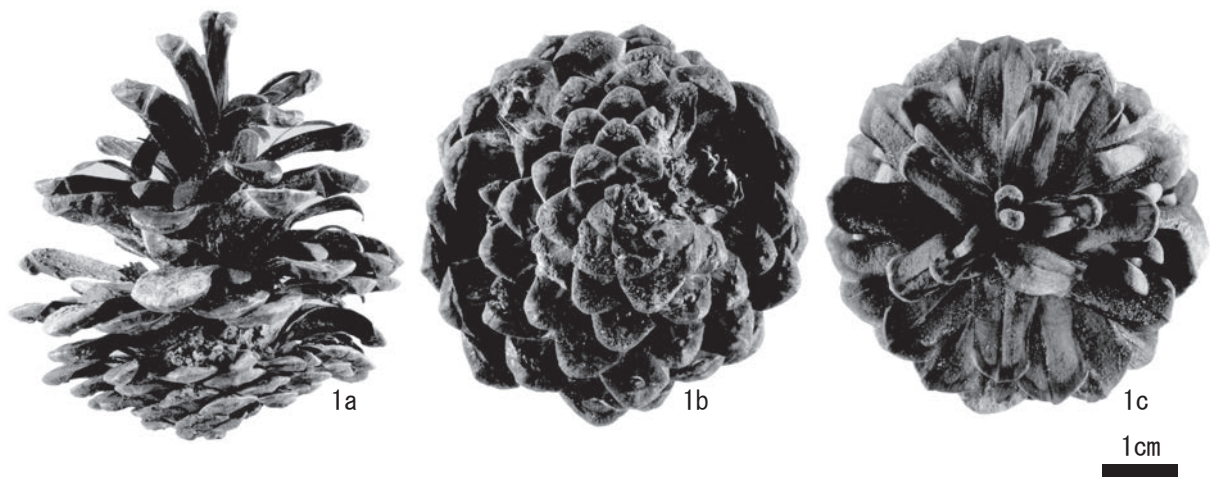
34. ウシ右中手骨 (No. 7 ; 第2遺構面溝)

36. ウシ左橈側手根骨 (No. 10 ; 第2遺構面溝)

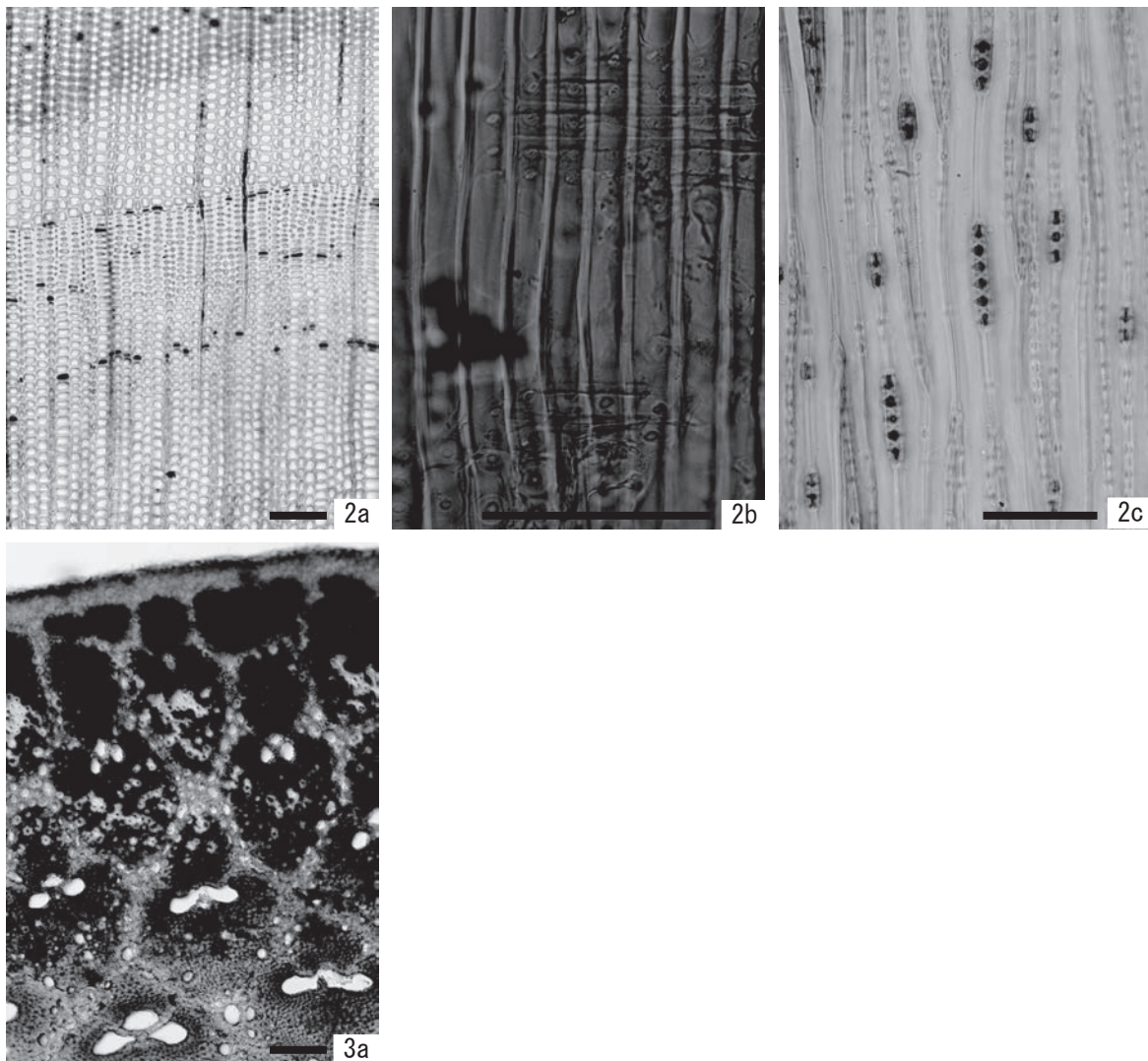
38. ウマ/ウシ右寛骨 (No. 10 ; 第2遺構面溝)

40. 大型獣類胸椎 (No. 4 ; 第2遺構面溝)

図版3 種実遺体・木材



1. マツ属複維管管亜属 球果 (No. 1 ; 第2遺構面溝)



2. サワラ (No. 1-② ; 第2遺構面溝)

3. タケ亜科 (No. 1-① ; 第2遺構面溝)

スケールは100 μ m
a: 木口 b: 柁目 c: 板目

V 総括

本城町遺跡は柳川城北三の丸にあたり、近世の柳川城の様子を描いた「御家中絵図」から常福寺が所在した場所であると考えられている。本調査では3面の遺構面を確認することができたため、各面ごとに報告を行った。

第1遺構面は、本調査の遺構面の中で最も多くの遺構を検出し、遺物も多く出土した。検出した遺構は、土坑や柱穴が主であり、柱穴のいくつかは柵列を構成する可能性が考えられるが、全容は不明である。遺物は、近世陶磁器や輸入陶磁器、瓦質土器等が出土した。

第2遺構面で検出した遺構の中で特筆すべきは、絵図等に描かれていない溝を検出したことである。この溝は調査区中央に位置し、調査区外の東西に延びる。溝埋土の堆積層の中には、竹の様な有機物の下に別種類の有機物を敷いた様な堆積層を検出している。今回溝から検出した有機物の一部は、サンプリングを行ない樹種同定の分析を行なった。結果についてはIV章に詳しく述べているが、タケとヒノキを含むという結果を得た。この結果は、これまでの近世柳川城下町の発掘調査に伴う遺構調査で検出した有機物を考える上でも新たな成果となった。また、第2遺構面の調査区内では、溝を挟んで北と南で遺構分布の特徴が異なっている。溝を挟んで北側では、不定形で幅が広く浅い遺構が多く検出しており、その土坑からは多くの獣骨が出土している特徴を持つ。そして南側では、比較的円形の深い土坑や柱穴を検出している。第2遺構面の遺物は、近世陶磁器や輸入磁器、瓦質土器等が出土している。

第3遺構面は本調査面の中で、検出遺構数及び出土遺物数が最も少ない遺構面である。第3遺構面では、土坑を検出している。遺物は、肥前系磁器を始め輸入陶磁器や瓦質土器が出土した。

今回の調査は、近世柳川城の北三の丸内での調査であったため、これまでに本市が発掘調査を実施した城下町の発掘調査とは出土遺物の種類に違いが見られた。本調査では、町人地の調査などで多く出土する土人形や土鈴は出土しなかった。また、出土した遺物の量は少なかったが各調査面において12世紀まで時代を遡る可能性がある輸入陶磁器等を出土したことは、本調査地が祈願寺であったための伝世品であるのか、または祈願寺以前の遺物であるのか検討する資料となった。その他に中世に遡る可能性を考えられる遺物として、滑石製石鍋が挙げられる。本調査において出土した滑石製石鍋は10世紀後半から11世紀の遺物と考えられ、本遺跡で出土した遺物と同様の遺物が、東蒲池大内曲り遺跡から出土しており中世の柳川を考える上で共通する資料となった。

また、表採遺物ではあるが本調査において、未使用品と考えられる鉛玉が出土しておりこれは柳川城下町遺跡の調査において初の出土例となった。その他に、近年の近世柳川城下町の調査において、獣骨の出土事例が増加しており、今後の調査において出土事例が増加することに期待したい。

最後に、今回第1遺構面と第2遺構面より検出した柵列については、第5図の「御家中絵図」や第6図の「常福寺」に描かれる常福寺の堀に関連した遺構の可能性のあるものの、調査区の面積が狭く全容は把握できていない。

これらの成果は近世柳川城の城内の姿や、近世以前の当地の姿を解明するにあたり重要な成果となった。今後の調査の蓄積により、近世柳川城内や、城下町における町人地と武家地との出土遺物の比較から、様相の違いを検討することができるであろう。

— 参考文献 —

- 『九州陶磁器の編年—九州陶磁学会10周年記念—』 2000 九州陶磁学会
- 『新・柳川明証図会』 柳川市史特別編 2002
- 『京町遺跡』 柳川市文化財調査報告書 第7集 2009 柳川市教育委員会
- 『上町遺跡Ⅱ』 柳川市文化財調査報告書 第14集 2018 柳川市教育委員会
- 『東蒲池榎町遺跡』 有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第1集 2005 福岡県教育委員会
- 『矢加部町屋敷遺跡』 有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第3集 2007 福岡県教育委員会
- 『矢加部南屋敷遺跡・矢加部五反田遺跡』 有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第5集 2009 福岡県教育委員会
- 『矢加部町屋敷遺跡Ⅳ・蒲船津西ノ内遺跡・蒲船津水町遺跡』 有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第12集 2012 九州歴史資料館
- 『上町遺跡2次調査』 福岡県柳川市上町所在遺跡の調査 福岡県文化財調査報告書 第264集 2018 九州歴史資料館
- 『本町遺跡』 福岡県柳川市本町所在遺跡の調査 福岡県文化財調査報告書 第265集 2018 九州歴史資料館

表1 出土遺物観察表

図番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) () 復元値	胎の種類 胎の特徴	釉薬	調整・成形・装飾技法・特徴	窯詰技法	産地	年代	備考
第1遺構面 SK-1 第12図1	水差し	口径(17.2)	陶器 細石英 淡赤緑色	灰釉		口縁部上面露胎	高取か?		残0.1
第1遺構面 SK-13 第12図2	搦鉢		陶器 細石英 褐色	茶褐色	口縁部内外面に鉄釉を施す。 搦目の単位は不明。		在地系		残0.1
第1遺構面 SK-36 第12図3	碗	口径 (15.2)	白磁 精良 青白色	透明	内面に一条の沈線を施す。		中国系	12c	残0.1
第1遺構面 SK-68 第12図4	皿	口径 (13.0)	白・土師器 金雲母・細砂粒 淡灰褐色		内外面ナデ調整。 底部系切り。		在地系		残0.4
第1遺構面 SK-68 第12図5	瓦器皿		瓦器 精良 淡灰色		内外面ナデ調整。 底部系切り後ナデ調整。				残0.2
第1遺構面 石列 第12図6	壺		陶器 精良 暗褐色	灰褐色	外面型部に3条の沈線と装飾あり。				残0.2
第1遺構面 SK-76 第14図7	皿	底径5.5	土師器 白雲母 淡黄灰色		内外面ナデ。 底部ナデ調整。		在地系		残0.7
第1遺構面 SK-76 第14図8	坏	口径11.6 器高2.2 底径7.0	土師器 白雲母 淡黄灰色		内外面ナデ。 底部は丁寧なナデ調整。		在地系		残0.6
第1遺構面 SK-76 第14図9	碗		白磁 精良 淡橙白色	淡緑白色	内面貫入あり。 胎土は粉っぽい。		中国系	12c	残0.1
第1遺構面 SK-76 第14図10	碗	底径 (5.0)	青磁か? 精良 灰白色	黄緑色	見込みに蓮花文の印文を施す。	高台露胎	中国系 龍泉窯	14c	残0.3
第1遺構面 SK-76 第14図11	染付碗		磁器 精良 灰白色	透明	外面に丸菊花文を描く。		肥前系	19c後～20c前	残0.1
第1遺構面 SK-76 第14図12	碗	口径 (8.2)	磁器 精良 灰白色	青白色	外面に草文を描く。 全体に貫入あり。		肥前系	19c後～20c前	残0.3
第1遺構面 SK-76 第14図13	染付碗	口径8.2 器高4.4 底径3.0	磁器 精良 灰白色	青白色	外面に草文を描く。	畳付釉剥ぎし、砂付着	肥前系	19c	残0.8
第1遺構面 SK-76 第14図14	染付碗	口径 (10.2) 器高5.1 底径 (4.4)	磁器 精良 灰白色	透明	外面に草花文を描く。	畳付釉剥ぎ	肥前系	19c	残0.4
第1遺構面 SK-76 第14図15	染付碗	口径 (10.0) 器高5.0 底径 (4.0)	磁器 精良 灰白色	透明	外面に草花文、笹文を描く。	畳付釉剥ぎ	肥前系	19c後～20c前	残0.3
第1遺構面 SK-76 第14図16	染付碗	口径 (10.3) 器高5.0 底径 (4.5)	磁器 精良 灰白色	青白色	外面に草花文を描く。		肥前系	19c後～20c前	残0.4
第1遺構面 SK-76 第14図17	染付碗	口径 (11.4) 器高5.8 高台径 (4.0)	磁器 精良 白色	透明	高台と高台内に圈線、外面全体に放射 状に菊弁文を描く。	畳付釉剥ぎ	肥前系	19c後～20c前	残0.4
第1遺構面 SK-76 第14図18	蓋付鉢	口径 (10.6)	磁器 精良 灰白色	透明	外面に六条一単位の横線文を描く。	内面口縁部釉剥ぎ	肥前系	19c後～20c前	残0.3
第1遺構面 SK-76 第14図19	染付皿	口径10.6 器高2.2 底径5.8	磁器 精良 黄灰色	青白色	口縁は輪花状を呈す。 内外面に花唐草文、高台内面に圈線と 渦橋を描く。	畳付釉剥ぎし、畳付に砂付着	肥前系	19c後～20c前	残0.9
第1遺構面 SK-76 第14図20	色絵碗	口径 (16.2) 器高8.1 底径 (6.6)	磁器 精良 灰白色	透明	内面口縁部に梅文と菊文、見込みに菊 唐草文、外面に菊文と草花文、高台内 面に菊花文を描く。	畳付釉剥ぎ	肥前系	明治期	残0.5
第1遺構面 SK-76 第14図21	土瓶	口径 (9.0) 器高 (10.6) 底径 (7.0)	陶器 精良 黄褐色	透明	外面に銅緑釉・鉄釉・白化粧土で松文 を描く。	内面と外面下半は露胎	不明		残0.4 外面と内面の下半に スス付着
第1遺構面 SK-76 第14図22	皿		陶器 精良 淡褐灰色	淡褐灰色			肥前系 唐津	17 c 前	残0.1
第1遺構面 SK-76 第14図23	皿	口径 (12.4)	陶器 精良 黄白色	黄白色			肥前系 京焼風	17c後～18c前	残0.1
第1遺構面 SK-76 第14図24	灯明皿	口径8.0 器高1.8 底径4.0	陶器 細砂粒 暗褐色	鉄釉	ナデ後、内面のみに鉄釉を施す。 底部系切り。				完形
第1遺構面 SK-76 第14図25	火入れ	底径 (6.2)	陶器 精良 淡黄白色	淡黄白色		高台および内面露胎	肥前系 京焼風	17c後～18c前	残0.1
第1遺構面 SK-76 第14図26	碗	口径 (12.8)	陶器 精良 淡黄白色	淡黄白色	内面に菊花文を描く。 全体に貫入あり。		肥前系 京焼風	17c後～18c	残0.2
第1遺構面 SK-76 第14図27	碗	口径 (11.4) 器高4.5 底径 (4.2)	陶器 細砂粒 淡黄白色	黄白色	見込みに鉄絵で山水文を描く。 全体に貫入あり。	高台露胎	肥前系 京焼風	17c後～18c	残0.3
第1遺構面 SK-76 第14図28	皿	口径 (12.6) 器高3.2 底径 (4.2)	陶器 精良 灰白色	淡緑白色		高台露胎 蛇の目釉剥ぎ 畳付け砂付着	中国系 福建か?	13c～14c	残0.4
第1遺構面 SK-76 第14図29	搦鉢	口径 (38)	陶器 精良 赤褐色	鉄釉	内外面口縁部に鉄釉を施す。 搦目の単位は不明。		在地系		残0.3
第1遺構面 SK-8 第15図30	植木鉢	口径 (22.6) 器高14.4 底径 (9.6)	陶器 細砂粒 淡褐色	鉄釉	内面口縁部から外面高台付近まで鉄釉を施す。 高台には波上の扶りを入れ、底部中央 は穿孔する。				残0.7
第1遺構面 SK-8 第15図31	染付碗	口径 (8.8) 器高4.2 底径 (3.4)	磁器 精良 白色	透明	口縁部に圈線、内外面に唐草文を描く。		肥前系	19c後～20c前	残0.4
第1遺構面 SK-17 第15図32	碗	口径 (11.8) 器高5.6 底径 (3.8)	陶器 細石英 淡褐色	鉄釉 黒色釉	見込みは鉄釉の上から黒色釉を流しか ける。	外面下部から高台内にかけて 露胎	肥前系 唐津か?		残0.6
第1遺構面 SK-22 第15図33	甕	底径24	土師質土器 白雲母・細石英 赤褐色		内外面ハケ目とナデ調整。 底部ヨコハケ調整。		在地系		残0.3
第1遺構面 SK-33 第15図34	搦鉢	底径 (12.8)	土師質土器 白雲母・細石英 灰黄色		外面は指オサエ。 搦目の単位は7条。		在地系		残0.2
第1遺構面 SK-38 第15図35	小坏	口径7.7 器高2.2 底径4.0	土師器 白雲母 淡黄橙色		内外面ナデ。 底部は板状圧痕が残る。		在地系		残0.8
第1遺構面 SK-44 第15図36	小皿	口径 (8.8) 器高1.1 底径 (7.0)	土師器 白雲母 淡灰黄色		内外面ナデ。底部系切り。		在地系		残0.3

図番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) () 復元値	胎の種類 胎の特徴	釉薬	調整・成形・装飾技法・特徴	窯詰技法	産地	年代	備考
第1遺構面 SK-55 第15図37	皿	底径5.4	土師器 白雲母・細砂粒 灰褐色		内外面ナデ調整。 底部糸切り。		在地系		残0.7
第1遺構面 SK-45 第15図38	甕	口径40.8 器高48.1 底径25.8	土師質土器 細砂粒 赤褐色		口縁部内外面ナデ。内面全体的にハケメ、 外面上半部にハケメを施す。				残0.9
第1遺構面 SK-41 第15図39	染付碗		磁器 精良 白色	透明	内面に四方禪文、外面に網目文を描く。		肥前系	19c後～20c前	残0.1
第1遺構面 SK-57 第15図40	碗	口径 (18.0)	瓦質土器 精良 灰色		内面ミガキ、外面ミガキと指オサエを 施す。				残0.2
第1遺構面 SK-57 第15図41	瓦器碗		瓦器 精良 淡灰褐色		外面ミガキを施す。				残0.1
第1遺構面 SK-57 第15図42	鉢	口径 (15.0)	白磁 精良 淡灰色	透明	全体に貫入あり。 玉縁口縁。		中国系	12c	残0.2
第1遺構面 SK-60 第15図43	鉢	口径 (13.8)	青磁 精良 灰白色	青緑色			中国系 龍泉窯	13c～14c	残0.3
第1遺構面 SK-67 第15図44	染付皿	口径 (9.0)	磁器 精良 白色	白青色	外面に雨降り文を描く。 口縁部口さび。 全体に貫入あり。		肥前系	19c後～20c前	残0.3
第1遺構面 SK-67 第15図45	碗	口径 (7.4)	染付 精良 灰白色	白青色	外面に草花文を描く。 全体に貫入あり。		肥前系	19c後～20c前	残0.2
第1遺構面 SK-67 第15図46	染付碗	口径 (9.6)	磁器 精良 灰白色	透明	外面に桐文を描く。		肥前系	19c後～20c前	残0.2
第1遺構面 SK-70 第15図47	瓦器皿	口径 (17.0)	瓦器 黒・白砂粒 淡灰色		内外面ミガキを施す。				残0.1
第1遺構面 遺構検出 第16図48	碗		白磁 精良 灰白色	透明	口縁端部は嘴状。		中国系	12c	残0.2
第1遺構面 遺構検出 第16図49	碗		白磁 精良 淡灰色	透明	口縁端部は嘴状。		中国系	12c	残0.1
第1遺構面 遺構検出 第16図50	碗		白磁 精良 淡灰黄色	透明	全体に貫入あり。 玉縁口縁。		中国系	12c	残0.1
第1遺構面 遺構検出 第16図51	皿	底径 (8.4)	白磁 精良 灰白色	灰白色		量付釉剥ぎ	中国系	16c	残0.2
第1遺構面 遺構検出 第16図52	小碗	底径 (3.6)	白磁 精良 白色	透明		量付釉剥ぎ	肥前系	19c後～20c前	残0.3
第1遺構面 遺構検出 第16図53	碗	底径 (4.4)	白磁 精良 明灰色	透明		外面下部から高台露胎 蛇の目剥ぎ	中国系	12c	残0.1
第1遺構面 遺構検出 第16図54	鍋		土師質土器 白砂粒・白・金雲母 白橙色		内面ヨコハケ、外面指オサエを施す。		在地系		残0.1
第1遺構面 遺構検出 第16図55	瓦器皿	口径 (11.0) 器高2.1	瓦器 白雲母・細砂粒 暗灰色		内外面ナデ後ミガキを施す。 底部丁寧にナデ調整。				残0.7
第1遺構面 遺構検出 第16図56	皿	口径 (14.0) 器高3.0 底径 (10.0)	土師器 白雲母・白砂粒 淡灰褐色		内外面ナデ。 底部糸切り。		在地系		残0.5
第1遺構面 遺構検出 第16図57	壺	口径 (12.0)	土師質土器 金雲母・白砂粒 明橙色		内外面ヨコナデ。				残0.2
第1遺構面 遺構検出 第16図58	鉢		陶器 精良 明褐色	暗赤褐色					残0.1
第1遺構面 遺構検出 第16図59	皿	底径 (4.0)	陶器 精良 白灰色	灰緑色		底部露胎 三日月高台	肥前系 唐津か？	17c前か	残0.3
第1遺構面 遺構検出 第16図60	火入れ	底径 (5.8)	陶器 精良 明橙色	明橙色	外面に白化粘土でハケメか。				残0.2
第1遺構面 遺構検出 第16図61	染付碗		磁器 精良 灰色	透明	口縁部内面に2条の圓線、口縁部外面 に圓線と草文を描く。		中国系 景德鎮	16c後～17c	残0.1
第1遺構面 遺構検出 第16図62	青花皿	底径 (7.4)	磁器 細砂粒 灰白色	透明	見込みに2条の圓線を描く。 文様あり。		中国系 景德鎮 か？	16c後～17c	残0.1
第1遺構面 遺構検出 第16図63	染付蓋	口径 (6.5) 器高3.2	磁器 精良 白色	透明	外面に草文を描く。	口縁部釉剥ぎ	肥前系	19c後～20c前	残0.7
第1遺構面 遺構検出 第16図64	猪口	口径 (4.8) 器高3.6 底径2.6	陶器か？ 細砂粒 淡黄灰色	淡灰緑色	内面に貫入あり。	高台露胎		近代か？	残0.7
第1遺構面 遺構検出 第16図65	火入れ	口径 (9.6)	陶器 精良 淡黄灰色	黄灰色	外面に貫入あり。	内面露胎	肥前系 京焼風	17c後～18c	残0.2 内面にうすくスス付 着
第1遺構面 溝 第16図66	皿	底径 (5.9)	青磁 精良 淡灰色	青灰色	全体に貫入あり。	量付から高台内露胎	中国系 龍泉窯	12c	残0.2
第1遺構面 溝 第16図67	鍋	底径 (11.2)	土師質土器 白雲母・角閃石・白砂粒 淡灰褐色		外面ハケ目とナデを施す。				残0.2
第2遺構面 SK-105 第23図68	瓦器碗		瓦器 精良 淡灰色		内外面ミガキを施す。				残0.1
第2遺構面 SK-105 第23図69	瓦器碗		瓦器 精良 淡灰色		内外面ミガキを施す。				残0.1
第2遺構面 SK-107 第23図70	瓦器碗		瓦器 精良 灰白色		内外面にミガキを施す。				残0.1
第2遺構面 SK-107 第23図71	瓦器碗		瓦器 細砂粒 灰白色		内外面にミガキを施す。				残0.1
第2遺構面 SK-107 第23図72	皿	底径 (7.0)	白磁 精良 白灰色	透明	見込みに一条の沈線を施す。	高台露胎	中国系	12c	残0.2

図番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) () 復元値	胎の種類 胎の特徴	釉薬	調整・成形・装飾技法・特徴	窯詰技法	産地	年代	備考
第2遺構面 SK-112 第23図73	甕		土師質土器 白雲母・砂粒 黄灰色						残0.1
第2遺構面 SK-112 第23図74	甕		陶器 砂粒 淡赤褐色	鉄釉		口縁部露胎			残0.1
第2遺構面 SK-115 第23図75	鍋		土師質土器 白雲母・砂粒 黄灰色		内面にミガキを施す。		在地系		残0.1
第2遺構面 SK-118 第23図76	小坏	底径4.4	土師器 白雲母 黄灰色		底部糸切り。		在地系		残0.3 底部に穿孔を施す。
第2遺構面 SK-118 第23図77	皿	底径6.0	土師器 白雲母 淡黄褐色	灰黄褐色	内外面ナデ。 底部糸切り。		在地系		残0.5
第2遺構面 SK-118 第23図78	碗	底径 (7.0)	白磁 黒色砂粒 淡灰黄色	淡灰黄色	見込みに一条の沈線を施す。	外面下部露胎	中国系	12c	残0.3
第2遺構面 SK-118 第23図79	皿	底径 (6.4)	陶器 精良 明赤褐色	淡褐色	見込みに草文を描く。	底部露胎	肥前系 唐津	17c前	残0.4
第2遺構面 SK-118 第23図80	染付皿	口径 (10.0)	磁器 精良 灰白色	灰青色	口縁部内外面に圈線を描く。		肥前系	17c	残0.1
第2遺構面 SK-118 第23図81	德利	底径 (6.4)	磁器 精良 白色	淡緑色	外面体部に墨書。	底部露胎	肥前系	19c後～20c前	残0.4
第2遺構面 SK-118 第23図82	筒型碗	口径 (8.4)	陶器 精良 淡灰色	淡灰色	口縁部皮鯨手。		肥前系 唐津	17c前	残0.2
第2遺構面 SK-118 第23図83	小壺?		陶器 白色粒 褐色	暗赤褐色					残0.2
第2遺構面 SK-120 第23図84	皿	口径 (8.4) 器高1.9 底径 (4.4)	土師器 精良 灰褐色		内外面ナデ。 底部糸切り。				残0.7 全体が光沢のある黒色を呈す。墨汁か?
第2遺構面 SK-120 第23図85	碗	底径 (6.6)	白磁 精良 灰白色	透明	見込みに一条の沈線を施す。	外面下半露胎	中国系	12c	残0.4
第2遺構面 SK-121 第23図86	皿	口径 (18.0)	土師器 細砂粒 淡灰色		内外面ミガキを施す。				残0.1
第2遺構面 SK-121 第23図87	瓦器埵		瓦器 白雲母・細砂粒 淡灰色		内外面ミガキを施す。				残0.1
第2遺構面 SK-121 第23図88	瓦器埵	底径 (5.8)	瓦器 精良 暗灰色		内外面ミガキを施す。 高台部ナデ調整。				残0.2
第2遺構面 SK-121 第23図89	瓦器埵	底径 (4.4)	瓦器 精良 淡灰色		内外面ミガキを施す。				残0.1
第2遺構面 SK-121 第23図90	瓦器埵	底径 (6.0)	瓦器 白雲母・細砂粒 灰色		内外面ミガキを施す。 高台部ナデ調整。				残0.3
第2遺構面 SK-121 第23図91	瓦器埵	口径 (16.4) 底径 (7.0) 器高5.3	瓦器 精良 暗灰色		内外面ミガキを施す。 高台部ナデ調整。				残0.3
第2遺構面 SK-121 第23図92	碗	口径 (16.4)	白磁 精良 灰白色	透明	玉縁口縁。		中国系	12c	残0.1
第2遺構面 SK-121 第23図93	碗	口径 (15.4)	白磁 精良 灰白色	透明	玉縁口縁。	外面下半露胎	中国系	12c	残0.3
第2遺構面 SK-121 第23図94	碗	口径 (16.2)	白磁 精良 灰白色	透明	玉縁口縁。		中国系	12c	残0.2
第2遺構面 SK-121 第23図95	碗	口径 (17.0)	白磁 精良 灰色	緑灰色	内面に櫛目で花文を描く。 口縁部は嘴状。		中国系	12c	残0.1
第2遺構面 SK-121 第23図96	碗	底径 (6.2)	白磁 精良 灰白色	明緑灰色	見込みに一条の圈線と、櫛目で花文を描く。	高台内露胎	中国系	12c	残0.3 95と同一個体か
第2遺構面 SK-122 第25図97	鍋		土師質土器 白・金雲母・石英 淡灰褐色	淡灰褐色			在地系		残0.1
第2遺構面 SK-122 第25図98	碗	口径 (10.2)	白磁か? 精良 白色	白色				19c後～20c前	残0.1
第2遺構面 SK-122 第25図99	不明		陶器 精良 明褐色	明褐色	外面に草文か。		肥前系 唐津	17c前	残0.1
第2遺構面 SK-123 第25図100	鍋		土師質土器 白雲母・砂粒 淡褐色				在地系		残0.1
第2遺構面 SK-123 第25図101	瓦器埵		瓦器 精良 灰白色		内外面ミガキを施す。				残0.2
第2遺構面 SK-123 第25図102	猪口	器高2.9	白磁 精良 白色	透明		畳付釉剥ぎ	中国系	16c	残0.2
第2遺構面 SK-103 第26図103	播鉢	口径 (29.0) 器高12.1 底径 (13.6)	瓦質土器 細石英 黒灰色		内面はヨコハケの後八条の播目を施す。 外面は指オサエを施す。		在地系		残0.3
第2遺構面 SK-103 第26図104	火鉢	口径 (44.6)	瓦質土器 白雲母・細石英 黒色		内面はナデ、外面はミガキを施す。外面は上半に2条の突帯を作り、上端に印刻をめぐらす。				残0.3
第2遺構面 SK-106 第26図105	皿?		陶器 精良 黄灰色	透明					残0.1
第2遺構面 SK-111 第26図106	碗		白磁 黒色粒 灰白色	透明	口縁端部は嘴状。		中国系	12c	残0.1
第2遺構面 SK-114 第26図107	鍋		土師質土器 白雲母・白・黒砂粒 淡灰褐色		内面ヨコハケを施す。		在地系		残0.1
第2遺構面 溝 第26図108	皿	口径 (9.6) 器高2.6 底径 (6.8)	土師器 白雲母・黒雲母 灰色		内外面ナデ。 底部糸切り。		在地系		残0.6 内面に油煙付着。灯明皿として使用か。

図番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) () 復元値	胎の種類 胎の特徴	釉薬	調整・成形・装飾技法・特徴	窯詰技法	産地	年代	備考
第2遺構面 溝 第26図109	坏	口径10.0 器高2.9 底径5.5	土師器 白雲母 淡灰黄色		外面底部糸切りで、板状圧痕が残る。 内外面はナデ。 内面のナデは渦巻状になる。		在地系		残0.7
第2遺構面 溝 第26図110	皿	底径4.9	土師器 白雲母 白灰色		内外面ナデ。 底部糸切り。 内面のナデは渦巻状。		在地系		残0.5
第2遺構面 溝 第26図111	皿	口径(10.4) 器高2.8 底径(5.2)	土師器 白雲母 灰褐色		内外面ナデ。 底部糸切りで、板状圧痕が残る。 内面のナデは渦巻状。		在地系		残0.7
第2遺構面 溝 第26図112	皿	口径9.9 器高2.9 底径6.3	土師器 白雲母 橙色		内外面ナデ。 底部糸切りで、板状圧痕が残る。		在地系		残0.7
第2遺構面 溝 第26図113	皿	底径7.0	瓦質土器？ 白雲母・砂粒 赤灰色		内外面ナデ。 底部丁寧なナデ調整。		在地系		残0.8
第2遺構面 溝 第26図114	皿	口径(9.3) 器高2.0 底径(6.0)	土師器 白雲母 灰色		内外面ナデ。 底部ナデ調整。				残0.6 内外面に油煙付着。
第2遺構面 溝 第26図115	瓦器塊	底径(5.8)	瓦器 細砂粒 黒灰色		内外面にミガキを施す。				残0.3
第2遺構面 溝 第26図116	銅		土師質土器 白雲母 黄褐色				在地系		残0.1
第2遺構面 溝 第26図117	碗		白磁 精良 淡黄灰色	透明	全体に貫入あり。 玉縁口縁。		中国系	12c	残0.2
第2遺構面 溝 第26図118	碗	口径(15.0)	白磁 精良 淡灰色	透明	玉縁口縁。		中国系	12c	残0.1
第2遺構面 溝 第26図119	湯釜	口径(17.0)	瓦質土器 白雲母・白砂粒 淡灰色		内面はヨコハケ、外面はミガキを施す。 全体的に煤付着。		在地系		残0.2
第2遺構面 溝 第26図120	火鉢	口径(32.1) 器高(9.7) 底径(21.8)	瓦質土器 雲母・白色粒 暗灰色		底部に脚を作る。 内面はヨコハケ、外面は指オサエとミ ガキ、底部はハケ目を施す。		在地系		残0.5
第2遺構面 溝 第26図121	青花皿	口径10.4 器高2.4 底径6.1	磁器 精良 青白色	透明	口縁部内外面と高台に圏線、見込みに 人物、流水文を描く。	量付釉剥ぎし、砂付着	中国系	16c～17c	ほぼ完形
第2遺構面 溝 第26図122	青花皿	口径11.3 器高2.6 底径6.2	磁器 精良 青白色	透明	内外面口縁部、見込み、高台に2条の圏線。 見込みに文人、草虫文を描く。 高台内款に「大明年生」。	量付釉剥ぎ	中国系 景德鎮 か？	16c後～17c	完形
第2遺構面 溝 第26図123	染付小坏	底径(2.3)	磁器 精良 白色	透明	外面に二重圏線を描く。 基筒底を呈す。	底部釉剥ぎ 見込みに砂付着	肥前系	19c後～20c前	残0.7
第2遺構面 溝 第26図124	碗	底径(7.0)	白磁 細石粒 淡黄白色	透明	胎土は粉っぽい。	高台露胎	中国系	12c	残0.2
第2遺構面 溝 第26図125	播鉢		瓦質土器 白砂粒 暗灰色		内面ヨコハケ、外面タテハケと指オサ エを施す。 播目の単位は不明。				残0.2
第2遺構面 遺構検出 第27図126	碗	口径(16.4) 器高 底径6	青磁 精良 青灰色	緑青色	内面と見込みに片彫花文を描く。	高台露胎	中国系 龍泉窯	12c	残0.4
第2遺構面 遺構検出 第27図127	碗	口径(16.0)	白磁 精良 灰白色	透明	玉縁口縁。		中国系	12c	残0.2
第2遺構面 遺構検出 第27図128	碗	高台径(5.2)	陶器 精良 赤褐色	緑灰色		高台内露胎 三日月高台	肥前系 唐津	17c前	残0.2
第2遺構面 遺構検出 第27図129	碗		白磁 精良 灰白色	透明	玉縁口縁。		中国系	12c	残0.1
第2遺構面 遺構検出 第27図130	碗	高台径(7.1)	白磁 精良 灰白色	透明	見込みに一条の沈線を施す。	外面下部から高台露胎	中国系	12c	残0.2
第2遺構面 遺構検出 第27図131	碗	高台径(5.6)	青磁 精良 黄灰色	緑黄色	内面と見込みに片彫り花文を描く。 全体に貫入あり。	高台量付から内部露胎	中国系 龍泉窯	12c	残0.2
第2遺構面 遺構検出 第27図132	碗		青磁 精良 青灰色	灰緑色	内面と見込みに片彫り花文を描く。	高台量付から内部露胎	中国系 龍泉窯	12c	残0.2
第2遺構面 遺構検出 第27図133	皿	口径(10.8) 器高2.2 底径5.8	青磁 精良 明白色	緑灰色	見込みにへら描きと、楕点描文を施す。	底部釉剥ぎ	中国系 同安窯 か？	12c	残0.8
第2遺構面 遺構検出 第27図134	皿	口径(10.8) 器高2.0 底径5.0	青磁 精良 明灰色	緑青灰色	見込みにへら描きと、楕点描文を施す。 底部に「五」の墨書。	底部釉剥ぎ	中国系 同安窯 か？	12c	残0.7
第2遺構面 遺構検出 第27図135	青花皿		磁器 精良 灰白色	透明	口縁部内外面と見込みに圏線を描く。		中国系 景德鎮 か？	16c後～17c	残0.1
第2遺構面 遺構検出 第27図136	青花碗	口径(12.6)	磁器 精良 白色	透明	口縁部内面に2条の圏線、口縁部外面 に圏線と草文を描く。		中国系 景德鎮	16c後～17c	残0.1
第2遺構面 遺構検出 第27図137	青花碗		磁器 精良 白色	透明	口縁部内面に2条の圏線、口縁部外面 に圏線と草文を描く。		中国系 景德鎮	16c後～17c	残0.1
第2遺構面 遺構検出 第27図138	青花碗	口径(13.0) 器高5.8 高台径5.2	磁器 精良 黄褐色	透明	口縁部内外面に圏線、外面に草花文、 見込みに圏線と草花文を描く。		漳州窯	16c後～17c前	残0.4
第2遺構面 遺構検出 第27図139	染付蓋	口径(7.8) 器高1.8	磁器 精良 黄灰色	透明	外面に区画して四方樺文を描く。	口縁部釉剥ぎ	肥前系	19c後～20c前	残0.3
第2遺構面 遺構検出 第27図140	染付小碗	高台径4.7	磁器 精良 白色	透明	内面に文様、外面に竹文を描く。	量付釉剥ぎ	肥前系	19c後～20c前	残0.6
第2遺構面 遺構検出 第27図141	染付碗	口径12.0 器高5.1 高台径4.7	磁器 精良 白色	透明	見込みに五弁花文、外面は丸文を描く。 内外面・見込み・高台外面に圏線を描く。	蛇の目釉剥で、見込みと量付 に砂付着	肥前系	18c～19c	残0.8
第2遺構面 遺構検出 第27図142	碗	高台径(7.0)	白磁 黒色粒 黄灰色	透明	見込みに楕目で花文を描く。 胎土は粉っぽい。	外面下部から高台露胎	中国系	12c	残0.2
第2遺構面 遺構検出 第27図143	皿	口径(11.5) 器高3.4 底径4.5	陶器 精良 橙褐色	暗灰色	見込み3カ所に胎土目痕が残る。	底部露胎 基筒底	肥前系 唐津	17c前	残0.7
第2遺構面 遺構検出 第27図144	色絵皿	口径(12.6)	磁器 精良 白色	透明	内面に葉文を描く。		肥前系	19c後～20c前	残0.1

図番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) () 復元値	胎の種類 胎の特徴	釉薬	調整・成形・装飾技法・特徴	窯詰技法	産地	年代	備考
第2遺構面 遺構検出 第27図145	皿		陶器 精良 赤褐色	透明	内面は白化粧土を薄く塗布する。 外面は白化粧土の上からハケ目。		肥前系 武雄	17c	残0.1
第2遺構面 遺構検出 第27図146	天目碗	口径 (12.0)	陶器 細砂粒 黄灰色	鉄釉	胴部下半は露胎。 胎土は粉っぽい。		瀬戸美濃		残0.2
第2遺構面 遺構検出 第27図147	皿	高台径 (5.3)	陶器 精良 明灰色	乳白色		高台内露胎	肥前系 唐津	17c前	残0.3
第2遺構面 遺構検出 第27図148	天目碗	口径 (12.0)	陶器 黒色粒 黄灰色	鉄釉	胴部下半は露胎。 胎土は粉っぽい。		瀬戸美濃		残0.2
第2遺構面 遺構検出 第28図149	皿	口径 (9.7) 器高2.5 底径 (4.8)	土師器 細砂粒 黄灰色		内外面ナデ。 底部糸切り。		在地系		残0.7
第2遺構面 遺構検出 第28図150	坏	口径 (10.0) 器高3.4 底径 (4.8)	土師器 白雲母 淡褐色		内外面ナデ。底部糸切りで、板状圧痕 が残る。 内面のナデは渦巻状になる。		在地系		残0.7 体部に穿孔を施す。
第2遺構面 遺構検出 第28図151	皿	底径2.6	土師器 細砂粒 淡灰褐色		内外面ナデ。 底部糸切り。 内面のナデは渦巻状。		在地系		残0.5
第2遺構面 遺構検出 第28図152	小皿	口径 (7.0) 器高2.1 底径4.2	土師器 白雲母・細砂粒 明橙色		内外面ナデ。 底部糸切り。		在地系		残0.7
第2遺構面 遺構検出 第28図153	皿	口径 (8.9) 器高2.5 底径5.3	土師器 橙色粒 淡黄褐色		内外面ナデ。 底部ナデ調整。		在地系		残0.8 底部に穿孔
第2遺構面 遺構検出 第28図154	皿	口径9.3 器高3.1 底径5.5	土師器 細砂粒 淡橙色		内外面ナデ。 底部糸切り。 内面のナデは渦巻状。		在地系		残0.9
第2遺構面 遺構検出 第28図155	皿	口径 (8.5) 器高2.3 底径5.5	土師器 白雲母・赤褐色粒 灰褐色		内外面ナデ。 底部糸切り。		在地系		残0.8
第2遺構面 遺構検出 第28図156	皿	口径9.5 器高1.8 底径7.2	土師器 白雲母 灰褐色		内外面ナデ。 底部糸切り。		在地系		残0.7
第2遺構面 遺構検出 第28図157	皿	口径 (9.2) 器高1.3 底径 (6.0)	土師器 白雲母・細砂粒 灰褐色		内外面ナデ。 底部糸切りで、板状圧痕が残る。		在地系		残0.3
第2遺構面 遺構検出 第28図158	鍋		土師質土器 雲母・白砂粒 橙褐色		内面ヨコハケを施す。		在地系		残0.1 外面煤付着
第2遺構面 遺構検出 第28図159	鍋		土師質土器 雲母・白砂粒 灰褐色		内面ヨコハケを施す。		在地系		残0.1 外面煤付着
第2遺構面 遺構検出 第28図160	鍋		瓦質土器 雲母・白砂粒 灰白色		内面はヨコハケ、外面上部は指オサエ、 外面下部はタテハケを施す。 内外面に煤付着。		在地系		残0.3
第2遺構面 遺構検出 第28図161	瓦器碗	口径 (15.4) 器高5.3 高台径 (5.1)	瓦器 精良 灰色		内外面ミガキを施す。 高台部はナデ調整。				残0.4
第2遺構面 遺構検出 第28図162	瓦器碗	口径 (16.6)	瓦器 精良 明灰色		内外面ミガキを施す。				残0.3
第2遺構面 遺構検出 第28図163	瓦器碗	高台径 (6.0)	瓦器 精良 暗灰色		内外面ミガキを施す。 高台部はナデ調整。				残0.5
第2遺構面 遺構検出 第28図164	瓦器碗	底径 (7.6)	瓦器 精良 黒灰色		内外面ミガキを施す。 高台部ナデ調整。				残0.2
第2遺構面 遺構検出 第28図165	瓦器碗	高台径 (7.0)	瓦器 精良 明灰色		内外面ミガキを施す。 高台部はナデ調整。				残0.4
第3遺構面 SK-202 第31図166	播鉢		瓦質土器 白・黒砂粒 明灰色		内外面ナデと指オサエを施す。 播目の単位は6条。				残0.2
第3遺構面 SK-202 第31図167	鍋	口径 (4.9)	瓦質土器 白雲母・細石英 黒色		内面タテハケ、外面指オサエとタテハ ケを施す。 内外面に煤付着。		在地系		残0.1
第3遺構面 SK-201 第31図168	碗?	高台径 (6.5)	青磁 精良 青灰色	暗緑色		高台内露胎	中国系 龍泉窯	12c	残0.3
第3遺構面 SK-204 第31図169	皿	口径 (10.4) 底径 (6.2)	陶器 精良 黄灰色	灰緑色	胎土は粉っぽい。	見込み円形に釉剥ぎ	瀬戸美濃		残0.5 底部に戸車片が融着。
第3遺構面 SK-206 第31図170	小皿	底径 (5.0)	土師器 金・白雲母・細砂粒 淡黄灰色		内外面ナデ。 底部糸切りで、板状圧痕が残る。		在地系		残0.6 内外面に油煙付着。 灯明皿として使用か。
第3遺構面 SK-206 第31図171	坏	底径 (6.4)	土師器 金雲母・細砂粒 淡灰黄色		内外面ナデ。 底部糸切り。		在地系		残0.4
第3遺構面 SK-206 第31図172	鍋		土師質土器 白・金雲母・細砂粒 灰褐色		内面ヨコハケ、外面ナデ後指オサエ。		在地系		残0.1 外面に煤付着
第3遺構面 SK-206 第31図173	播鉢		瓦質土器 白砂粒・白・金雲母 淡黄灰色		内面ヨコハケを施す。 播目の単位は8条。				残0.1
第3遺構面 SK-206 第31図174	染付皿	底径 (10.0)	磁器 精良 白灰色	青白色	見込みに園線と山水文・外面下部に園 線・高台内に園線と渦福を描く。	畳付釉剥ぎ	肥前系	17c後～18c前	残0.3
第3遺構面 SK-206 第31図175	皿	口径 (13.2) 器高3.2 底径 (3.6)	青磁 精良 灰色	緑色	片彫で花文を描く。	底部釉剥ぎ	中国系	12c	残0.7
第3遺構面 SK-206 第31図176	皿	口径 (12.0)	白磁 精良 白色	透明					残0.1
第3遺構面 SK-206 第31図177	碗	底径 (6.6)	白磁 精良 白灰色	透明		外面下部から高台露胎	中国系	12c	残0.2
第3遺構面 遺構検出 第31図178	皿	口径 (16.0)	白磁 精良 淡黄白色	透明	胎土は粉っぽい。	外面下半露胎	中国系	12c	残0.2
第3遺構面 遺構検出 第31図179	碗		青磁 精良 灰色	黄緑色	内面にへう描き文。		中国系 龍泉窯	12c	残0.1
第3遺構面 遺構検出 第31図180	皿		白磁 精良 灰白色	透明		見込みと畳付に胎土目痕あり	朝鮮系	16c	残0.1

図番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) () 復元値	胎の種類 胎の特徴	釉薬	調整・成形・装飾技法・特徴	窯詰技法	産地	年代	備考
表採 第32図181	坏	口径(16.6)	土師器 細石英・白雲母 灰褐色		外面ナデ、内面はナデ後ミガキを施す。		在地系		残0.2
表採 第32図182	鍋		瓦質土器 白雲母 黒灰色		内面ヨコハケ、外面タテハケと指オサエを施す。		在地系		残0.3
表採 第32図183	瓦器塀		瓦器 白色細粒 黒灰色		内外面ミガキを施す。				残0.1
表採 第32図184	瓦器塀	底径(6.6)	瓦器 白雲母 灰白色		内面ミガキを施す。 高台部はナデ調整。				残0.2
表採 第32図185	皿		青磁 精良 白灰色	淡青色		高台内蛇の目釉剥ぎし鉄漿を施す	中国系 龍泉窯	13c~14c	残0.3
表採 第32図186	碗	口径(10.0) 器高(4.6) 底径(4.2)	磁器 精良 白色	透明	見込みに文様、内面口縁部に金で圏線を描く。	畳付から高台内露胎	肥前系	19c後~20c前	残0.4
表採 第32図187	染付皿	底径(12.0)	磁器 精良 灰白色	透明	内面に草花文と圏線、外面に文様、高台と高台内に圏線を描く。	畳付釉剥ぎ	肥前系	19c後~20c前	残0.2
表採 第32図188	染付小鉢	口径8.0 器高2.6 底径4.0	磁器 精良	透明	見込みに草花文、口縁部と外面に点や線で文様を描く。	畳付釉剥ぎ	肥前系	19c後~20c前	完形
表採 第32図189	染付皿	口径(10.8) 器高2.1 底径(6.6)	磁器 精良 白色	透明	内面に紅葉文を描く。	畳付釉剥ぎ 口縁部に鉄漿を施す	肥前系	19c後~20c前	残0.3
表採 第32図190	色絵鉢		磁器 精良 白色	透明	内面に橙、朱、青色を用いて松・鳥・網文を描く。外面高台付近に圏線を描く。	高台内蛇の目釉剥ぎ			残0.2
表採 第32図191	戸車	長さ5.0 幅5.0 厚さ0.9	磁器 精良 白色						完形
第3遺構面 SK-206 第33図192	右鎌軒棧瓦 瓦当部	瓦当厚3.6 厚さ1.9	瓦質 灰色		三葉唐草文。 凹凸面ナデ調整。		在地系		残0.3
第3遺構面 SK-106 第33図193	軒平瓦		瓦質 灰白色		主文不明の唐草文。 凹凸面ナデ調整。		在地系		残0.2
第1遺構面 SK-45 第33図194	軒丸瓦		瓦質 灰色		巴文。 凹凸面ナデ調整。		在地系		残0.2
第2遺構面 溝 第33図195	右軒棧瓦	厚さ1.8	瓦質 橙褐色		巴文と主文不明の唐草文。 凹凸面ナデ調整。		在地系		残0.3
第2遺構面 遺構検出 第33図196	右軒棧瓦	瓦当厚(4.6)	瓦質 灰色		巴文。 凹凸面ナデ調整。		在地系		残0.2
第1遺構面 SK-76 第33図197	丸瓦	厚さ2.4	瓦質 灰色		凹面布目と鉄線痕、凸面ナデ、側端部はケズリ調整。		在地系		残0.4
第1遺構面 SK-76 第33図198	丸瓦	厚さ1.9	瓦質 灰白色		凹面布目と鉄線痕、凸面ナデ、側端部はケズリ調整。		在地系		残0.7
第1遺構面 SK-76 第33図199	平瓦	厚さ2.0	瓦質 橙灰色		凹凸面ナデ調整。		在地系		残0.3
第2遺構面 SK-116 第33図200	鬼瓦		瓦質 灰色		凹凸面ナデ調整。 文様は不明。		在地系		残0.3
第2遺構面 SK-112 第33図201	鬼瓦		瓦質 灰色		凹凸面ナデ調整。 文様は不明。		在地系		残0.2 全体的に被熱
第2遺構面 遺構検出 第34図202	木製品 漆椀蓋か	径6.5			つまみ部のみ遺存。 わずかに漆が残る。				残0.3
第2遺構面 遺構検出 第34図203	木製品 漆椀蓋か	径6.4			つまみ部のみ遺存。 わずかに漆が残る。				残0.3
第1遺構面 SK-76 第34図204	木製品 栓か	長7.1 幅2.8 厚2.3			面取りが施され、六角柱状。				完形
第2遺構面 SK-107 第34図205	木製品 栓か	長15.0 幅1.8 厚1.4			四角錐状に近い。				完形
第1遺構面 SK-76 第34図206	木製品 ヘラ	長26.2 幅4.8 厚1.0			復元するとしゃもじ状を呈すと考えられる。				残0.5
第2遺構面 溝 第34図207	木製品 下駄	長20.0 幅11.8 厚8.0			連歯下駄。 後歯が根元から折れる。				残0.7
第2遺構面 溝 第34図208	木製品 下駄	長11.2 幅8.0 厚6.1			子供用の割り下駄。				残0.8
第2遺構面 遺構検出 第34図209	木製品 包丁	長12.9 幅2.0 厚3.6			金属部が中に残る。				残0.5
第2遺構面溝 SK-115 第34図210	木製品 木札か	長10.9 幅8.0 厚1.1			中央に大きく穿孔し、そこから四隅にかけて紐擦れ痕が確認できる。 隅部に一か所釘孔がある。				完形
第2遺構面 遺構検出 第34図211	木製品 板材か	長21.1 幅3.8 厚0.5			両端に割り込みがある。				完形
第3遺構面 SK-205 第34図212	木製品 側板	長15.3 幅6.6 厚1.0							残0.9
第3遺構面 SK-205 第34図213	木製品 側板	長17.0 幅5.1 厚1.0							残0.8
表採 第34図214	不明木製品	長11.6 幅5.5 厚0.8			片方の短辺に3つ小さく穿孔する。 片面に刃物で細い削りを入れるが、装飾目的か。				ほぼ完形
第2遺構面 SK-115 第34図215	不明木製品	長9.6 幅2.5 厚1.1							残0.9
第2遺構面 遺構検出 第34図216	木製品 木筒	長11.0 幅1.9 厚0.5			墨書等は確認できない。				残0.8

図番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) () 復元値	胎の種類 胎の特徴	釉薬	調整・成形・装飾技法・特徴	窯詰技法	産地	年代	備考
第2遺構面 遺構検出 第34図217	木製品 底板か	長24.0～ 幅8.0～ 厚0.6			両面に漆を施す。				残0.3
第2遺構面 遺構検出 第34図218	木製品 底板か	長16.0～ 幅4.5～ 厚0.6			両面に漆を施す。				残0.2
第3遺構面 SK-202 第35図219	木製品 転用まな板か	長32.0 幅3.9 厚4.0			刃傷が無数につく。				残0.3 221と同一個体か
第3遺構面 SK-202 第35図220	木製品 転用まな板か	長32.2 幅9.8 厚5.0			縁辺部に樹皮を通した痕跡がある。 中央に漆をかけ、刃傷が無数につく。				残0.7 220と同一個体か
第2遺構面 遺構検出 第35図221	不明木製品	長11.2 幅5.2 厚4.7			上下は連結用の割り込みのようだが、 遺存状態が悪く不明瞭。				特殊遺物
第2遺構面 遺構検出 第35図222	鉛玉	22 g							特殊遺物 火縄銃の銃弾か？
第2遺構面 SK-105 第36図223	石製品 石鍋				滑石製。縦耳型か。 外面ノミ痕が残る。			10c後～11c	残0.1 全体に煤付着
第1遺構面 SK-60 第36図224	石製品 石鍋				滑石製。縦耳型か。 外面ノミ痕が残る。			10c後～11c	残0.1 全体に煤付着
第2遺構面 SK-121 第36図225	石製品 石鍋転用品				滑石製。縦耳型。 外面ノミ痕が残る。穿孔あり。			10c後～11c	全体に煤付着
第2遺構面 遺構検出 第36図226	石製品 バレン状石製 品				滑石製。縦耳型。 穿孔を施した突起を持つ。			10c後～11c	一部煤付着
表採 第36図227	石製品 石垂				滑石製。縦耳型石鍋転用品。 中央がくびれ、切込みがある。			10c後～11c	
第2遺構面 遺構検出 第36図228	石製品 石鍋				滑石製。 外面ノミ痕が残る。				外面煤付着
第2遺構面 溝 第36図229	石製品 石鍋転用品				滑石製。 穿孔を2か所施す。				全体に煤付着
第2遺構面 溝 SK-115 第36図230	石製品 砥石	長9.1 幅4.9 厚1.9							
第2遺構面 遺構検出 第36図231	石製品 砥石	長11.5 幅5.5 厚3.5			砂岩製。 残存する2面を使用。明瞭に擦痕が残る。				
第1遺構面 SK-13 第36図232	石製品 砥石	長9.3 幅4.0 厚3.7			砂岩製。 六角柱状で全ての面を使用。				
第2遺構面 SK-115 第36図233	石製品 砥石か	長33.6 幅15.0 厚7.0			明瞭な擦痕が多く残り、砥石として使 用か。転用の可能性もある。				完形
第3遺構面 SK-206 第36図234	石製品 凹石か	長9.1 幅8.3 厚5.9			2か所に窪みあり。				完形
第2遺構面 SK-115 第36図235	石製品 叩石か	長7.1 幅6.7 厚6.7			球形。2か所に打ち欠けたような痕跡 あり。				完形
第1遺構面 SK-46 第36図236	土製品 土鍾	長4.4 幅1.2 厚1.1	土師質 明橙色		手捏ね。				残0.8
第1遺構面 SK-46 第36図237	土製品 土鍾	長4.2 幅1.0 厚1.0	土師質 赤橙色		手捏ね。				ほぼ完形
第1遺構面 SK-46 第36図238	土製品 土鍾	長5.0 幅1.1 厚1.0	土師質 橙灰色		手捏ね。				ほぼ完形
第2遺構面 SK-116 第37図239	宝篋印塔 相輪	高27.4 幅10.8			安山岩製。				完形
第2遺構面 溝 第37図240	五輪塔 空風輪	高15.7～ 幅13.4			安山岩製。 空輪下部にノミ痕が残る。				残0.9
第1遺構面 SK-1 第37図241	五輪塔 火輪	高14.2 幅29.6			凝灰岩製。				残0.9
第2遺構面 溝 第37図242	五輪塔 水輪	高12.0 幅21.4			凝灰岩製。 壺型。				ほぼ完形
第2遺構面 溝 第37図243	五輪塔 水輪	高11.4 幅16.9			安山岩製。 壺型。				完形
第1遺構面 第38図244	咸平元宝	直径2.4						初鑄998年	
第1遺構面 第38図245	洪武通宝	直径2.3						初鑄1368年	
第1遺構面 第38図246	洪武通宝	直径2.3						初鑄1368年	
第1遺構面 第38図247	洪武通宝	直径2.3						初鑄1368年	

圖 版

1. 本城町遺跡調査区遠景
(北から)



2. 本城町遺跡調査区遠景
(西から)



3. 本城町遺跡調査区遠景
(東から)





1. 本城町遺跡第1遺構面完掘状況（東から）

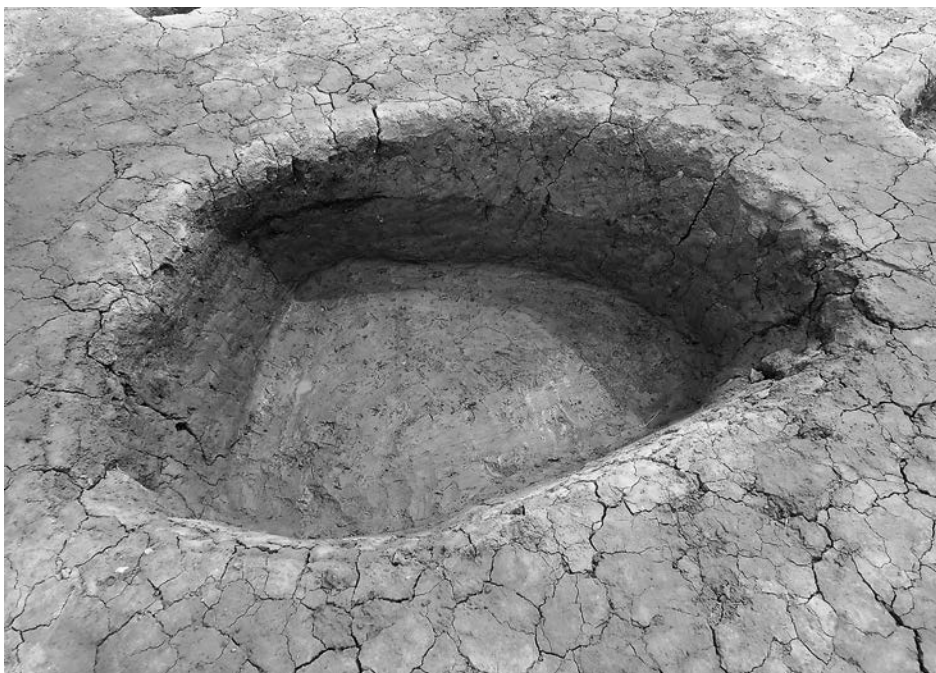


2. 西側壁面土層堆積状況（南から）



3. SK-1完掘状況（東から）

1. SK-13完掘状況（北から）



2. SK-76完掘状況（東から）

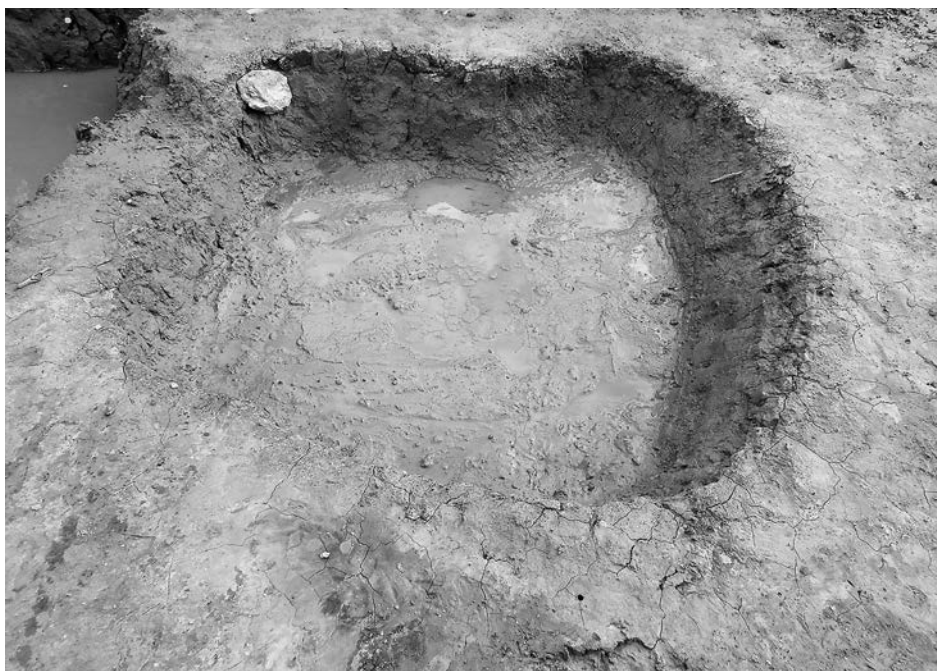


3. 石列密集状況4（北から）





1. 本城町遺跡第2遺構面完掘状況（真上から）



2. SK-105完掘状況（北から）

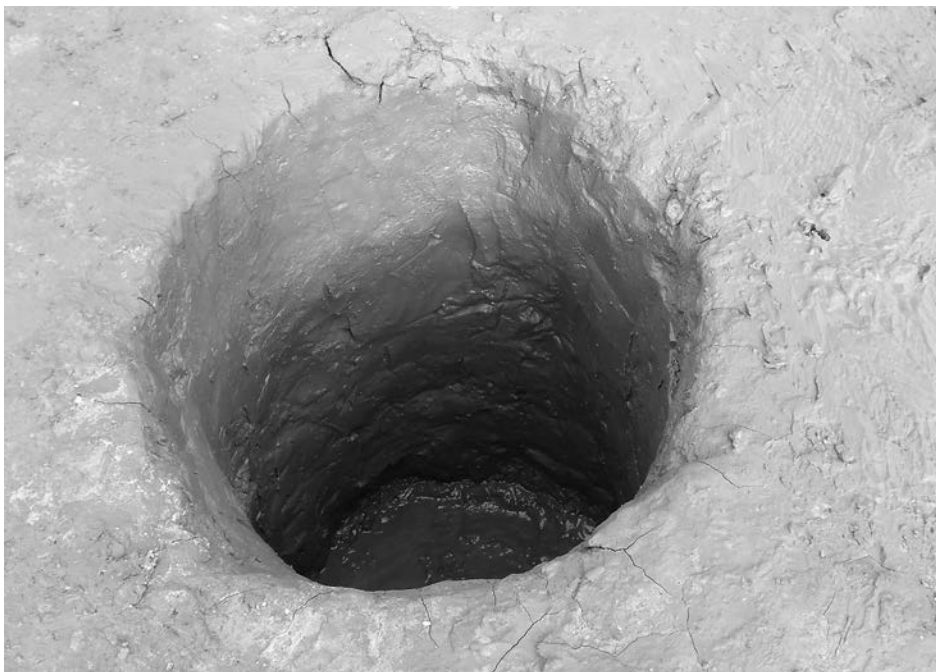


3. SK-112完掘状況（南から）

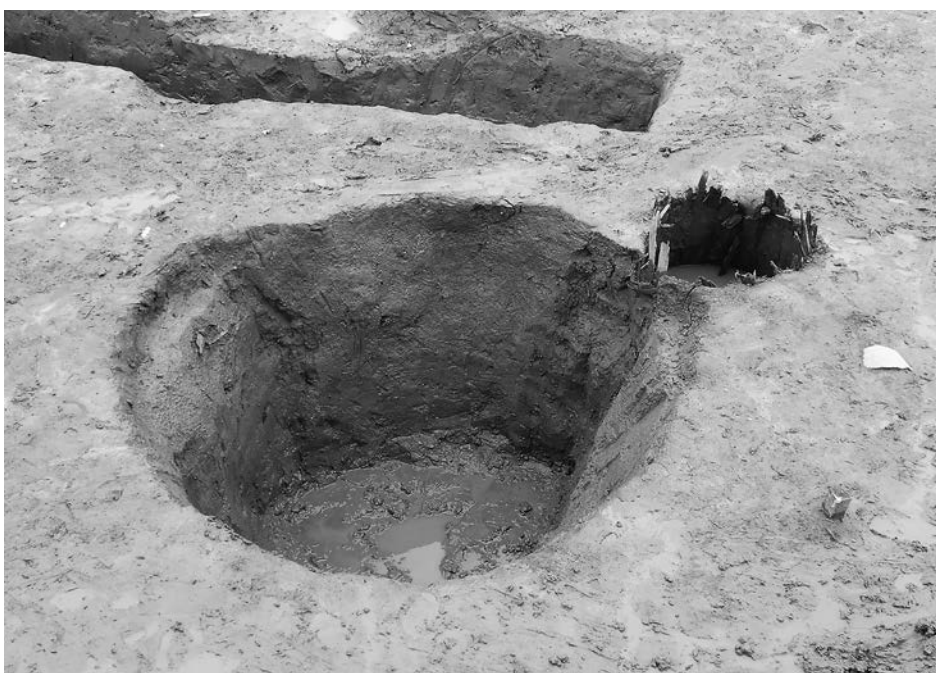
1. SK-116完掘状況(東から)



2. SK-117完掘状況(西から)



3. SK-118完掘状況(東から)





1. 第2遺構面溝完掘状況(西から)



2. 溝西側壁面土層堆積4状況(東から)



3. 溝堆積有機物出土状況(北から)

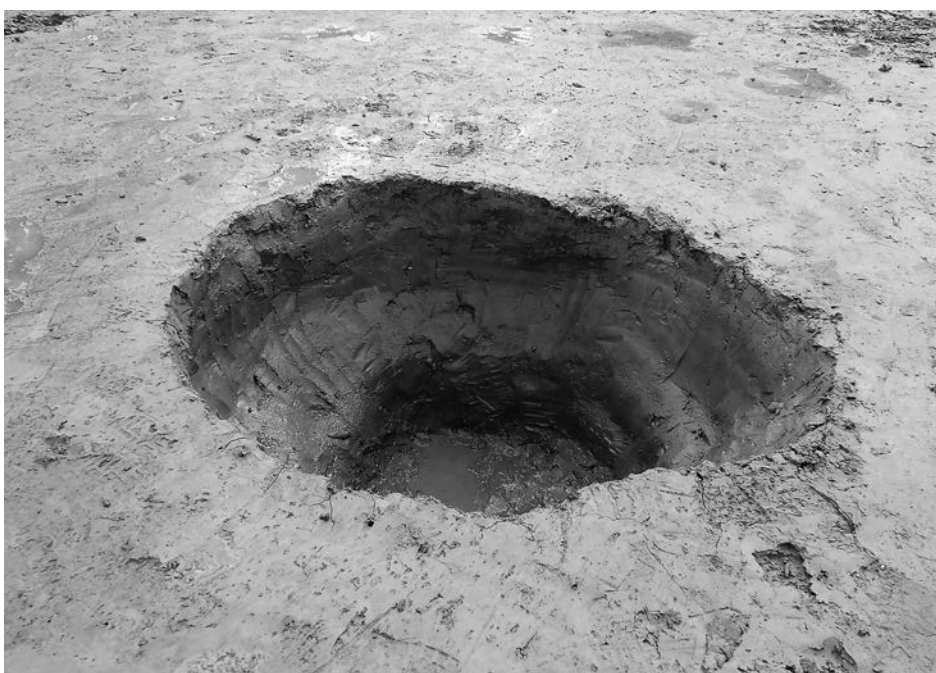
1. 本城町遺跡第3遺構面完掘状況（真上から）



2. SK-200完掘状況（東から）



3. SK-202完掘状況（北から）





7



25



8



28



9



29



10



22



23



24



30



出土遺物②



74



75



79



85



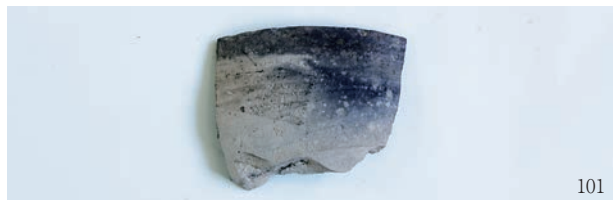
90



91



96



101



103



104



117

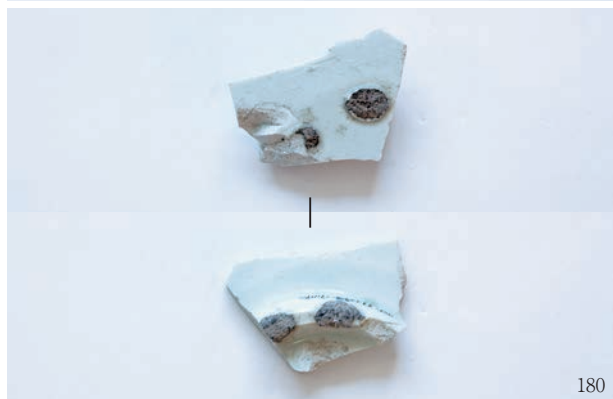
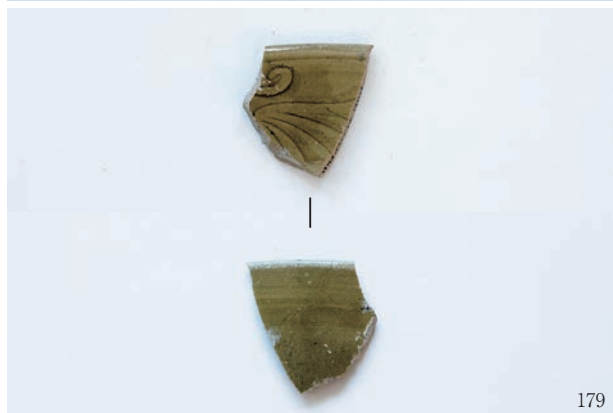


119



120









報 告 書 抄 録

ふりがな	ほんじょうまちいせき								
書名	本城町遺跡								
副書名									
巻次									
シリーズ名	柳川市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第15集								
編著者名	橋本清美 大津諒太								
編集機関	柳川市教育委員会								
所在地	〒832－8555 福岡県柳川市三橋町正行431								
発行年月日	2019年 3 月29日								
ふりがな	ふりがな		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		(㎡)	
ほんじょうまちいせき 本城町遺跡	ふくおかけんやながわ しほんじょうまち 福岡県柳川市本城町 27－3		40207	80193	33° 9′ 43″	130° 24′ 5″	2017.7.31 ～ 2017.11.23	650	学生寮 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
本城町遺跡	城下町	近世	土坑・溝・柵列		陶磁器・木製品・瓦・銅銭			16世紀末～幕末	
当遺跡は、有明海に面した筑後平野の南西部、筑後川左岸と矢部川右岸に挟まれた標高3.8m程の沖積平野上に位置する。近世柳川城の北三の丸である。城下町の生活遺構とこれに伴う遺物を確認することができた。遺物は土師器、瓦質土器、輸入陶磁器、近世陶磁器、木製品、石製品、鉄製品、銭貨が出土している。									

本 城 町 遺 跡

柳川市文化財調査報告書

第15集

平成31年（2019）3月29日

発 行 柳川市教育委員会

〒832-8555 福岡県柳川市三橋町正行431

電話 0944-77-8832

印 刷 大同印刷株式会社

〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町大字上和泉1848-20

電話 0952-71-8520(代)